
異世界に召喚されて

レイフォルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に召喚されて

【Nコード】

N2269V

【作者名】

レイフォルス

【あらすじ】

日常と非日常の境界は曖昧だ。ふとした瞬間に日常に非日常が顔を出す事もある。日常の影に潜む非日常の存在に気付いた者は、二択の選択を強いられる。

このまま何も知らないまま唯日常を過ごすか、或いは非日常の世界を知ろうするか。好奇心、興味、理由は何だって良い。

しかし、その世界を知ってしまった時、もう後戻りは出来ない。

前者は兎も角、後者には――

命の保証等は何処にも存在しないのだから……。

このお話は非日常の世界に身を置く青年が異世界に召喚されてしまう物語です。

序章（１）

丑三つ時。１人の人間が高層ビルの屋上に佇んでいた。全身を漆黒の外套で包み、頭もフードで覆われて顔も見えない。

ポツンと静寂が支配する空間に佇み、ズボンのポケットの中に手を突っ込んでいる。その人物は憂い気味に溜息を吐き出すと、遙か真下にある地上を見下ろす。

高見から見下ろす景色は何もかもがちつぽけで、けれど美しかった。１つ１つ集まった色鮮やかな点が絶景と言える景色を作り出し、夜の世界を彩っている。

「さつさと終わらせて早く寝よ」

女性とも男性ともとれるやや高めの声が漏れる。その人物はポケットから手を出すと、自分の足元を見やった。

其処には鈍く光る長い棒…… H & a m p ; k M S G 9 0 と言うサプレッサー（消音器）付きのスナイパーライフルが鎮座していた。

この H & a m p ; k M S G 9 0 はグリップ及びレシーバー機関部、ストック等を簡素化し同時に軽量化を図っている。

スコープはより遠射に適した物を装備できるように着脱式としている。

また、フォア・ショルダーストックは戦場での過酷な環境下で影響を受けにくい強化プラスチック製となっており、射手の体格に合

わせてアジャスト可能となっている。

この様に設計段階から軍用スナイパーライフルとして開発された経緯からセミ・オートマティックにもかかわらず、高い命中精度と耐久機能性を両立しており、完成度が非常に高い。

この事から米海兵隊では制式化を一時検討したが、この時は採用を見送ったものの軍特殊部隊では特殊作戦時に使用する為採用している。

「さあてと、殺るか」

伏射と呼ばれた姿勢を取り、引き金を引く手をストックの所定の部分を握る。人差し指を掛け、引き金を引かない手はストックに添えて固定した。

ストックは肩に当てるが、その間にパッドを挟むなど、呼吸や拍動によるブレが伝わりにくいようにする。

最後に頬にストックに当ててそのまま動かさず、その位置から狙撃
ストックサイト
眼鏡を覗き込んだ。
テレスコピ

住宅街、其処には化け物が居た。服も何も着ていない真っ黒の体に、人間にしてはやけに細長い両腕。顔も黒で、鼻や目、口など、顔を造形するパーツはなく、唯の平らだ。

のっぺらぼうのアヤカシだと言えばそうも見えなくもないが、兎に角異形の存在だ。ソレはこの世に在っていい者ではない。

ユラユラと揺らめいているその姿は人の形をした「影」に見えなくもないが、仕事帰りのサラリーマン達はその影をスルーして横を通り抜けていく。

いや、スルーと言うのは語弊がある。そもそも、彼等には“アレ”は見えていない、つまり感知出来ないのだから。

「風速は……13・9m/sか」

13・9m/sとは樹木全体が揺れ、風に向かって歩き難いと想像すれば良い。それだけの風が吹いているという事だ。

重力による弾道の下降、気温、気圧、湿度、風向きと風速等から若干の修正を行う。特に風に関するデータは狙撃に重大な影響を与えるため、考慮に入れる必要がある。

風向きをまず調べ、その上で風速を計算する。

「スウー……ンッ」

大きく息を吸い、呼吸を止める。精密射撃を成功させる為には呼吸による手のブレが伝わらない様にし、神経を極限にまで集中させる必要がある。

「風向き……弾道の軌道……もう少し前に動け、そうだ……」

照準線を目標に合わせ、射撃距離などを細かく調整する。そして化

ターゲット

け物がもう一歩足を踏み出し、体を前に出した瞬間、

引き金に添えていた人差し指に力を込め、引く。パシュッと銃口から銃弾が発射され、発射による振動が両腕を伝った。

序章（2）

銃身の腔内に施される螺旋状の溝、腔綫により銃弾が回転する。回転する事によってジャイロ効果が発生し、銃弾の姿勢が乱れ難くなるのだ。

放たれた弾丸は風等の影響で若干軌道が逸れるものの、それも計算に入れていたのか標的にはほぼ直進で進んで行った。

そして弾は影の首を捉え、打ち抜く。首と体を繋げる肉は銃弾の衝撃に絶えられる筈もなく、胴体から千切れ飛び、頭は遙か後方へと吹き飛んだ。

胴体は地面に伏し、沈黙する。

「……………」

狙撃手は沈黙した影を見るが、何かを考える様に狙撃眼鏡から目を離さない。何時もとは何かが違うと直感で感じ、様子を見ることにしたのだ。

その判断は数分後には間違つてなかったと確信する事になる。

倒れた影に変化が訪れ始めたのだ。胴体の首が在った場所の肉がブクブクと内側から膨らみだし、風船ガムのように丸く大きくなる。

ある程度の大きさまで膨らむと、肉を圧縮する様にグニャグニャと蠢き、踊る。内部で肉と骨が潰れる音を何度も響かせながらも、形が徐々に変わっていく。

その光景は見れば誰でも悲鳴を上げて逃げたくなるほどホラー的な光景だった。実際外套を纏った人物も「うへ……」と気持ち悪そうに口をへの字に曲げている。

最終的にはそれが頭の形へと変わり、影は首を左右に曲げると骨をコキコキ鳴らした。

「再生、しやがった……」

その声からは驚愕しているのだと感じ取れた。それでも手元を直ぐに動かしてライフルを構え直すと、やや呆然とした頭で風速や風向きを再び計算する。

「チツ、まさかこんなイレギュラーが起きるとはな。少し気を引き締めるか」

油断、そして慢心。そういった傾向が多い奴はまず間違いなく早死にする。予め最悪の状況を考えるのはいいが、今回の事は初めての経験だった。

そういった事には自然と焦りが生まれ、正確な判断が出来なくなる事もある。

焦るな、焦るなよ俺。距離はかなり離れているんだ。此处まで直ぐに来れる筈がない。

照準をゆっくり合わせながら自分にそう言い聞かせる。指に力を入れて引き金を引こうとした刹那、ピクリと、不意に指が止まった。

頬から一筋の汗が滑り落ち、地面に黒い染みを作る。

「……何だ、あの額の眼は」

狙撃眼鏡に映っていたのは、額がパツクリと横へと一直線に裂け、キヨロキヨロと辺りの様子を見渡し1つの眼だった。

額に付いた眼はやかで辺りを見渡し終わると、狙撃眼鏡越しにその眼と視線が交わった。

「つつ!」

その瞬間、この身を戦慄が貫ぬき、肩が震える。影が、影が此方に指を差し、ある筈がない口を不気味に吊り上げ、微笑んでいた。

序章（3）

「くっ！」

嘗て無い程の危機感に全身が震えた。地に付けていた右肘で地面を強く打ち、その反動で左側へと転がる。

刹那、何かが横を高速で擦り抜け、それはコンクリートを意図も簡単に溶かして見せた。ドロドロとアイスの様に蕩け、抉れた丸い溝が一直線に出来ている。

「つつえ！、眼からレーザーとかどんだけだよッ！」

硬い地面に転がった際に背中を思いつきりぶつけてしまい、外套の人物は背中を押えて喚く。

キツと双眸を細めて影を睨み付けると、今まで包んでいた雰囲気ガラリと音を立てて崩れた。

「……潰す」

ゾクツと身の毛もよだつ低い声で呟き、フードで隠れた眼光が怪しく光る。H & a m p ; K M S G 9 0 を構え直すと再び照準線を合わせる。

銃弾の軌道を計測し、引き金を引く。無慈悲に放たれた弾丸が風を切り、影の左足を吹き飛ばす。続いて次弾、今度は右足を射抜いて影の態勢を崩させた。

情けなく顔面から地面に倒れる影を肉眼で一瞥すると、もう一度頭を狙い撃った。しかし、今度は首事吹き飛ぶ事は無く、穴が開くだけ。

しかし、その穴も数秒後には何事も無かったかのように塞がれ、両足も既に再生する。

「……現代武器じゃ駄目か」

再生し始めた影から視線を離さず、落胆が混じった声で言う。小さく舌打ちすると、手元にある H & a m p ; K M S G 9 0 に左手を翳す。

「滅」

短くそう呟くと、ライフルに変化が起き始めた。先端からキラキラと輝く粒子が出始め、漆黒の闇を微かに照らし始めたのだ。

少しずつライフルが原型を失い、形を失っていく。数秒後には何も存在しない空間がポツンと取り残される。

「行くか」

地を蹴り、ビルから跳び下りる。この高層ビルから跳ぶのは自殺行為以外の何物でもないが、数メートル落ちる毎に足元に鉄板が現れ、それを蹴って移動していた。

進むごとに眼前に足場が出現し、左斜め下向きに鉄板を出すと身体の重心を右側にクイツと傾け、両足をバネの様にして鉄板に蹴りを入れる。

同じような鉄板を左右交互に出し、滑空するかの様に影へと高速で突き進んだ。

住宅街の細い道には2体の人影が対峙していた。1人は全身を漆黒の外套で染め、顔はフードで隠れている。

外套の上からでもウエスト辺りは括れ、かなり華奢な体付きだ。手も細く、水仕事とは縁の無さそうな雪の肌。その一部分だけでも大抵の人はその人物が女性と予想するだろう。

フードの隙間から僅かに窺える肌は色白で、ふっくらで柔らかそうな両頬の間に綺麗な蕾が妖しく弧を描いている。

顔は隠れており、性別を判断する材料が乏しいから何とも言えないが、この時点で性別はまず女性寄りだ。

一方もう一つの人影は闇色に紛れる様に黒一色で統一された身体。住宅街の街灯が無いと見分けがつかない程に黒い。

四肢も異常に長く、闇夜に人を追い掛ける“影”のよう。これだけでまず人間のカテゴリーから外れる。

口端は相変わらず吊り上り、不快な笑みを浮かべている。額の中心には紅色の瞳孔が左右に忙しく動き、聴ては外套の人物一点にその視線が注がれた。

背丈は両手足が長いせいかな非常に高く、それだけでも十分な威圧力があつた。

序章（4）

「……………」

外套の人物は敵が目前に居ると言うのに、双眸を閉じ、眼球から得られる全ての情報を遮断した。

しかし、たったそれだけの事で場の空気が物々しく変わる。穏やかだった月夜の雰囲気殺伐と化し、空間がメシメシとと軋み始めたのだ。

そして、得体の知れない圧力が影を襲う。物理的に重くなった訳でもないのに、両膝をついてしまいそうだった。

本来なら無防備な外套の人物の姿に影は何時でも襲い掛かれた。だが、急激に変化した目の前の獲物に本能が危険と見做したのだ。

それほどの“何か”が変わった。例えば入れてはいけないスイッチを押してしまった様な、怒らせてはならない者を怒らせた様な。

それは漠然とした、しかしこの身を溢れんばかりの殺気を意図も簡単に飲み込んだ何かが、外套の人物が纏っている。

形容し難いモノに頭の中で警告音をフルに鳴り響かせ、ちっぽけな脳味噌が今にでも動き出そうとする身体を静止させた。

「幾星霜、この世に闇は蔓延るばかり——」

「——現神は墮落し、全を見放し、訪れるは八熱地獄」

「神々の聖約により、この世の闇を打ち払さん！」

ソプラノの声が詩を歌う様に紡ぐられ、光粒となって形を成している。縦に細く、横に長く。

小さな光の玉は何かを形成していく。1つ1つは僅かな灯、儚く危うい光の精。しかしどれもが力強く、集ればそれは太陽を超える。

「出でよ、鋼龍蓮華刀！」

その瞬間、光の粒が破裂し、その場を黄色い閃光が弾けた。闇色に染まっていた夜は一瞬だけ昼間の様に明々しくなる。

蒼天で照らす太陽の如く闇を晴らした。

閃光は徐々に輝きを無くし、再び闇が覆い被さる。成す術が無く飲み込まれた光は闇に変換され、静かな夜が訪れる。

影は眩しさのあまり片腕で遮った腕を下ろす。その額の眼に映ったのは、宙を浮く一振りの刀だった。

序章（5）

柄を掴み、抜き放つ。その動作は自然で、刃物を扱ったことが無い素人の様な動きは微塵も感じさせない。

2、3回刀を屈^ぐぎ、感覚を確かめている事から、最近ではあまり使っていないなかったのだろうか。

その一振り毎に烈風が巻き起こり、近くに落ちていた空缶が真つ二つに裂けながら何処へと消える。

柄には紅い龍が巻き付いた姿が描かれ、刀身は人の血を吸込んだかの様な紅色。

鰐は龍の頭を模した物になっており、眼の所には蒼い宝石が埋め込まれている。

その刀は有名なRPGのゲーム等で良く出てくるドラゴン系の武器を彷彿とさせる代物だった。クルリと手の内で回転させると、鞘に納める。

最後に親指で押し込み、カチャツと凜とした鈴の音に似た音を響かせると、禍々しかった空気が浄化された。

「さて、行くぞ……」

腰を低く落とし、指先で柄を撫でる。居合の動作に入った途端、外モーション套の人物の姿が一瞬で掻き消える。

刹那、数秒とも言える時間の中で、影の前に下り立つ。揺らいだフ
ードの中から僅かに見えた眼は、血に飢えた紅い右目と紫の眸眸。

影は反射的に右手を伸ばし、ガードしようと試みるが、その腕が伸
びる事は無かった。

何故なら、その右腕は既に肘から先を斬り飛ばされ、何も無いのだ
ら。常人には抜き放つ瞬間さえも分からぬ程高速に刀を振り、再び
鞘に納めた。

第三者からの視点で見れば影の腕が勝手に落ちた様に見えただろう。

理解不能。理解不能。理解不能。

影の脳内をこの四文字が埋め尽くす。

何故何時の間にか目の前に居る？

何時の間に腕を斬り飛ばされた？

コイツハ、本当に人間なのか？

その言葉が脳内を何度も反響した。しかし、当然は答えは返ってく
る事は無い。

一瞬一瞬。瞬きをする毎に体のパーツを失っていく。右腕、左肩、
両足、最後に首。

高速再生が間に合わないほど圧倒的に、完膚無きまでに。

僅かな時間の中、影は悟った。自分は、相手にしてはならない者を相手にしてしまったのだと……。

「死ね！」

構えた刀は、心臓部に深く突き刺さった。続いて、パリーンと影の核が割れる音。

どの生き物も核を潰されれば息絶える。コレにも例外は無い様で、額の眼が大きく見開かれると静かに瞼を閉じた。

そして体がサラサラと砂の様になり、やがては風で全てを吹き飛ばされた。

外套の人物は「最初から心臓狙ってれば良かった……」と嘆息を零すのだった。

序章（6）

『全く、十夜はこの程度の相手になに苦戦しているわけ』

突如、その場を低い声が響き、十夜と呼ばれた人物は左手に握った刀に視線を落とす。その刀は青白い光を纏っており、声の発生源はまさしくソレからだった。

「んだよ翠^{すい}。何か文句でもあるのか……？」

流石にもう眠いから勘弁してもらいたいのだが……。

そんな俺の細やかな願いとは裏腹に、翠は「文句大有りだわ！！」と叫んだ。

その返答に俺はやれやれと肩を竦めながら我が愛刀を見下げる。この刀には付喪神と言って、神様が宿っている。

因みにこの“付喪神”、正しくは“九十九”と書き、この九十九は『長い時間（九十九年）や経験』『多種多様な万物（九十九種類）』等と象徴している。

長い時間、経過や経験を意味し、「多種多様な万物が長い時間や経験を経て神に至る物（者）」のような意味を表すとされる。

まあぶつちやけ、色々と煩いだけだな。

『って、ちゃんと話し聞いている！？ 十夜の所為で金曜洋画劇場が見れなかったじゃない！！』

「えゝ！？ それ俺の所為？！」

『当たり前よ！！ あんな雑魚に手古摺るから！』

ざ、雑魚って……。折角苦勞して倒したのに……。

でも、俺が手古摺ったの事実だし、言い返せねえ。

ガクツと見るからに氣落ちした十夜の様子に、翠は慌てて声を上げる。

『ま、まあ、十夜が手作りケーキを作ってくれるのなら……許さないこともないわよ？』

「そんなんで許してくるのか？」

『ええ』

その返答に十夜は苦笑しながら氣を持ち直す。何だかんだ言いながらも翠は優しいのだ。

最初よりは幾分か声音が温くなった翠に十夜は笑みを浮かべる。

フード越しにだがその微笑みは翠にも見て取れ、『うつ！？』と恥ずかしそうに声を上げるのだった。

「さあて、早く帰るか」

『そうね』

踵を返し、帰宅路につこうとした瞬間――

――突然、十夜の足元に円状の“何か”が出現した。

「うおっ！？ 何だコレ！！」

十夜は驚愕しながら咄嗟に足にブレーキを掛け、後ろに慌てて跳び引く。ある程度距離を放すと現れたソレをじい〜と観察した。

何だアレは……魔法陣、魔法陣だよな……？ 生まれて初めてこんな見た……。

先程まで十夜が立っていた場所には丸い陣が地面に描かれている。ソレを眉間に皺を寄せながら眺めた。

その魔法陣の中心には六芒星があり、それを囲う二重の円。

線と線の間には複雑に入り組んだ解読不能の文字が蚯蚓の如く書かれ、六芒星の中心に空いた五角形の隙間には太陽らしきものが描かれている。

そして、その陣がいきなり輝きを放った瞬間、十夜の身体が物凄い引力で魔法陣へと引っ張られた。

ぬおおおおおおお！！ 何なんだマジでええええええええ！！

まるで掃除機のように十夜の身体を吸込もうとし、それに激しく抵抗

する。翠が自分の名前を必死に連呼しているが、構っている暇はなかった。

少しずつ確実にズルズルと引き摺られ、そして、

「うわあああああああああああああああああ！！！！」

耐え切れなくなった十夜は魔法陣へと吸い込まれていった。

十夜を吸込んだ陣は聴て地面から消え、その場を静寂だけが残るのでした。。

とある少女の日常（１）

とある一室。その部屋には１人の少女がベッドの上に眠っており、
「くーくー」と可愛らしい寝息を鳴らしていた。

部屋は全体的にピンク色で統一され、箆笥の上や少女の枕元には幾つもの縫い包みが置いてある。

「うつん……」

閉じたカーテンの隙間から零れ落ちる朝日が眩しく、少女が身動きし、小さな声を上げる。

着ているパジャマの胸元が動いた際に肌蹴、綺麗な弧を描く双丘が露出しそうで、しなかった。

寝易い態勢を確保すると再び心地良い微睡に包まれ、浮上していた僅かな意識が再び深く沈んでいく。

そのまま夢の世界へと旅立とうとした瞬間、

——ジリリリリリリリリリリリッ——

「ふにゃあ!？」

騒々しい目覚ましのアラームに少女、フィーナ・ウィングベルムは飛び起きる。

けたたましい高音を響かせる時計に慌てて手を伸ばし、スイッチを

ポチッと押した。

「ふう、吃驚したあ。この目覚ましは少し音が煩過ぎるなあ……」

でも、買い直すのもお金が勿体無いし、これで我慢しよう。

折角買ったんだから壊れまでは使わないと可哀想だもんね。

「んしょ」とベッドから勢いを付けて立ち上がると、猫の形をしたふわふわしたスリッパを履き、筆筒の元へと向かう。

引き出しから着替えを取り出し、そのままシャワー室へと向かって行った。

フィーナは姿見鏡の前に立つと、制服に身を包んだ自分を見やる。

3ボタンの付いた紺色ブレザーに青色のネクタイ。胸元には輝くエンプレムがあり、赤、青、黒、色んな色が交差するチェックスカート。

長く綺麗な自慢の金髪は背に流し、その場でクルリと1回転してみる。

スカートが風で舞い、見えそうで見えないギリギリな境界線を作り上げた。所謂チラリズム。

「うん、今日も完璧」

えへつと鏡の自分に微笑むが、その笑みは直に溜息へと変わる。

「はぁ……召喚の儀、やだなぁ……」

“召喚の儀”とは、これから自分の隣を歩いてくれるパートナーを呼び出し、契約する儀式の事だ。

この世界にはモンスターと総称される数多くの生き物が生息しており、遺跡にはゴーレムが擬態して居たり、山奥にはドラゴンの巣が在ったりする。

勿論強力なモンスターを使い魔にするには莫大な魔力と、召喚されたモンスターが提示する条件をクリアしなければならない。

その中には召喚士が己より強い力試しを挑む者も居るし、かなり危険な条件を突き付けられる事もある。まあ、こればかりは運しかないだろう。

フィーナは深く息を吐き出し、壁に設置したカレンダーに視線を向ける。

今日は4月1日。2年生の私は今日に召喚の儀式がある。私は所謂落ちこぼれで、何時も魔力を上手く使う事が出来ない。

その所為で魔法は殆ど成功せず、クラスからは落ちこぼれの烙印を押されてしまっている。

私は一生懸命頑張っているのにみんな馬鹿にするし……もしこれでまた失敗すればまた色々と言われるだろうなぁ……。

憂鬱な気持ちになったフィーナは二度目の溜息を吐くのだった。

とある少女の日常（２）

「行ってくるね、お母さん、お父さん」

立て掛けた写真立てに写る両親に挨拶をし、寮の部屋から出る。

フィーナが暮らす部屋は学生寮で、自室を出ると同じ扉が幾つも並んでいる。学生寮にしては結構広く、ワンルームに風呂や台所もあるし、設備も充実していた。

共用の大きなお風呂もある為、気分寄ってはそっちに足を運ぶことも屡ある。

其処からルーティス魔法学園までの距離は徒歩２０分掛かる。普通は寮と言ったら学園の敷地内にある筈なのだが、この学生寮だけは何故か住宅街に紛れていた。

その分各部屋のスペースがとても広く、過し易い為に別段フィーナは不満もないのが。

学生寮の下駄箱から靴を出し、玄関から外に出る。燦々と日射線を放出する太陽を仰ぐと、「はふっ」っと思を吐く。

何時も通り、３６５日、当たり前前に昇る太陽が何だか今日は恨めしい。

天気は雲一つない晴空だけど、日の光はフィーナの心まで届かない。足が重く、一步一步進む毎に帰りたい衝動が大きくなる。

はあ、学園、行きたくないなあ……。何か言われる度に一々凹む私も私だけど、劣等生に対して偉そうに踏ん返り返る輩が凄くムカツクわ。

誰だって失敗はする。それを指差して笑う人間なんて所詮その程度な者。其処等辺に転がっている石だとも思ってたればいいかも。

そうよっ！ 私はやれば出来る子なんだから、何時までもグチグチ言っても仕方ないよね！！

もう何百回目かの自己暗示を終え、マイナス思考をプラス思考に切り替える。

沈んでいた表情に生気が宿り、自然と歩幅も大きくなる。フィーナは家々が建ち並ぶ住宅街を抜け、近道である「立花自然公園」を横切る。

青々とした葉をつけた木々達が出迎え、しっかりと舗装された煉瓦造りの道を歩んでいく。

人工的な道路以外、この公園は一切手を付けられておらず、道から外れれば芝生が茂った緑が溢れる。

「うっっん、相変わらず此処の空気は澄んでいて、美味しい」

伸びをしながら大きく空気を吸い込み、身体の中の酸素を入れ替える。

「よし」っと笑顔を浮かべ、歩調を速めようとしたフィーナの目に、人が映りこんだ。

唯のジョギング中や犬の散歩中の人でなく、軍服を着た複数の人間。木々を超えた高い位置の場所に、彼等は映っていた。

「……何かあったのかな」

此処からは遠くて霞んで見えるが、緑色の軍服に軍用ヘルメットを被った軍人は遠くからでも目立つ。

「うーん、この位置じゃやっぱり良く見えないね」

軍人達が立っている場所は巨大な外郭の上だ。この要塞都市ヘルヴェルは三重構造の外郭で覆われており、外郭の上には量産型魔法兵器や機関銃などが襲撃に備え設置されている。

空に対しても安全処置が施されており、一見何もない大空には不可視のシールドで常日頃モンスターの脅威から護られていた。

シールドは特殊な膜で構成されており、必要不可欠な雨や光は遮断せず、外敵だけが侵入不可になっている。

——キーンコーンカーンコーン——

「やつば！！ 遅刻しちゃうー！！」

学園から響くチャイムの音に軍人達から意識が逸れ、フィーナは道を直走る。

ファイナが教室に着いた頃には^{ショートホームルーム}LHRが始まる5分前だった。

とある少女の日常(3)

「ふにゅ……」

LHRが終わった途端、フィーナは机に突っ伏しダレル。学園まで全速力で走ってきた為による過労だ。

あゝもう……結構早くから出たつもりなのに何で遅刻ギリギリになるかなあ……。

私って意外とトロイ？ もう少し早く出た方がいいのかな。

うーん、でも、あんまり早過ぎるのもやだな。

フィーナは何時も40分前には寮を出ているのだが、何故か何時もギリギリな時間で学園に到着していた。

と言うのも、単純に「立花自然公園」でゆっくり歩き過ぎなのだ。本人は無意識に歩調を遅め、自然をじっくりと眺めながら歩いているのが主に原因だろう。

まあ、自覚が無いから誰かに指摘されない限り一生気付きそうにない。

「やつ フィーナ。朝からお疲れだねえ」

そんなフィーナの肩をポンポンと叩き、労いの声が掛けられる。伏せていた顔をダル気に持ち上げ、首を横に傾けると、視界に緑髪の女子生徒が映った。

「何だティファか」

頭から爪先までその人物を観察すると、ボソツと呟く。その呟きを目敏く聞き付けたティファは、目を細めてフィーナを見やる。

「アンタねえ……人が折角心配して声掛けたのに、何だはないですよ何だは」

腕を組んで見下ろすティファに姿勢を正しながら「ごめんごめん」と謝る。元々本気で言っていない為、ティファは直に笑顔を浮かべると「許す!」と言った。

フィーナは背凭れに背中を預け、仁王立ちするティファを改めて見やった。

自然の緑を彷彿とさせれる濃い緑髪。整った細い眉毛にそれに掛かるほどの長さの前髪、両側の肩に着く位の長髪にはちょこんと耳先が少しだけ出ている。

淡紅色の形の良い唇に色白な肌色。繊細に作られた人形の様な綺麗な顔の輪郭をしていた。

観察するフィーナと視線が交わった途端に花が咲き誇ったかのように形を変え、唇が美しい曲線を描く。

白かった頬を僅かに桃色に上気させ、蒼色の晴眸を細めた。

「ん、なにに？ そんなに凝視されると照れるんだけど」

恥かしそうに頬をポリポリ掻くティファに首を横に振りながら苦笑する。

はあゝ 相変わらずスタイルいいし、美人だよね。胸は……勝ってるかもしれないけど、なによあの腰の括れは！

全体的に細いつていうか華奢だよね、羨ましい、実に羨ましい。私はもう少し、お腹周りのお肉を落としたいな……。

はふゝと嘆息しながらぶにゅっとお腹のお肉を掴む。フィーナは平均的にもかなり痩せている方なのだが、更に痩せている人を見ると自分も！！ っと思うのは女性として仕方ないだろう。

羨望の眼差しを向けながら授業の話をし出したティファの言葉に耳を傾けた。

魔法の始まり（１）

「——で、あるからして……」

「はあ……」

教師の声を右から左へと聞き流しながら小さく溜息を吐く。

フィーナの席は窓側の一番後ろと言う授業中に昼寝をするのは絶好の場所で、開け放たれた窓からは涼しげな風が入り込んでいる。

首を軽く巡らして生徒達の様子を窺うと、真面目にノートに記入する者や、教師の言葉に頻りに頷く者。頭をこっくりこっくり揺らしながら船を漕ぐ生徒も居た。

机の上に並べていた歴史の教科書を手に取ると、適当にページを捲る。フィーナにとってはこの教科書は１年の入学当時に既に読破してしまっていて、実に詰まらない紙の束でしかない。

他にも数学、物理、社会、家庭、古文、歴史、魔法理論、魔法実技、魔法工学、体育と、殆どの教科書は読み切っており、理解もしている。

フィーナは所謂天才で、テストも常に１位を独占していた。しかし、魔法が碌に使えないから一般生徒から「落ちこぼれ」と認識されているのだ。

勉強だけ出来ても、実践で成果を出さなければ意味はない。

勉強だけは誰にも負けるつもりはないけど……やっぱり、悔しいなあ……。

どうして私は上手く魔法が使えないんだろ。もし魔法が使えたら、皆に認められて、友達がもっと出来るかもしれないのに……。

このクラスでの唯一の友達は、ティファしか居なかった。

自分から誰かに話し掛けても無視されて、みんな話を聞いてくれない。それが凄く悲しく、切ない。

『目標は友達100人!!』

入学当時に決めた目標は既に色褪せ、自然消滅しそうだ。未だに二桁もいつていないのだから、救いようがない。

「うっん、諦めちゃ駄目。諦めは全ての可能性を殺してしまうわ。まだあと約2年あるんだから」

例え100人は無理でも、10人くらいは頑張れば出来るかもしれない。

別に同じクラスの人でないと駄目とかではないんだし、今度は他のクラスの人に声を掛けて見よう。

フィーナは胸に手を当てながらギュッと手を握るのだった。

「今は歴史の授業だから勉強しているフリはしないと不味いよね」

再び教科書をペラペラ捲り、読んでいるフリをする。何ページが捲つていると、とあるページで紙を捲る指先が止まった。

そのページにはイラストがあり、1人の杖を持った女性の前で跪く大勢の人達が描かれている。

タイトルには「新時代の幕開け」と書かれており、フィーナは「ああ」と思い出したかのように頷いた。

新時代、それは遙か過去の文化に新しく魔法が加わった時代の事である。魔法は、最初から存在していた訳ではないのだ。

遙か昔、それは力こそが全てで、全身を鎧で包む剣の時代だった。人の世は戦争で乱れ、多くの命達は戦場で散って逝った。

戦争が勃発すれば緑も減り、街は唯の瓦礫となっていく。この世界、アールヴェイムは荒地が多くなり、動物の姿も徐々に消えていった。

しかし、それでも人間達は争いを止めない。そんな人間達に遂に天罰が下された。

それは、アールヴェイムに「モンスター」と呼ばれる異形の存在を産み落とす事だった。

魔法の始まり(2)

モンスターは人間と勝るとも劣らない繁殖力でその数を増やし、年が過ぎる度に新種のモンスターが発見されるようになっていった。

最初は人間にとっては「モンスター」っと言っても猫や犬程度の力しか持たない脆弱な生き物だった為、何も気にする事はなかった。

しかし、彼等も進化する。人間に狩られてきた弱き者達は進化を糧に、少しずつ強靱な肉体や理性を手に入れていく。

そして、それは「ドラゴン」と呼ばれる恐るべき生物になり、今度は逆に彼等が人間を捕食し出した。

長い時を経て狩られる側から狩る側に回ったのだ。他にも進化を遂げたモンスター達は次々に人間を襲い、大きな国でさえもあつと言う間に滅ぼされた。

これにより人間達は戦争所ではなくなった。大国でさえも簡単に滅ぼせるモンスターの力を危惧し、彼方此方で勃発していた戦争が沈静化したのだ。

現時点でアールヴェイムの人口数は戦争の所為でかなり少なくなっていた。その何十倍もの数があるモンスターに一国ではまず太刀打ち出来ない。

人間等は必然的に、団結する事を強いられたのだ。長年殺し合ってきた国同士が新たな強敵に手を取り合って戦う、なんて皮肉だろう。

大多数の国の人間が集まった軍は最初こそは御互いギコチナク、小さな争いも少なくなかった。

だが、戦場に出ればみんな仲間だ。自分の背を預け、預けられて戦う騎士だ。国が違うからなんだというのだ。我らは同じ、人間だ。

命懸けで戦い、共に死線を潜り抜けていく毎に絆が生まれ、不仲だった国主同士の関係が次々に修復された。

それにより壁がなくなった人間達は仲間意識が高まり、兵士達の士気も更に上がったのだ。

そして人間達は自分たちが集ったこの地に前線基地として要塞都市ヘルヴェルの建設を開始した。

巨大な鉄の外郭で囲い、その上部に襲撃用の兵器を設置させていく。隙間なく安全な盾で囲う事により、モンスターからの脅威から幾分か逃れる事が出来た

時が経ち、人の人口も戦争前よりもかなり多くなった。消えた森は人間が責任持つて種を植え、自分達が燃やした自然を再び蘇らせた。要塞都市ヘルヴェルも無事完成し、この技術を他国へと伝えたりして国の強化を計ったりした。

だが、この時代でもっとも激戦を極めたという戦いが、刻一刻と迫っていた。

それは、モンスターの大軍勢が要塞都市ヘルヴェルに迫ってきているという1つの報告から始まった。偵察兵で偵察させた所によると、多種多様な種族が集まり、地平線まで埋め尽くされていたと言う。

この緊急事態に各国から何万もの軍勢が要塞都市ヘルヴェルに集結し、その数は億を超えた。ワールドジェネレーターモンスターの襲撃に備え、護りを強化し、此処で初めてAshieldgeneratorが導入された。

魔法の始まり(3)

前衛には頑丈な鎧に大きな盾を構えた重戦士が前衛に立ち、中衛に槍兵を配置する。

後衛に銃戦士を置き、遙か後方の外郭の上には弓兵と砲兵が待機している。

兵器と言ってもこの時代の技術力では大砲が精一杯で、当時はこれでも十分な破壊力があつた。

ライフルはボルトアクション方式で装填数もたった7発だが、精度、信頼性、価格、整備性、耐久性の面での優位性がある。

精密射撃に適した特性から、味方と敵が入り混じる前線で、味方を誤射してしまう確率も幾分か軽減出来ると予想された。

そして陣形も無事組み上がり、いよいよ運命の時がやってきた。

少しずつ姿が大きくなっていき、眼前を覆い尽くす程のモンスター達に恐怖しない者など、1人も居ないだろう。誰もが恐怖に震えた。

しかし、それでも彼等には引けない理由がある。自分たちの直ぐ後ろに、自分の帰りを待っている家族、友達、恋人、そして、帰るべき家があるからだ。

他国から派遣された兵士も同様だ。要塞都市ヘルヴェルが落とされれば、次は母国に矛先が向いてしまう。それだけは絶対にあつてはならない。

「全軍構えッッ！！」

総司令官の轟く声に武器を構えた。そして、前衛がモンスターと衝突した。

重戦士は絶対に崩れてはならない。前衛が崩壊すれば中衛、後衛と芋蔓式に全てが崩れる。重戦士が盾で防いでる間には中衛の槍兵が隙間から槍を突き立て、前衛の援護をする。

後衛は人間より巨大なトカゲ型のモンスターやゴーレムに攻撃し、牽制し続けた。

幾ら重戦士と言ってもゴーレムの攻撃を喰らったら一溜りもない。銃撃で蹈躡を踏んでいる所に外郭から砲弾を打ち込み、撃破した。

最初は順調に進んでいたが、とあるモンスターが姿を現してから戦場は一気に激変した。

「飛竜だあ！？ 飛竜が来たぞおおおおお！！！！」

すぐさま弓兵が大型弩砲に極太の矢を何本も設置し、発射させる。対空用に備えて開発した兵器だ。

予先には猛毒が塗っており、爬虫類の様な強靱な肉体を持っているモンスターでも、何処かしらに喰い込めば毒が一気に注入される。鱗がない場所なら尚更だ。

だが、飛竜もそう簡単に倒れてくれなかった。苦痛に咆哮を上げながらもシールドに攻撃し続ける。

シールドジェネレーター

最新科学の塊である当時のAshieldgeneratorはあまりの威力に内部の歯車が破損し、機能が停止してしまったのだ。

動力を伝えるパーツが壊れればエネルギーが発生する事はない。街に入り込んだ飛竜達は次々と外郭を破壊し、街を、人を蹂躪した。

魔法の始まり（４）

勢い付いたモンスター達は一気に畳み掛け、次々に人間を殺していく。

前衛が少しずつ押され始め、それでも隙間を作らない様に死に物狂いで剣を振う。外郭からの援護は飛竜の所為でままならない為、此方は此方で何とかするしかない。

しかし、倒しても倒しても切が無いモンスターの軍勢に心に輝が入り始め、それは諦観へと変わっていった。

目の前で殺され、唯の肉塊となっていく親友に地に膝を着きそうだった。「もう駄目なのか」「此处までか」、誰もがそう諦め掛けた時――

突然、空の色が変わった。漂う白い雲に別の色が塗られ、空の青色が侵食されていく。

「何だ、どうした、何があった」、急速な状況の変化に人々は戸惑い、モンスター達も様変わりした大空を仰ぐ。

争いの音だけが響いていた大地は静寂に包まれ、全員が緋色の空を見上げる。

明らかに自然の力ではない現象。天変地異の前触れだと言われればそれで納得出来る者も居そうだが、この紅は不思議と不気味さを感じさせなかった。

そして、状況はまた直に変わり、動き出す。次に起きた更なる現象に人々は驚愕に目を丸くした。

音もなく、1人の女性が空間に現れ、舞い降りたのだ。いや、“舞い降りた”という言葉は語弊があるだろう。

そもそも彼女は地に足を着いていない、何も存在していない空の上に立って居るのだから。

誰もが開いた口が塞がらなかった。人間+モンスターの視線はその女性に注がれ続けた。

摩く金髪、何処までも透き通ったブルーの瞳孔。全身を真つ白なローブで包み、左腰には一振りの剣が帯剣されている。

彼女が右手に持つ木製の杖を掲げると、凜とした綺麗なソプラノの声が戦場を波打つ様に木霊した。

「偉大なる神の眷属達よ、その怒りを治め、静まりたまえ。人間は貴方達が思うほど愚かで、滑稽な生き物ではありません」

「在るべき場所に帰りなさい。きっと今の神もそう望んでいる筈です」

言葉を紡ぎ終わると、ふっと優しげな笑みを零した。その嫣然とした微笑みが「もう大丈夫」と言っている様で、人間達は自然と膝を地面に着き、頭を垂れる。

モンスターは達は各自頷く素振りを見せると、方向転換し、その場を後にした。その姿に女性は満足気に頷き、次は人間等を見渡した。

「人の子よ、貴方達に身を護る新たな術を授けます。この力を使って多くの者を救って下さい」

彼女は「魔法」と言う名の神秘的な力を人間に伝え、それを伝え終えると其の場から姿が掻き消えるのだった

その日を境に、人の世界に「魔法」が広がり始め、同時に科学も進歩した。

結局彼女が何者だったかは解らなかったが、神の使いだという説が一番有力だ。

時が進む毎に科学と魔法が少しずつ融合し、現代の生活基盤が出来上がったのだ。

この世界、アールヴェイムには電気製品はなく、代わりに魔力製品として冷蔵庫や電子レンジ、自動車が製造されている。

名前の通り、エネルギー元は電力ではなく魔力だ。魔力を吸収して電力の代わりに稼働する様に作られている。

召喚の儀式（１）

「あふっ……」

右手で口を覆い、短く欠伸をする。眼を猫の様に何度も擦りながら溜まった涙を拭い去る。

午前も終わり、午後の授業。現在フィーナ達２年生は体育館に集まっており、教師が到着するまで各自でダラダラしていた。

主に他の人は仲の良い友達と談話に興じている様だが、眠そうな生徒はチラホラ何人か確認出来た。

食後の授業というものは睡眠欲を誘い、睡魔が戦いを仕掛けてくる。教師の声が子守唄に聞こえてくるなんて事はよくある。

今は季節的にも春な為、気持ちのいいポカポカとした陽気は更に眠気を誘う。

フィーナは日陰に移動すると、壁に背を預けながら女座りをする。下着を見られない様にスカートを丁寧に直すと、身体の力を抜いた。

ふぁ〜……なんだか淒く眠い。先生もまだ来ないし、暇だよ。このまま寝ちゃおっかなあ。

でも、先生が来たら、怒られ……。ちやうかも……。

チュンチュンと窓の外から聞こえる小鳥の囀りを心地のいいBGMにしながら、開いていた瞼が閉じる。数分後には規則正しい寝息が

聞こえ始め、意識のブレーカーが落ちた事を示した。

「むにゃむにゃ」と時折、口を動かしながら寝言を言うフィーナはとても可愛らしいが、彼女を中心にポツカリと穴が開いている。

周りの生徒達は眠るフィーナの事をまるで避けるかのように間を開け、何メートルも距離を取っていたのだ。

一体何が周りをそうさせるのか、何故彼女は、何時も孤独になってしまうのだろうか……。

ティファが体育館に到着した頃には、既に殆どの生徒が集まっていた。彼女の登場に生徒達、主に男子の視線が一気に殺到する。

自分の容姿には自覚はあるが、こつもあからさまな反応を何百回もされると流石に嫌になる。因みに女子一同からは冷たい視線を頂戴した。

「フィーナは何処かしら」

首を巡らして金髪の少女を探す。目立つ髪の色な為、案の定、睡眠を貪るフィーナは直に見つかった。

……あの子だったら、こんな騒がしい所でよく寝れるわね。私には煩過ぎてとてもじゃないけど寝れないわ。

まっ、今日の召喚の儀式はやっぱり緊張していたみたいだし、昨夜

はあまり眠れなかったかもしれないわね。

普通は終わった後にドツと疲れが来て眠くなるものなんだけど、やる前から既に眠る所が、フィーナらしいわねえ。

クスクスと笑いながら彼女の元に向かおうとするティファの眼前に、3つの影が立ちはだかった。

「ちょっと何よ貴方達。其処を退きなさい」

「おうおう、つれねえなあ？　だが、気の強い女は嫌いじゃない」

「ケケツ　オメエがティファ・ファーンネットだよな？　お噂はかねがね聞いているぜ」

「ふーん……お前があの方ファーンネット家の長女か」

デブ、チビ、ガリ、それぞれ体型に特徴がある3人組がティファを囲い、気味の悪い笑みを浮かべた。

召喚の儀式（２）

ゲヘへと下品な笑みを浮かべる三人組をティファは無視し、迂回してフィーナに近づこうとする。

しかし、壁の様にデブが眼前に立ち塞がり、ガリとチビがその脇を固めた。その行動に眉間に皺を寄せ、ティファは相手を睨む。

美人が睨むと迫力があると聞くが、相手は臆した様子もなくニヤリと口端曲げるだけ。

その余裕そうな表情がイラツとし、握り締めていた拳に更に力を加える。顔が徐々に俯いててき、前髪で表情が見えなくなった。

怒りのゲージが沸々と上昇する。

彼女は我慢強い方ではないのだ、何時大爆発するか分かったもんじやない。

何なのコイツ等！！ 段々苛立ってきたわ！！

もしかして喧嘩売ってる！？ だったら買ってやろうじゃない！！

無表情の顔とは裏腹に、胸奥にはメラメラと炎が滾っている。やる気満々だ。

「……デバイス、起動」

呟いた刹那、ティファが右腕に付けていたレザースレットが輝

き、その上に小さな黒い魔法陣が出現する。

陣はクルクルと時計回りに高速回転すると、一気に閃光が弾け、視界を白で覆い尽くした。

間近に居た三人組は光の眩しさに腕で双眸を隠し、ティファは両手の中に構築されていく物質の感触に心を躍らせる。

最悪だった機嫌が馴染みのあるグリップの手触りに静まり、小さく微笑む所まで機嫌が回復する。

起動僅か5秒間の間に、ティファの手にはある物が握られていた。

「うっくん、やっぱりこのフォルムは最高だわ!!」

うつとりとした表情をしながら手に納まった二丁拳銃を眺める。

黒色のボディに刻み込まれた黒薔薇の模様。銃の形状はベレッタM92に酷似しており、ダブルアクションだ。

些か物騒な精神安定剤だが、桃色に紅潮させていた頬を直に無色に戻すと、腕をクロスして左右のガリとチビに銃口を向ける。

「ゴム弾装填、発射」

しなやかな細い指が重い引き金を引き、パンツと乾いた発砲音が響く。発射されたゴム弾ガリチビの頬を掠め、裂ける。

ダブルアクションの銃は本来、かなり撃ち難い。その銃を意図も簡単に操り、命中させずにギリギリ掠めさせたティファの腕はかなりものだった。

引き金が撃鉄を起こし、更に倒すという2つの動作をするのがダブルアクションと言うが、撃鉄を起こす余分な力がある為に引き金を引くのに必要な力がシングルアクションより大きい。

引き金を引く距離が長くなり、撃ち辛く、命中精度が落ちるなどの欠点があるのだ。

召喚の儀式（3）

「ひいひいひい！！」

「……っ！」

チビは腰を抜き、ガリは後退りながらティファから距離を取る。ゴム弾とは言え、当たり所が悪ければ死に至る。

近くで尻餅を着き、怯えた視線を向けてくるチビを塵でも見るかのような目で一瞥すると、クロスしていた腕を今度は前に向け、双銃をデブに向ける。

スツと目を細め、殺気を放出する。いい加減こんな連中に何時までも時間を使うのは勿体無い。

出来る限りの殺意を眼光に乗せて飛ばし、無言で「其処を退け」と訴える。

他の関係ない外野の生徒達もこの一色触発な状況にほぼ無言になり、固唾を飲んで成り行きを見守る。

間に入って止めようなどと考える生徒は皆無。下手に誰かが介入すれば悪化する事は間違いないからだ。

そして、無言の問い掛けにデブは動かなかった。微動だにしない彼にティファが「はあ……」と溜息を吐くと、デブの肩がビクツと揺れた。

「……？」

その反応を疑問に思ったティファはデブの挙動を良く観察し、相手の心中がどうなのか探りを入れる。

顔から冷や汗が垂れ、表情も何所かしら強張っている。その変化に「ああ」と悟った。

デブは“動かない”んじゃないくて“動けなかった”のだ。ティファの放つ殺気に飲まれたのか、それとも銃に恐怖しているのだろうか。はあ、ホント腑抜け共だわ。こんな連中にデバイスを態々出すまでもなかった。拳でも十分いけたかもしれないわね。

まあ、いいわ。早くフィーナの元へ向かいましょう。

デブの横を素通りし、相変わらず熟睡中の彼女の元へと進む。

私はフィーナと、その周りに出来た意図的な空間を見て胸懷で溜息をつく。

隣に腰を下ろすと、サラサラな金髪を指で撫ぜた。

指先で擦る毎に気持ちよさそうに身動きし、頭をクリクリと小動物の様に押し付けてくる。

私は手を動かしながら思考の海へと身を投じた。

フィーナの幼馴染である私は何故彼女が此処まで避けられているのか理解出来ない。

中等部の頃は私も含めてフィーナの周りには多くの人が集まっていた。彼女は頭もいい、性格もよし、文句の付けどころがないくらい出来た人間だった。

人望も自然と集まり、周りが彼女を放っておかなかった。けれど、今ではそれは一変してしまっている。

高等部になってからは誰にも話し掛けられず、話し掛けても無視され、口を開いたかと思えば悪口。

何故、如何して、何で。この言葉は私の心に何度も反響した。中等部の頃の親しかった人達でさえも、一線を引かれてしまっている。

何時の間になくなってしまったのか解らず、気が付いたら既に手遅れで、ポツンと一人で佇むフィーナの姿に胸が凄く痛んだ。

1年の時はクラスが別々だったけど、私はフィーナと会う事はしなかった。彼女なら私なんかが居なくても直に友達が沢山出来ると思っていたからだ。

だけど、それは間違いだった。フィーナを避ける生徒達を見て、それを気付かされた。

私は独自の情報網を使って色々調べていたのだけど、最近、とある情報が浮かび上がった。

それは、学園がファイナー1人に対して避ける様に呼び掛けると言う、信じられない情報だった。しかもその詳細は極秘で、殆どの生徒も知らないと言う。

召喚の儀式（４）

ルーティス魔法学園は軍と、魔法に属する多くの組織と深い関わりがある。そして、魔法に携わる人は全員エリートだ。

学園長自らが機関に推薦して、レベルに見合った人でなければ当然就職なんてものは夢のまた夢。

しかし、それでは殆どの生徒達が全然就職出来ないため、逃げ道として軍に配属されか、魔法技師になるか、二択が用意されている。

中にはこの２つのどちらかを目指して入学する人も多々居る事だろう。

そして誰もが憧れ、目指すのは魔法研究所だ。其処では最先端の魔法が研究出来、研究するだけの機材が十分にある。

このアールヴェイムでは魔法が嫌いな人はほぼ皆無だろう。魔法を研究し、広め、国の基盤を形作った研究者達は子供達の憧れで、それは夢へと繋がるのだ。

だから唯一のパイプ役である学園長の言う事は絶対的だった。それが１人の生徒を全員が無視し続ける事でも。

「（だけど、幾ら言葉で言い聞かせても其処に明確な理由がなければ此処まで徹底出来ない。多分、此処の生徒達は全員何等かの認識魔法が掛けられていると思うわね）」

「（それにどうして私だけには認識魔法が掛けられていないのかし

ら。私が一番フィーナに近いから……？」

幼馴染であり、フィーナの大親友であるティファ。この繋がりには何か意味があるのだろうか。

うーん、情報が少な過ぎるわねえ。もっと確かな情報が欲しいのだけど、あまり嗅ぎ回ると危険そうね。

今は様子見しときましようか。時が経てば、自ずと何かが見えてくるだろうし。

「うにゅ」と、猫の様な言葉を漏らすフィーナの頭を撫で回し、自分の目標を再認識する。

「今は考えても仕方ない。私は、この子に降りかかる火の粉から護るだけだわ」

フィーナはそれからティファに文字通り叩き起こされるまで爆睡していた。

「うっ……痛い」

頭を擦りながら隣に並ぶティファを恨めし気に見詰める。頭を叩かれて起こされたフィーナの機嫌は最悪だった。

「アンタが何時までも寝ているからでしょう」

ティファが言うには教師が来て、何回呼んでも起きなかったから実力行使に出たらしい。

起こしてくれた事については素直にありがたいと思うが、もっと優しく起こしてほしいとフィーナは切に思った。

あうゝ……凄く頭がジンジンする。もしかしたらタンコブになっているかなあ……？ 叩くと言うより殴るだよね、この馬鹿力！！

「……何か言ったかしら？」

スツと目を細め、声音を低くするティファに咄嗟に頭をブンブン振る。刹那の間に感じた身の危機に身体が防衛反応を示した。

女性、特にティファには「馬鹿力」が禁句だった事をフィーナは思い出す。胸懷で囁くのもタブーなのだ。何しろ心の声も聞く事が出来るのだから。

……ティファの読心術って恐ろしい。

担当教師の言葉を聞きながら、フィーナは密かにそう思うのでした。

召喚の儀式（5）

使い魔召喚術の担当教師であるイリヤ・ノーベルはクラス毎に並んだ生徒達を見渡すと、口を開く。

「諸君等も知つての通り、使い魔召喚術は非常に危険な魔法だ。軽い気持ちでやっているとまず間違いなく死ぬ」

死、容赦なく突き付けられたその言葉。その言動に何人かの生徒達が不安そうな表情をする。

その中にはフィーナも含まれており、両手をギュツと握り締めながら「だいじょうぶだいじょうぶ」と壊れた機械の様に呟いていた。

使い魔召喚は誰もが通る道。怖いから嫌だなどと、そんな言い訳は通用しない。それに、使い魔はこの先なくてはならないパートナーなのだから。

そして、その存在があるだけでこれからの就職の幅が更にグンと広められる。特に専門的な企業では身の保身の為や、使い魔が持つ特性が必要不可欠になってくる事もある。

「もし万が一、無理難題な条件を突き付けられたら直ぐその場を離れ、教師の元へ逃げろ。私達は全力で君達を護る」

そう言つて背後に立つ複数の教師陣を一瞥すると、ニヤツと歯を見せながら笑つ。

教師陣は全員ジャージに身を包み、動き易い格好をしている。もし

もの場合は彼女達が命懸けで戦ってくれるのだろっ。

言葉使いもそうだが、随分と男勝りな女性教師、イリヤをフィーナは見やる。あの人なら自分の命を任せられると、不思議とそんな気をさせられる。

何時の間にか蔓延った恐怖は消えており、あるのは高揚感。イリヤの声とともに、1組から順に召喚は始まった。

うわっ……何アレ、頭が2つあるよ。うわっ あっちのスライムはベトベトしてて気持ち悪っ。あれは……二足歩行している象……？

フィーナは次々と魔法陣から出現するモンスター達を眺め、胸奥で感想を漏らしまくる。

中にはふわふわとして可愛らしい羊型のモンスターから、鎧や剣を武装したトカゲっぽいモンスターも居た。

何だかヘンテコなのばかりだね。私はやっぱり可愛くて、強くて優しい使い魔が欲しいかなあ。

それで、友達になってもらうの。正式な関係は主従的かもしれないけど、対等な存在になりたい。

……1人は、寂しいからね。絶対いい友達をゲットしてやるんだから……！！

フィーナが求めている使い魔は従えさせるだけの家来ではなく、純粹に“友達”と言う存在になってくれる者だった。

例え言葉が通じなくてもいい。唯、一緒に、傍に居てくれる。そんな存在だった。

「よし、次は2年3組のフィーナ・ウィングベルム!!」

「はい!!」

フィーナは元気よく声を上げ、その場を駆け出した。

召喚の儀式（6）

「すうゝ はあゝ……」

体育館の中心に移動したフィーナは立ち止り、静かに深呼吸を繰り返す。目を閉じ、溢れる緊張と高揚感を抑える。

余分な肩の力を抜き、出来るだけ自然体であろうとした。こういう儀式では力み過ぎてしまえば直に失敗してしまう。

「私……頑張る」

小さく握り拳を突き上げ、己を奮い立たせる。周りには次々にモンスターを召喚していく生徒が窺えたが、見向きさえしなかった。

フィーナは既に意識を集中しており、外野の騒音は全てシャットアウトしていた。今の彼女にはどんな音でさえも無音に変換される。

「デバイス、起動」

ポツンと呟いたか細い声。

誰に言った訳でもないその声に反応し、フィーナの右耳に付いていた三日月型のイヤリングがチリンと揺れた。

リーン、リーン、鈴の音に似た音がその場を何度も反響し、振り子の様に揺られながら澄んだ高音を響かせる。

綺麗な音だった。聴いているだけでも心が休まり、不の感情が浄化

されていく感じがする。気が付けば他の生徒達もその音に聴き入っていた。

聴て、小型の魔法陣がイヤリングの側面に出現すると、それは眩い光を放ちながゆっくり回転を始め、少しずつ回転の速さが上がっていく。

陣からは少しずつ光の分子が溢れ出し、フィーナの周りを渦上に取り巻いた。まるで意思でもあるかのように手や足、肩に纏わり付き、フィーナは擦ったそうに身を擦る。

「形を成して」

声に反応し、ざわざわと分子が揺らめく。フィーナの眼前に集まった分子は物体へと形成され、少しずつ形を成していく。

柄は蒼く、真っ直ぐに伸びている。柄の一番下は尖っており、柄は下から少しずつ太くなっていた。

先端には金色に輝く三日月があり、その中心部に白玉があった。

「我、契約を求めし者。我が呼び声に応えし古来の者よ、姿を成せ

」

杖を横に構え、契約に必要な言霊を唱える。何所からともなく拭いた風はフィーナの金髪を靡かせ、頬を撫ぜる。

「汝の身は我が盾に、汝が腕は我が剣に。神々の聖約よ、今此処に――ッ！！」

閃光と共に魔法陣が刻まれる。しかし、それは唯の魔法陣ではなかった。何十メートルの超巨大な陣が現れ、それはフィーナが立つて居た場所を余裕で通り越す。

そしてガチッと歯車が噛み合ったかのような音を鳴らすと、魔法陣が動き出し、足元から烈風が吹き出した。

「きゃっ！」

慌てて捲り上がりそうなスカートを押え、膝を曲げる。風が竜巻の様にグルグルうねり、とてもじゃないが立って居られない。

そんな状態でも必死に目を開け、魔法陣を見た。その陣には長針と短針、時計のような針と数字が描かれ、それは秒数毎に時を刻んでいた。

物凄い勢いで吸収されていく魔力にフィーナは焦る。慌てて回路を切断しようと試みたが、切れなかった。

「何コレ！？ 一体どうなってるの……！」

叫びは虚しく風の轟音で消され、爆発音と共に視界はホワイトアウトした。

召喚されし者（１）

爆風で吹き飛ばされたフィーナは上半身を起こし、痛む頭をブンブン振る。米神を指で押えながら辺りを見渡した。

周りには同じく床に転がった生徒や、尻餅を着く人など、様々な恰好をした人が居た。

見る限りでは重症者が居ない事に安堵する。自分の魔法の所為で誰かが大怪我したら……想像するだけでゾツとする。

あつ！　そういえば召喚したモンスターは！？　私は一体何を召喚したの？！

まさか失敗って事はないよねえ……？　もう魔力スッカラカンなんだけど。

ハッとなって視線を前に戻し、中心部を見やる。だが、

「……何も見えない」

爆発の所為で体育館の中心部が靄然と化し、視界には靄しか映らない。けれど、その靄も少しずつ晴れていつている。

靄が晴れるのはそんなに時間を必要とせず、ちよつとずつ、何かが見えてきた。靄には薄く細長いシルエツトが映り、フィーナはまだかまだかと逸る気持ちを抑えながら凝視する。

他の生徒や教師達も視線を中心に移し、正体を確かめる為に目を凝

らした。聴て、靄が晴れる――

「……………」

其処には、1人の人間が立って居た。

闇に溶けるような漆黒のローブを纏った、寡黙を飾ったままの男。

いや、顔はスッポリと頭全体を覆う外套のフードで隠れている為、男とは断言出来ない。けれど、外套の上からでも華奢と思える程のその姿は、どちらかと言えば女性に近い。

誰もが開いた口が塞がらない。外套で身を包む1人の存在に、呼吸も忘れてしまいそうになる程に見入っていたのだから。

ふと、唐突に吹き荒れた一陣の風が、その人物のフードを剥がした。フードによって隠れていた顔^{かんはせ}が露わになる。

サラサラツと風に流れる艶やかな黒髪。伸びた長髪は後ろにゴムで縛っており、ポニーテールの様になっている。

ルビーとアメシストの宝石を埋め込んだかのような綺麗な双眸。

冬に降る雪を彷彿とさせる様な白い肌に、流麗な顔立ち。ふわふわと微かに膨らんだ両頬の間には淡紅色の唇。

「……………綺麗」

誰かが無意識に呟いた言葉に、誰もが同意する。それほどの美貌だった。

……この人を、私が召喚したの……？ え、でも“彼女”は人間で……こんな事前例にないよお。

そもそも人間と使い魔契約出来る訳……？ って事はやっぱり使い魔召喚失敗！？ やっぱい、どうしよう……！！！！

フィーナは混乱し、何が何だか解らなくなってきた。そしてそれと同じく、無性に泣きたくなってきた。

召喚の儀式は1人1回限りしか許されていない。失敗すればもう終わりなのだ。

それに彼女は人間、家族も居るだろうし、帰るべき家もある筈だ。

うう……折角……友達が出来ると思ったのに……。

涙腺は崩壊寸前だった。そんなフィーナに、自分が召喚した女性から声を掛けられた。

召喚されし者（２）

「……まだ出口に出ないのか？」

落下している感覚はずつとある。唯もう、あの魔法陣に吸い込まれてから、どれくらい落ちているのかは検討もつかない。

視界が真っ暗闇のも１つの原因だろうか。眼が役に立たないからどれだけ落ちているのか解らない。

５分、それとも１０分か、実際にはそんなに経っていない気がする。

鋼龍蓮華刀に宿る翠は呼んでも返事がなく、無言。掌には鞘を掴んでいる感触はあるものの、何時もの生意気な声が聞こえないと不安だった。

何時になったら出られるんだ？ いい加減、落ちるだけのも飽きてきた。

何かアクションでも起こしてみるか……？

そう考えていた時、突然、一筋の光が足元から差した。キラキラと輝いているその筋は１本、また１本と増えていき、徐々に黒の陰りが浄化されていく。

真っ黒だった全てが白に変換され、今度は逆に眩しい。

そして、十夜はその白に塗り潰されるのだった。

『じ——や。——や……—』

『じゅう——。……十夜っ！！』

「いつっ!？」

ポコポコと頭を叩かれ、その痛感で十夜は飛び起きる。まだ霧が掛かったぼんやりとした頭で辺りを見渡すと、膝元でピョンピョン跳ねる物体に気が付く。

銀色のセミロングに紅い双眸。同じく紅色の和服に身を包んだ10?ぐらいの小さな少女が乗っていた。

「翠……? お前今まで何で返事しなかったんだよ」

地味に痛い頭を擦りながら、和服の少女、翠を掌に乗せる。顔と同じ高さまで持ち上げると、そう問い掛けた。

『返事をしたくても出来なかったよ。十夜とのリンクがいきなり切断されちゃって……私だっけ焦ったんだから!!』

目に涙を溜め、『馬鹿馬鹿っ』と胸を叩いてくる。十夜は翠のその反応に、自分だけが不安になっていたんじゃないと思い知らされた。翠も翠で、怖かったんだな。いきなり訳が分からない空間に閉じ込められて、俺との契約も無効化状態になっていたみたいだし。

リンク、それはつまりは契約の事だ。翠の声は、鋼龍蓮華刀の使用
者である十夜にしか聞こえない。

今の様に人の姿を保てば第三者には見えるし、声も届ける事が可能
なのだ。姿が小さいと神力を多く使わなくて済むらしく、今では殆
どミニサイズだ。

「悪かった、ごめんな」

人差し指で翠の頭を撫で、プイツと恥ずかしそうに顔を背ける姿に
十夜は苦笑いする。十夜は靄が立ち込めた辺りを一瞥すると、目を
閉じて神経を集中させた。

それに気が付いた翠は大人しく十夜の顔を眺めているのだった。

召喚されし者（3）

「……この前方に150人くらいの人が居るな」

閉じていた瞼を開き、眉間に皺を寄せる。通常の方法なら向こう側に何人の人間が居るかだなんて、分かる筈はないのだが、十夜は違う。

靄の向こう側の“魂”を感じて、そう呟いたのだ。

万物、この世に形あるモノには必ず魂と言うものが宿る。草、木、そして肉体。或いは他者が形作った物。

それらが何等かの原因で壊れれば、宿っていた魂は器から解き放たれ、天に還ると言われている。

十夜は万物に宿る魂の気配を敏感に感じ取る事が出来るのだ。そして、彼の紫の瞳は同時に、器（肉体）の寿命を見る事が出来る。

見たくなくとも見えてしまう。モノに宿る魂が燃え尽きるその瞬間を……。

……魂が消える瞬間はホント……切なく、そして綺麗なものだ。

淡色の焰がパツと弾け、桜の花弁の様に散るんだからな。あの瞬間は神秘的だ。

まあ……この眼は普段はあまり役に立たないが、こういった状況時には便利かもしれないな。

何せ、接近してくる気配（魂）が解るんだから、隠密行動にはもってこい。

「翠、そろそろ靄が晴れる。中に戻っててくれるか」

『分かったわ』

1つ頷くと、人型の翠は光に包まれ、それは丸い発光体となってふゆふゆ鋼龍蓮華刀に近づく。そして、刀の中に溶け込んで行った。

その刹那、ドクン、と心臓が脈打つように鼓動を刻み、刀がカタカタ鏗を鳴らす。そして、青色の溢れた光に鞘から柄まで包まれた。

翠が鋼龍蓮華刀から離れていても、刀は翠の半身と言ってもいい。翠を失えば刀は錆び、唯の鉛と化してしまう。逆に刀を失えば翠は消滅する。

一心同体。これほど適切な言葉はないだろう。だが、翠が鋼龍蓮華刀から離れれば、刀本来の力は失われてしまう。

翠が戻った事により刀が共鳴し、力が戻った事を示したのだ。青色の光に包まれた状態がまさにソレだ。

「さてはて、敵か味方かどちらでしょう」

十夜を呼び寄せた張本人、その人間が必ず善人とは限らない。

寧ろ、他から人を呼び寄せる時点で何か法的違法な行為をしてくるかもしれない。他から人を取り寄せれば何をして大丈夫と思う人間は居るものだ。

警戒はし過ぎた方が丁度いい。特に、現在進行形のこのイレギュラ―な状況下では。

さて、敵だったら……殺るしかないかな。無意味な殺傷は好きじゃないんだが、仕方ない。

ぼんやりと薄れつつある靄を眺めながら、自分が初めて人を殺した時を思い出す。それと同時に、心の奥底に根付いた憎悪も首を擡げた。

俺が初めて人を殺した日は……確か14の時だったか。今でもあの、人を斬った感触は忘れられない……。

そして俺は決めたんだ。この道を生きると……。

『（……十夜、まだ“あの日”の事が忘れられないのね……）』

悲しみを映す十夜の表情に、翠は心配そうに見詰めていた。

召喚されし者（４）

「学生服……え、体育館……？」

靄が晴れ、十夜が最初に呟いた言葉はソレだった。瞠目しながら視線だけを動かし、フード越しに情報を収集する。

高い天井、木製の床、球技用コートライン、バスケットボールのゴール。そして巨大なステージ。十夜にとっては懐かしく、馴染みのある設備だ。

そして前方には集まった沢山の人々が居る。この学園の制服らしき物に身を包み、此方をじいじと凝視してくる生徒達。

150人くらいの視線が一斉に殺到してきたが、十夜はと言う訳でもなく受け流す。学生が居ると言う時点で、身に降り掛かる危険は皆無と判断した。

それにこれだけの目撃者が居れば此処で何かしらしてくる事はないと思ったからだ。

……にしかし、何で体育館？　それほど古くもないし、何処にでもありそうな物だが——ッ！？

何気なく視線を上を持ち上げた瞬間、十夜は窓の外から差し込む「陽の光」を見て、ソレに驚愕する。十夜が先程まで居た世界は、「夜」だったからだ。

と言う事だ……？　まさかあの短時間で時間飛躍したとでもいう

のか？ いや、そもそも俺をどうやって此処に呼び寄せた？

現代の技術力ではまだ瞬間移動は実現されていない。テレポートそれに周りに装置らしき物も何も無いしな。

訳が解らないぞ……。

彼は吸い込まれた魔法陣を純粹に「魔法」だとは認識していなかった。十夜は所謂現代人だから、何か巧妙なトリックがあると踏んでいるのだ。超常的現象にはタネが付き物だ。

尽きぬ疑問に首を傾げた時、吹き荒れた風が十夜のフードを取り去るが、十夜は状況分析中の為に全く気が付かない。

しかし、フードが取り除かれた事より、十夜はこのあと更に驚愕する事となった。

『十夜、フードが取れてるけどいいの？』

「やべっ」

翠に指摘され、慌ててゴムで束ねた長髪を奥に押し込み、頭に被せる。その際に、フードの死角になっていた1人の女子生徒の存在に気が付いた。

狭い視線、そしてペタンと床に尻餅を着いていたので、高さ的に今まで気が付かなかったのだ。

「ん？ 何でこんな所に座って……ッッ！！??」

その少女と視線が交差した瞬間、十夜は目を剥く。その存在から目が離せず、微動だにしない。

金髪のロングヘアー、それと同じく金の瞳孔。人形のように整った顔立ちで、陶器のようになめらかな白い肌。

目鼻立ちにはまだ幼い柔らかさがあるものの、同時に端麗な容姿を持ち、ふんわりと何もかも包み込んでしまう様な印象を受けた。

「ば、馬鹿な……なんで彩香^{さやか}が此处に……」

十夜は目の前に居るその少女の姿に、囚われたように動かない、否、動けない。額から大量の汗が滲み、頬をスーッと滑り落ちた。

何で、どうして……。どうしてなんだ……。こんな事がある筈がない、ありえないッ！！

だって、おかしいだろう……？ アイツは、アイツはもう――

――死んでいる筈なんだから……。

キスから始まる新たな日常（１）

彼女（十夜）はフィーナと視線が交わった瞬間に固まり、動かなくなつた。

フード越しに向けられる視線は怯えと恐怖、混乱が交ざっており、フィーナが立ち上がると彼女の身体がビクンツと揺れる。

その反応に怪訝な顔をしてしまう。まるで自分を化け物でも見るかのような目が気に入らなかった。

崩壊間際だった涙腺は何時の間に修復され、目の端に溜まった涙を指先で払い除ける。溢れた雫はそれ以上流れてこなかった。

今は唯、純粹に聞きたい事があったのだ。彼女がどうして自分自身にこんなにも畏怖の念を抱くのか知れたかった。

初対面だけれど、自身の力でどうにか出来るのなら、彼女の不安を取り除いてやりたいとフィーナは胸奥で強く思ったのだ。

何で……？ この人は何故、こんなにも私を怖がるの？ 私は貴女になんにもしないよ。

だからそんなに怯えないで、ね？ 大丈夫だから……。

一步一步近づき、僅かに見える瞳にそう訴えかける。幸い彼女は逃げる事はせず、その場でずっと立ち竦んでいた。

臆て正面に立つと、覗き込む様にして顔を近付ける。しかし、彼女

も見られまいと顔を背けようとしたが、それはフィーナが許さなかった。

ガシツと両手で両頬を挟み、無理やり正面のやや下向きに顔を向けさせたのだ。彼女は驚いた様な、困惑した様な表情をするが、振り解こうとはせず、成されるまま。

更にグイツと顔を寄せ、どうして自分を怖がるのかと問い詰めようとした瞬間、フィーナはハツとなって息を飲む。

肌の肌理の細かさ、細い眉、整った鼻先、透き通った紅と紫の瞳。そして柔らかそうな桜色の唇。間近で見ないと分からない、1つ1つ鮮麗されたパーツがフィーナを魅了する。

気が付けば顔を寄せ、フィーナはポツンと咲いた淡色の蕾にキスをしていた。

そうだ、この子はきつと彩香じゃない、落ち着け、俺……。

世界には自分と同じ顔をした人が2、3人居るって言うだろ？ きっとそれだ。

偶々偶然、容姿が彩香に似てるってだけだ。冷静になって見れば大丈夫な筈……。

深く深呼吸を繰り返し、改めて少女を見やる。だが、冷静で見れば見る程に、その雰囲気や顔の造形、何もかもが瓜二つに見えてしま

う。

『……顔色が悪いけど、大丈夫……？』

左手に持った鋼龍蓮華刀に宿る翠から声が掛けられる。心配させて申し訳ないと思いつつ、「大丈夫」と返事を返した。

そうした会話のやり取りをしていると、不意に、少女が立ち上がる。十夜は突然動き出した少女に身体をビクツとさせ、片足が僅かに下がる。

その反応を見た少女は不服そうに眉間に皺を寄せ、ゆっくりと此方に近づいて来る。

十夜は足の裏が接着剤で固定されてしまったかのように、全然動けず、近づく少女を待つばかり。

そして、間近に立つと、十夜の顔を下から覗き込んだ。思わず顔を背けようとする彼の顔を手で掴み、無理やり正面に向かせる。

その際に首の骨がボキッと派手な音を鳴らしたが、少女には聞こえなかったようだ。

何なんだ……？ この子は一体何がしたい。俺の顔なんて見ても何も無いぞ……。

抵抗するのを諦めた十夜は大人しく少女と見詰め合っていると、不意に、その小さな唇が自分の唇と重ねられた。

キスから始まる新たな日常（２）

「……………なんでこうなったのかなあ……………」

十夜は学長室と書かれたプレートを見上げ、隣に立つ少女を一瞥する。

少女の顔は紅葉のように赤く紅潮しており、時折チラチラと此方に視線を向けてくる。そして目が合うと恥ずかしそうに顔を伏せるのだ。

十夜は嘆息しながら過去を振り返る。どうしてこうなってしまったのかと……………。

あの後、この少女にキスされた瞬間、足元に魔法陣が出現し、それは２人を包み込んだ。それと同時に、十夜の頭の中にこの世界の知識が一気に流れ込んできたのだ。

その情報量は莫大で、人間の脳味噌ではとても捌き切れる量ではなく、危うく意識を丸ごと持っていかれる所だった。

だが、その流れ込んだ知識の御蔭でこの世界の成り立ちと、今自分たちが「使い魔契約」を交わした事が解った。

それで担当の先生に呼び出され、学長室へ直行と……………はあ、何度振り返っても明らかに巻き込まれたよなあ……………。

異世界に召喚されるわ、使い魔にされるわ、ホント災難続きだ。この後もまだまだ続いたら流石に泣くぞ。

胸奥で三度目の溜息を吐き、猫手で扉をノックしようすると、

「あ、あの……！ 少し、いいですか……？」

隣に立つて居た少女に控え目に話し掛けられ、十夜は「ん？」と言いながら顔を合わせる

「え、えと……ごめんなさい！！ 私、貴女とあんな事する気なんて全然なかったの！！ 気が付いたら使い魔契約も勝手にされてて……その、本当にごめんなさい！！」

土下座する勢いで頭を下げる少女に十夜は慌てる。直に顔を上げさせ、自分は怒っていない事を伝えた。

まあ、いきなりキスや使い魔契約は正直どうかと思ったけど、この世界の言語は契約しない限り覚えられそうになかったしなあ。

キスは役得として、デメリットとかなさそうだし、まあ、俺は怒るまではいかなかったかな。

「過ぎた事は仕方ない。取り敢えず、今は早く学長室へ入ろうか」

「……はい」

十夜は扉をノックし、返事の後に少女と2人で入室して行った。

十夜が入室し、まず始めに驚かされたのは本の多さだった。壁側には30以上の大きな本棚が置かれており、小難しい本から何かの童話の様な本やらがギッシリと詰まっている。

そして、部屋の奥には高級そうな木製の机と、座り心地の良さそうな椅子に腰掛ける1人の老人が書類に目を通して居た。

白い髭を生やし、丸い眼鏡を掛けた70歳くらいの御老体。その風貌からもこの人がこの学園で一番偉い学園長と分かる。

十夜達が入室すると書類から顔を上げ、その表情を綻ばせる。第一印象は穏和そうな人柄の人だった。

キスから始まる新たな日常（3）

「ぬしがウィングベルム君が召喚した人かのう？」

その問い掛けに十夜は肯定し、被っていたフードを取り去る。此処の偉い人に素顔を晒さないのは失礼だと思ったからだ。

「風間^{かざま} 十夜と言います。此方^{かた}で言つとジュウヤ・カザマですかね」

静かにそう切り返す十夜に学園長は頷き、少女にも自己紹介する様に目線で促せた。

「あ……私はフィーナ・ウィングベルムと言います。よろしく願いますね、ジュウヤさん」

「此方こそ」

少女、フィーナに頷き、十夜は嫣然と微笑む。その笑みを間近で見たフィーナは顔をボンツと真っ赤にさせ、瞬間沸騰した。

十夜の純粋な笑顔には破壊力がある。本人も無意識な為、これから犠牲者がかなり増えそうだ。

その様子をニコニコ眺めていた学園長がコホンと咳払いし、場を静め、自らも自己紹介した。

「僕はこのルーティス魔法学園の学園長であるゼブラル・ラブリアルじゃ。よろしくの」

「はい」と頷く十夜達に目を細めると、ゼブラルは更に言葉を続ける。

「それで本題に入るのじゃが、ぬしはこの世界の人間ではないの？」

「っ！？」

「え！？」

確証が混じったその言葉に十夜ならず、フィーナも瞠目する。十夜はまだ誰にも自分が異世界から来たとは話していない。

なのに当たり前の様に話す学園長に驚き、また疑念も湧く。一体何処からその情報を入手したのかと。

フィーナは単純に十夜が異世界人であることに驚いているのだろう。

「……何処でソレを？」

「秘密じゃ」

そう言い、ホッホッホッホッと笑い出した学園長の表情は笑っていたが、目は笑っていない。

目を鋭く細める十夜は何かあるな、と思いつつも無駄な詮索はしなかった。

「して、カザマ君はこれからどうするのじゃ」

「……………」

当然ながらこの世界、アールヴェイムには十夜の住む家は存在しない。そして帰る方法も今の所見つかっていない。

十夜としては野宿も別に出来なくはないのだが、右も左も分からない所するのは正直嫌だった。

仮にも異世界、面倒事にだけは絶対に巻き込まれたくはないしなあ。マジでどうしよう……。

「行く当てがないのなら、此処で使い魔をやってみんかの？」

「……………使い魔？」

悩む十夜に現れたもう1つの選択肢。突然の提案に、怪訝に思いながら聞き返す。

「うむ、仮にも君はウィングベルム君の使い魔じゃ。カザマ君が使い魔の変わりになってくれると言うなら、元の世界に帰れるまで僕等がサポートしよう。悪い話ではないと思うのじゃが」

……確かに、それは悪くない案だ。召喚した主を護る、と言うのなら俺にも出来るだろう。

何より、俺も彩香に似たこの子の事が気になるしな。

「分かりました。ではそれでお願いします」

こうして、十夜はフィーナの使い魔になる事を決めたのです。

学生寮にて（１）

「失礼しました」

扉を閉め、十夜達は学長室を退室する。誰も居ない静かな廊下で向き合つと、クスツと笑みを浮かべる。

何が面白い、と言う訳でもないのだが、場の空気だ。ホツと胸を撫で下ろし、笑みを零した。

取り敢えず野宿生活にならなかった事に安堵し、フィーナはフィーナで使い魔が出来た事を喜んだ。

十夜はフィーナに手を差し出すと、改めて自己紹介をした。先程は成り行きで自己紹介した為、今度は自分達の意思でしたかった。

「ジュウヤ・カザマだ。これからよろしくな」

「フィーナ・ウィングベルムです。此方こそよろしくお願いします」

思ったよりも小さく、柔らかなフィーナの手と握手を交わし、笑顔を浮かべる。手を離すと、どちらともなく窓辺に向い、外の景色を眺めた。

茜色に染まってきた空を見上げながら、この世界でも空の色は変わらないんだと思う。

世界は変わっても、変わらないものはある。それに安堵し、十夜は暫くアールヴェイムで生きていく事を決めた。

時間はたっぷりある…… ゆっくりでいいから、これから元の世界に帰る方法を探そう。まあ、正直言って地球にはそんなに未練はないんだが、なにしろ急だったからな。

いざ離れるとなると、やっぱり恋しくなるもんだ。彩香の墓参りにも最近行ってなかったしな……。

隣で「ふう」と疲れ気味に溜息を吐くフィーナを見ながら、「そろそろ行こうか」と言葉を投げ掛ける。

「はい、わたりまし——」

「つと、その前にだ」

返答しようとしたフィーナの言葉を遮り、人差し指をフィーナの顔の前に立てる。

「丁寧語は無しだ、普通に十夜と呼び捨てにして構わない。俺もフィーナって呼ぶからさ」

「え、でも……」

明らかに「異議あり!!」という表情をするフィーナに更に言葉を続ける。

「俺は今日から使いまで、フィーナは俺の主だ。無駄な隔たりはない方がいいだろう?」

「……わかりま、分かったよ。それとジュウヤは使い魔じゃなくて、

私の大事な――」

「――“友達”だから!!」

そう言つて微笑むフィーナの姿に、十夜は一瞬ポカンとすると、直ぐに笑顔を返した。

どうやら俺は、主人には恵まれたようだ……。

「なあ翠、コレどー思うよ？」

フィーナの少し後ろを歩く十夜は街並みを見渡しながら、翠に問い掛ける。十夜がコレと言つたのは街全体の事だ。

外見だけは、十夜の住んでいた世界と大差ない。と言うか寧ろ酷似し過ぎるのだ、その異常性が際立って十夜は思わず翠にそう問い掛けた。

「……………」

しかし、翠からの返答はなく、無言の沈黙。唯、不機嫌なオーラだけはヒシヒシと肌に突き刺さる。

十夜がキスされた辺りから機嫌が頗る悪くなった。恋愛云々にかなり鈍感な十夜は訳が解らなく、頭を横に捻る。

「なあ、なんでそんなに機嫌悪いんだ？ 俺何かしたか？」

外でもバツチリフードを被りながら、鋼龍蓮華刀を見下げる。フィナはこれが何か気になっていたが、結局聞いてこなかった。

もしかしたら銃刀法違反かもしれないが、バレなきゃ無問題だよな、多分。こっちの法律とか知らないし。

『ふんっ……十夜の恋愛朴念仁……』

法律何たらと思考していた十夜には翠の呟いた言葉は聞こえなかった。

学生寮にて(2)

「学生寮っつーかコレ、マンションじゃん……」

10階建の立派なマンション。住宅街に溶け込んだソレは外からでは学生寮と絶対に分からないだろう。

先頭を進んでいくフィーナの背中を追いかけて、自動ドアを潜る。

背後でドアが閉まる音を聞きながら入った十夜達を出迎えたのは広々とした空間だった。

静かに、そして凜とした表情で迎えるエントランスホールは、優美な折上げ天井や風合いのある床タイルをあしらうことにより、心とむ空間に仕上がっている。

ホール内には間接照明により幻想的な空間を形作るオブジェと、主の帰りを待つかのように設けられた木製ベンチ。

果たされるべき公衆パブリックな空間としての役割を意識し、寛ぎを演出する色々々な照明。豊かな輝きを紡ぐウォールデザインなど、細やかに作られている。

公衆からプライベートな時間に切り替わる場所に相応しく、自然で心地よい波の流れのデザインにしていた。見ているだけでも心が落ち着く。

……コレ、どこの高級マンション……？ エントランスにオブジェとかいらねえ……何か植物が生えた鉢でも置いとけばいいんだよ。

学生寮に金掛け過ぎだ。まあ、それだけ金に余裕がある学園なのかね。俺には無駄遣いにしか思えないが。

予想以上に豪華な作りのホールにゲンナリしながら、ドンドン先へと進むフィーナの後を付いて行く。

フィーナは財布からカードキーを取り出すと、壁に設置された薄い液晶型の機械に当て、「ピピッ」と鳴った瞬間に施錠が解除される。

「さ、早く行こうよ」

呆けている十夜に手招きし、扉に手を伸ばした瞬間。「ガチャ」と勝手に扉が開き、中から誰かが出て来た。

「あら、フィーナじゃない。それとその使い魔」

おまけ的感觉に扱われた十夜は一瞬眉間に皺を寄せたが、無表情になると中から出て来た人物を観察する。

セミロングの緑髪に、蒼色の双眸。凜と整った顔立ちの女性。縁のない眼鏡を掛けており、フード越しに視線が合うと笑みを返された。服装は、上には黒のＴシャツとパーカーを着ており、ジーンズパンツを穿いている。何処か近場にも出掛けるのだろうか。

「あつ ティファ。これから何処行くの？」

「ちよつと夕食に買い忘れた物があつたから、これからスーパーに買いに行く所よ」

「そつかあ。あ、紹介するけど、此方は今日から私の友達になつたジユウヤ・カザマ。よろしくしてあげてね」

フィーナが十夜に振り返り、挨拶する様に視線で促す。仕方なくフィードを取つた十夜は、蒼の瞳孔と目を合わせながら自己紹介する。

「ジユウヤ・カザマです。よろしく」

「ティファ・ファーンネットよ、よろしく」

握手を交わし、それを確認したフィーナが「またね」って言って先に進み、十夜も後を追う。

しかし、後ろから腕をガシツと掴まれ、十夜の足は背後に佇むティファによって止められるのであつた。

学生寮にて(3)

思いっきり力任せに腕を引かれた十夜は驚きながらも、身体を反転させてティファと向き合う。

地味に痛い腕を擦りながら、文句の1つでも言おうと口を開こうとするが、ティファのその真剣な表情に口を噤んだ。

「フィーナの事を、よろしくお願いするわ。彼女は何時でも元氣一杯だけど、ホントは凄く寂しがり屋なの。フィーナが泣きそうな時は貴女が隣で支えてあげて」

「勿論、フィーナの為なら私も協力するから」

そう言って微笑を浮かべると、もう何も言う事はないとばかりに踵を返し、先に行ってしまう。

取り残された十夜はティファの背を最後まで見送っていると、「ジユウヤ早く〜！」というフィーナの不満混じりの声が遙か先から響いた。

小走りでフィーナの元へと向かう十夜の顔には、僅かな笑みが映っていた。

フィーナは大切に想われているな。あそこまで純粋な気持ちをぶつけられたのは久々だ。

我が主ながら、流石って所か。正直言うと、最初は使い魔って名前にやだなあって思ったけど、フィーナなら使えてみてもいいかも

しない。

寧ろ、フィーナ以外嫌だな。使い魔と同等な目線で扱ってくれる人間なんて、極少数だろうし。ホントにいい主に恵まれたなあ。

「遅いよジュウヤ。何やってたの？」

河豚の様にプクウと頬を膨らませながら、怒ってますよアピールをするフィーナ。その表情は怖い所か逆に可愛らしく、苦笑しながら「悪い悪い」と謝る。

上の階から降りてくるエレベーターを待ちながら、暫し他愛のない会話をしていた。

「此処が“私達”の家だよ」

部屋を通され、ダイニングキッチンに入る十夜。彼は一瞬ポケ〜とすると、「え!？」と声を出した。

「同じ家?! 別の場所は用意されていないのか!？」

おいおいおいおい……少し身の危機感が薄くないか? 仮にも俺は男なんだぞ。同じ屋根の下に男女が寝泊まりするのは色々とよろしくないだろう……。

「うん? 同じ女の子同士なんだから別に問題ないでしょ」

」
その発言に、今度こそ十夜は完璧に固まる。大口が開いたままだから、その顔は少しばかり間抜け面だった。

開いた口が塞がらないと言うのは、この事を言うのだろう。口を魚の様にパクパクさせるが、声が出る事はない。

急に固まりだした十夜にフィーナは首を傾げつつ、トコトコと冷蔵庫の元へ行ってしまう。取り残された十夜は銅像の如く立ち尽す。

まさか、今まで女に見られていた……？ いやいや、日本人は確かに童顔やら何やらがあるが、そんな馬鹿な。

……でも、本当に間違えられていたのか？ 此处は考えるよりも先に直接聞いてみるか。

「なあフィーナ、ちょっといいか？」

「うん、どうしたの？」

コップ2つを御盆に載せて戻ってきたフィーナは、テーブルにコトンと置くと席に着く。

十夜も反対側の椅子に腰を下ろし、真剣な表情で声を絞り出す。

「なあ、もしかしたらフィーナは俺の事を女だと思っているかもしれないけど、俺は男、だぞ？」

「え……？」

チーン。

[illegible]

僅かの間ポカーンとした後、フィーナの絶叫が室内を轟いた。

学生寮にて（４）

え、え、嘘！？ ジュウヤって実は男だったの？！ 凄く綺麗だったからずっと女だと思ってた……。

男性と認識している人は多分皆無なんじゃないかなあ。童顔って言うよりも女顔だし、肌も、あんなに白いし。

ううゝ……女の私よりも綺麗ってどーいう事なの……？ 背も高いし、スラッとしてて、笑顔も素敵だし。

嫉妬しちゃうなあ。何より男だっていうのがホント凄く吃驚だよ。

室内でも相変わらずフードをスッポリと被り、あまり素顔を晒そうとしない十夜。そんな彼をマジマジと見ながら、フィーナは思わずポツリと呟く。

「……吃驚」

「それはこっちの台詞だ、いきなり叫ぶ奴があるかよ……。それに、かなり近所迷惑だぞ？」

思ったよりも大きかったフィーナの絶叫に耳を押え、軽く仰け反ったままの十夜。先程の自身の叫びを思い出したのか、羞恥で顔が真っ赤になっていく。

「あうゝ、ごめんね」

頭を下げるフィーナの姿に「気にしなくていい」と、優しい声を掛

ける十夜。フードの所為で顔が全然見えないが、口元だけは弧を描いているのが分かる。

それに安堵しながら飲み掛けのコップに手を伸ばした時、ふと、フィーナの頭にとある疑問が過った。

あれ、今まで女の人だと思っていたジユウヤは実は男の人で……。

契約の際にキスした人もジユウヤで、女同士だからノーカウントだと思ってたけど……。

でもジユウヤは男の人だから……私は、自分から……男性に、ファースト、キ、キ、キス、おおおおおお……！！

そう理解が達した瞬間、フィーナの顔がボンッと音を立てて真っ赤になり、頭からプシュッと煙が立つ。

「お、おいフィーナ！！ 顔が真っ赤だぞ！？」

大丈夫かと声を掛けるがフィーナからの返答はなく、身体が横にフラツと傾くと床に倒れ始めた。

「危ないっ」

慌てて十夜は立ち上がり、即座に倒れる寸前の彼女を支える。

「大丈夫かフィーナ！！ おい、しっかりしろ！！」

「キュ……」

グルングルン目を回しているフィーナは、狼狽する十夜の声聞きながら意識を失った。

「……あ、れ……此处は……？」

首を巡らし、ぼんやりとした頭で辺りを見渡す。

閉まっていたカーテンの隙間から映る空の色は真っ黒で、星々がキラキラと輝いている。

「いい匂いがする」

鼻の奥を燦る美味しそうな味噌の匂い。その匂いに腹の虫が「グウ」と不満そんな鳴き声を漏らし、顔を赤くしながらお腹を押える。

お腹空いたなあ。でも、一体誰が作っているんだろう。ティファかなあ、それともジユウヤ？

手を付き、上半身を起こした時、今自分がソファの上で寝っていた事に気が付いた。

ソファはキッチンとは反対側、テレビを観賞出来る位置に置かれている為、起きない限り誰が料理を作っているのか分からない。

床に足を着き、立ち上がるうとした際、自分の胸の上から何かがパサリと剥がれ、床に落ちた。

「これって……ジウヤの着ていた外套だ」

漆黒のフード付き外套。所々黒の色が薄れ、解れを修復した跡が何個もある。フィーナにはこの外套が長く大事に使われている事か手に取る様に解った。

凄く大事に扱われているね。それだけ、思い入れがある大事な物なのかな。

なら、ちゃんと返さないかね。気絶した私の上に、風邪を引かない様にと掛けてくれた訳だし。

その優しい気遣いが嬉しく、外套を拾い上げるとキッチンで料理をしているであろう十夜の元へと歩を進めるのであった。

学生寮にて(5)

トントントンと包丁が律動的に動き、食材が細かく切られていく。フィーナはその音を聞きながら、何故か忍び足でキッチンへと近付いていた。

身体をペタツと壁に張り付け、戦場で生き抜く兵士の様に慎重に動く。顔をヒョコつと覗かせると、キッチンの様子を窺った。

其処には長髪をゴムで後ろに束ね、ピンクのエプロンを着けた人物が1人居た。鍋に入った汁をお玉で掻き混ぜると、味見皿に装い、口に含む。

「うん、上出来だな」

そう呟くと、テキパキと無駄のない動きで次々と調理し、様々な料理が出来上がっていく。フィーナはその姿を呆然とした眼差しで見詰めていた。

いや、それもその筈だった。十夜の鮮麗された滑らかな動きに、男にしてはありえない程の華奢な姿。後を追う艶やかな黒髪が更に、とある一文字を彷彿とさせる。

初めて使うであろう他人の戦場^{キッチン}であれだけの動きを見せられれば、誰でも呆然としてしまう。しかも、仕舞ってある調理器具や調味料の場所もしっかりと把握していた。

脳内に過ったその一文字は、出来のいい「嫁」と言う言葉だった。男なのに嫁と、ありえない方程式が成り立つ。

「ジユウヤは……生まれてくる性別を間違えたんじゃないかな？」

その背に、そう思わずにはいられなかった。お前は生まれてくる性別を間違えたのではないかと。

まあ、男として生まれてきちゃったから、今更言ってもしょうがないしねえ。

けど、ますます女性に間違われる確率が上がったのは確かだね。

フィーナは壁の影から出ると、十夜の背後に近づいて行く。

「私も何か手伝おうか？」

「あ、フィーナ！ もう体は大丈夫なのか？」

動かしていた手を止めると、驚きながらも身体の心配をする十夜。そんな彼に笑顔に向けてコクリと頷いて見せた。

その姿に安堵し、十夜も笑顔を返す。

「そうか。なら食器を出してもらっていいか？」

「わかった！」

最後にフィーナが持ってきた食器に料理を盛り付け、夕食は完成した。

ご飯、白菜と油揚げの味噌汁、出汁巻き卵、春魚の塩焼き＋大根おろし、シーザーサラダ。

この世界に知っている食材が在った為、十夜は腕に縊をかけて和食を作り上げた。

「美味しそう……けど、良くこの世界の食材で調理出来たね」

「ああ、俺の世界でも見掛ける食材が結構在ったからな。訳が分かるんのも幾つか在ったが」

当然ながら、この世界独自の食材も冷蔵庫の中に豊富だった。例を上げるなら瓶詰の目玉＋触手、三目の魚に、青いキャベツモドキ。

果たしてこれは人間に食す事が可能なのかと疑問に思うようなレベルの物も結構あった。

勿論、十夜にはそれが何なのか見た目ではまるで分からなく、夕食の材料にして使う勇氣も持ち合わせていない。

「じゃあ、食べようか」

「ああ」

十夜とフィーナは両手を合わせ、「頂きます」と言っ。

因みにこの世界でも食前と食後には「頂きます」「御馳走様」と言うらしい。

学生寮にて（6）

「ジュウヤ、この外套ありがとうね」

食事も終わってゆつくりと寛いでいると、フィーナが十夜から借りていた外套を差し出す。

「あ、俺もこの借りてたエプロン返すな」

十夜も着ていたピンクのエプロンを脱ぎ、綺麗に折り畳む。外套と交換する様にして返し、それぞれ帰るべき持ち主の手に戻った。

十夜は直に外套を羽織ると、深くフードを被る。整った容姿は隠され、また元の姿に戻ってしまう。

ふう……やっぱりこの外套が無いと落ち着かないな。それだけ、家の風習が染み込んでるって事が……。

夏場は地獄だが、それ意外は結構快適だ。しかし、素顔を晒すのに矢張り慣れないな。まあ、俺の環境はかなり特殊だったのもあるか。椅子の背凭れに身体を預け、力をグタリと抜く。そうしてまったりとしていると、ふと、フィーナがじいーと此方を見ている事に気が付いた。

「……どうした？」

「え？ あ、うん。……ジュウヤはどうして何時も顔を隠すのかなあゝって思ってたの」

屋外、室内問わずに外套を羽織り、フードを被り続ける十夜にフィーナは疑問を抱いていた。何度か素顔を晒してはまた隠すのだから、誰で疑問に思ふ事だろう。

特に見せられない程の酷い怪我がある訳でもなく、どこぞの犯罪者の様な面貌でもない。寧ろ顔はかなり美形で、隠す要素が皆無なのだ。

「あゝ……その事か。んー、なんつーかなあ」

十夜は言い難そうに言葉を濁し、顔を背けてしまう。

別に言えない訳じゃないんだが……出会ってまだ当日でこの事を話すのはちょっとなあ。もしかしたら信頼性を損なうかもしれないし……。

もう少し関係が出来上がってから話した方がいいと、俺は思っただよ。

「言いたくなければ無理には聞かないよ。私達はまだ出会ったばかりだし、御互いの事はゆっくり解り合って行こう」

黙り込んでしまった十夜にフィーナはそう声を掛け、自ら引く。十夜はごめんと謝りながら「何時か話す」と約束した。

「うん、それだけが聞ければ十分だよ」

「ホントに悪いな。こればかりは出会っていきなり、話す事じゃないからな」

フードの上から頭をポリポリ搔く十夜に頷き、食器を片付ける為に立ち上がるフィーナ。

十夜も手伝おうと立ち上がったが、「料理は作ってくれたから、後片付けぐらいは任せて」と言われ、断られてしまった。

「さあ、此処がジュウヤの部屋だよ。と言ってもまだ、荷物部屋だけだね」

先程までの重くなった空気を払拭するかのように、元気な声で部屋の扉を開けるフィーナ。

フィーナの言う通り、十夜の自室となる空間には未開封の段ボールが山の様に置かれ、その他にも使われなくなったテーブル、椅子、絵具やキャンバス等があった。

「これは……」

十夜は室内に足を踏み入れると、導かれるかのようにある物に近づく。

そのある物とは、キャンバス立てに立て掛けてある絵の事だった。押し殺した様な声で「凄い……」と呟くと、その絵を凝視する。

十夜の瞳孔には、真っ白なキャンバスの上に描かれた美しい世界が映り込んでいた。

広がる草原、青い空。中心には巨大な木が聳え立ち、巨木の木陰には白いワンピースを着た少女と動物達が気持ち良さそうに眠っている。

草は風で揺れ、葉の天辺に登る天道虫。快晴には白い雲が漂い、地面には雲の形を映した影達が幾つも列を成していた。

1つ1つ丁寧に、細かく描かれており、十夜はその絵を引き込まれたかのように見詰め続ける。

「凄いな……これってフィーナが描いたのか？」

「あ、うん。大分前に描いた奴だけど、私の一番の自信作なんだ」

恥かしそうに頬を掻きながら十夜の隣に移動し、キャンバスを指で撫でる。

ふむ。言うだけあって、実に良く描かれている。俺は絵とかは全然詳しくないけど、ホントに引き込まれるな。

「今でもまだ描いているのか？」

「ううん、今は、ね……もう描いていないの」

首を横に振り、そう返答するフィーナの瞳には、薄らと悲しみの色が映っていた。

その泣きそうな表情に、十夜はどうして絵描きを辞めてしまったのか聞く事が出来なかった。

この世界とあの世界

「寝辛い……」

姿勢を何度も変えながら眩き、頭を肘置きに乗せる。現在十夜はダイニングキッチンに置かれているソファの上で寝っていた。

何故かと言うと、単純にベッドや布団が無いからだ。フィーナからは「同じベッドで寝ないか」とアホな事を聞かれたが、勿論断った。一緒に寝れる訳がない。例えば寝たとしても、色々な理由で寝付けなくなる事は簡単に想像出来た。

フィーナは少し、異性としての認識をしっかりしてほしいものだな。女性が気軽に男をベッドに招くものじゃないだろ。

まあ、俺が襲うなんて真似は100%絶対にしないが、気を付けるのに越した事はないしな。

『寝れないの?』

見慣れない天井を見上げてボーンとしていると、お腹の上に何かが跳び乗って来た。首を少しだけ持ち上げ、腹を見やれば翠が寝転がって居る。

両足をパタパタとさせ、此方をジューと物言いだけに見上げてくる。その顔が何かを待ち焦がれる子供のような表情だった。

フツと十夜は笑みを浮かべると手を伸ばし、翠の頭に触れる。壊れ

物でも扱う様に優しく頭を指で撫で、サラサラな紅髪の感触を楽しむ。

何時もツンツン気味な翠はこの時だけは静かだった。大人しく撫でられている姿が小動物を彷彿とさせる。

「翠は昔から頭を撫でられるのが好きだな」

『そ、そんな事ないわよ』

気持ちよさそうに目を細め、自ら頭部をクリクリと擦り付ける時点で説得力がない。先程から凄く嬉しそうな顔をしているのを本人は気付いているのだろうか。

相変わらず素直じゃないが、長年一緒に居る十夜には微笑ましい光景だった。

『ねえ十夜』

「んー？」

『十夜はこの世界の事、どう思う？』

言葉は違えど、その質問は夕方に十夜が翠へと投げ掛けた質問と同じだった。

「……そうだな、俺は並行世界だと思っているけどな」

並行世界。ある時空から分岐し、並行して存在している世界の事だ。似過ぎている文化の進行に、十夜はそう返答する。しかしながら、このアールヴェイムには魔法やモンスター、アールヴェイム語が存在している。

魔法が存在する事によって独自の機関や施設が形成され、モンスターが存在に街は要塞みたいになっている。これが同じ地球だと言えば、返ってくる答えは否。

完全に別世界と考えてもいいとも思える。唯、似過ぎる外見が此処が並行世界か異世界かの判断を惑わすのだ。

それに、専門学的数字で同じ文化が確立している異世界が絶対に無いとは言い切れない。

「まあ別に、何処に居たって問題じゃないがな。言葉さえ分かれればどうとでもなる」

フィーナとの使い魔契約によって、十夜はアールヴェイムの一般知識を知る事が出来た。いや、知ると言うよりは頭の中に直接叩き込まれた感じた。

こうして今会話に使っている言語も、実はアールヴェイム語なのだ。

まるで日本語を喋っているかのような自然とした感覚な為、自分では殆ど実感がない。日本語を実際に喋る際には、意識しないと話す事が出来ない程だ。

『私も十夜と契約しているからかどうかは分からないけど、同じ一般知識を共有出来たわ』

「ああ。取り敢えずは必要な条件は既に整ってる。後は成る様にか成らないさ」

話している間に眠気が押し寄せたのか、眠そうに大口を開けて欠伸をする。

それから数分後、規則正しい十夜の寝息が室内を浸透するのだった。

朝の風景（1）（前書き）

何だかスランプ気味です。

朝の風景（１）

ペタペタ……ペタペタ……。

ペタペタペタ……ペタペタペタ……。

「ん……さつきから何だ？」

薄らと瞼を開き、辺りを見回す。カーテンの隙間から零れる陽の光は朝である事を示し、起きたばかりの十夜にはその光は眩しかった。

怠気に上半身を起こすと、頬に何かがへばり付いている事に気が付く。その何かを手で摘み、引き剥がすとそれは紅髪の少女だった。

「……何で俺の頬を枕にして寝ているんだコイツは」

頬をペタペタと触られて起こされた十夜はそう呟くと、伸びをしなから欠伸をする。その際に背骨がポキポキと心地のいい音を鳴らし、首を曲げ様とした瞬間に突如痛みが走った。

「痛つてえ……首を寝違えたか？」

矢張りベッドではなく、ソファで眠ったのがいけなかったのだろうか。身体の節々も痛い。

本来ソファは寝る為に作られている訳ではないから、当然と言えば当然かもしれないな。かと言って床で寝るのもあれだし、まあ、仕方ないか。

「今何時だろう」

首を手でマッサージしながら壁に設置された丸い時計に目を向け、時刻を確認する。現在の時間は7時40分だった。

まだまだ寝たりない十夜は二度目の欠伸をし、掌で未だに爆睡中の翠を恨めし気に見詰める。だが、これから学院に行く事になるのだから、時間的には丁度いいかもしれない。

まさかフィーナ1人だけで学院に行かせる訳にはいかないし、此処に居てもする事が何もない。必然的に選択肢は「同行」に絞られる。

「暇だから朝食でも作ってようかなあ」

ソファから立ち上がり、キッチンに向かおうとした瞬間、自室からパジャマ姿のフィーナが出て来た。

「やばっ」

十夜は慌てて掌で熟睡している翠をズボンのポケットへと乱暴に押し込み、隠す。ポケットに入れた際に「ふぎゃっ」と悲鳴が聞こえたが、スルーした。

「おはようジュウヤ」

「あ、ああ。おはよう」

挨拶を返し、ギリギリ翠を隠せた事にホッと胸を撫で下ろす。別に隠す理由なんてものはないのだが、つい反射的に異形（翠）を隠してしまった。

そもそもこの世界に付喪神なんて言う概念そのものが存在するのは分らないが、今はまだ隠しておいた方がいいかな。

別にフィーナが信用出来ないとか、そういう意味では決してない。唯、いきなりこんなを紹介されても混乱するだけだし、翠の紹介はまた今度でいいだろう。

妖精とか精霊とかの存在が既にあるのだったら、また話は変わったが、俺の知る一般知識にもそういうのはなかったしなあ。

小さい人間って紹介しても多分納得しないだろうし、現状維持のままでいいか。もし見られたら見られたで包み隠さず話そう。

「朝食は私が作るから、ジユウヤはゆっくりしてていいよ」

顔を洗い、学園の制服に着替えてきたフィーナはキッチンに立つと、冷蔵庫の中身を確認しながらそう言うてくる。

正直朝食を作るのがかったるいと思っていた十夜はあっさりと二つ返事でOKを出し、ソファに再び身を沈める。

グツと両足を伸ばして、硬くなった関節を伸ばしている時、第三者の不満気な声が突然響いた。

『ちよつと十夜。一体なにを——ムグウツ——！』

ポケットから顔を出して喋り出した翠の口を即座に塞ぎ、「しいゝ」と人差し指を立てながら唇に当てる。指でフィーナを指差すと、状況が解った翠はコクコクと頷いた。

「悪いな、今は其処で我慢しててくれ」

出来るだけ小声で呟き、ポケットから頭だけを出す翠を撫でる。――瞬だけ不満そうな顔を見せたが、最後にコクンと頷いた。

朝の風景（2）

「……………」

十夜はテーブルに着いたまま沈黙を飾り、出来立ての料理達を凝視する。その表情は若干引き攣っていた。

ご飯、味噌汁、目玉焼き&ソーセージ、サラダ、はまだいい。だが、この「目玉」が入ったスープは何だ……！？ スープの色が青ってどういう事だ！！

スープ皿に入った謎の物体。いや、謎ではないのだが、先程から青色の液体に浸かっている眼球達が物言いたげに此方を凝視してくる。勿論実際に見ている訳ではないのだが、向けられる目線がどうにも気持ち悪い。フィーナはまさかこれを食べと言うのだろうか……？

しかもこの目玉、以前に冷蔵の中で瓶詰めに使われていた奴だった。

「……なあ、フィーナ。これってホントに人間が食す事が可能な代物なのか？」

遠回しに言ったが、ぶっちゃけコレって食べ物じゃないだろ、と言う意味も込められている。

「確かに見た目はアレだけど……味は大丈夫な筈だよ……多分^{ボソッ}」

おいおいおいおい、今最後にボソッとすげー不吉な言葉が聞こえたんだけど。この外見に作った側が自信なさに「多分」とか言っち

や駄目だろう。

しかし、世界のゲテ物も簡単に捻じ伏せられそうなこの外見、マジありえないぞ。スープの色もどうやって表現したんだ……。

「あのさ、この毒々しい青色は一体どうやって作ったんだ……？」

頬を未だに引き攣らせたままスープを指差し、問う。調理した側のフィーナの表情も青褪めていた。

「え、えーとね。最初は味噌を溶かしたスープで煮込んでいたんだけど、目玉から急に変な青色の汁が出てきて、それで味噌の色が青に侵食されて……」

顔を下げ、自ら煮込んだ物体Xを見下げるフィーナ。しかし、あまりにも気持ち悪い外見にスーと目視が横に逸れる。

「煮込んだだけでこの有様が……。もうこれ有害物質だろ絶対」

元が味噌の色だったと言うそのスープの色。そもそも何で眼球から青い液体が出るのだろう、これが青い血とかだったら最悪である。

「この目玉はとあるお店で会計している時におまけとして無理やり持たされちゃって、断ったんだけど断り切れなかったの。今まで食べる勇気が無かったからほっと置いたけど、このままだと駄目にしちゃうし……」

だから材料にして使ったと。ふむ、明らかに要らない物の押し付けだよな。酷い店もあったものだ。

「兎に角食べそうにないから捨てよう。見てると食欲が失せる」

「うん、そうだね」

特に反論もなく、2つのスープ皿を持ってキッチンに向かうフィナ。その間にポケットに入って居た翠がヒョコッと顔を覗かせた。

『捨てるの?』

「ああ、あんな物食えるかよ。それとも翠は食べたかったか?」

『十夜は私に死ねというの?』

流しに捨てられていく毒々しいスープを一瞥しながら、そう返答する翠。

「だよなあ」

食べる＝死ぬの方程式が翠の頭の中にも出来上がっているようだった。

『私は本来食べなくても生きていけるけど、食べ物の美味しさは理解しているわ。趣味で食べると言ってもいいかもしれないわね』

付喪神である翠は生物の糧である食料は必要としない。彼女が存在を保つ為に必要なのは半身（鋼龍蓮華刀）、唯それだけである。

だが、意思があり、人の姿にも成れる翠にも物を食べる楽しみは勿論あるのだ。特にチョコレートケーキやカステラなどが彼女の好物。

「そうだな。この世界にもチョコレートはあるだろうし、今度探してみるか」

『ホントに!?!』

十夜がそう答えると、ポケットから身体を乗り出して此方を見詰める翠。心成しかその目はキラキラと星の様に輝いていた。

『約束よ!! 忘れたら只じゃ置かないからね!!』

「分かった分かった。そろそろフィーナが戻って来るから中に戻れ」

『ええ。分かったわ』

翠はご機嫌気味にポケットへと戻り、十夜は「ふう」と溜息を吐く。

もしチョコレート其の物が無かったらどうしよ……。翠はチョコレートの事になると豹変するからなあ。

我ながら先程の軽はずみな発言を後悔した。

買い物（１）

現在十夜達は住宅街を肩を並べながら歩いて居た。十夜達以外にもスーツ姿の社会人や通行人の方々も何名か居る。

今日は4月2日、土曜日な為、学院は休み。これから十夜とフィーナはデパートに買い物に行く途中であった。

「ジユウヤはどんなベッドがいい？ それとも寝れば何でもいいのかな？」

「そうだな。特に拘りはない」

ベッドや日常品等、フィーナ１人だけで住んでいた寮には色々と不足している物がある。特に服は何着が無いと困るだろう。

だが、出費は勿論フィーナ持ちだった。十夜は此処のお金を持っていないし、全てを揃えるのにはそれなりの金が必要。

勿論、フィーナの話では領収証を学院に提出すれば、使った金額は食費込みで返ってくるのだと言う。学園長の言っていた「サポート」にはこれも含まれるのだ。

うーん、そう分かっているもこう……罪悪感つてものが生まれるなあ。ヒモじゃないんだからせめて食費だけでも働いて返したい。

どっかにいいバイトとかあるかな？ 今度探してみよう。只で住まわせてもらうのは矢張り気が引けるしな。

うんうんと頷きながら、隣を歩くフィーナに視線を向ける。

一応季節的には春とはいえ、今日は少し肌寒い。

だが、彼女が身に纏ったその衣装は夏場の様に涼しげな黒のワンピースで、染み1つない白い綺麗な両腕を惜しげもなく晒している。

更にその上にはショールを身体に纏わせているが……却ってその薄布は、撓やかで豊満な胸部と肢体の輪郭線を強調し、色っぽかった顔にも薄らと化粧が施され、鮮やかな桃色の口紅を塗った花唇は桜の花弁の様に可憐だ。

しかし、意外だな。フィーナならもつと大人しい感じの服装を選ぶと思っていたんだが、こんな妖艶美女風味にするとは……。

まあ、綺麗だからいいけどさ、さっきから視線がスゲー突き刺さってくるんだけど。コレを誰かどうにかしてくれないか……。

明らかに美人なフィーナと、全身黒ずくめのフードが肩を並べて歩いて居れば、そりゃ視線も集まるだろう。

住宅街でもこれなのだから、人が多い所に行けばもつと凄い筈である。十夜は少し憂鬱な気分になるのであった。

あわわ、何だか私淒く見られてるよ……。やっぱり少し大胆過ぎたかなあ、もつと普通な感じの服装にすれば良かった。

でも……初めてジャウヤとお出掛けだったから、最初だけはこんな感じでいいかな？ 次からは大人しい清楚な感じな物にしよう。

チラツと十夜に視線を送り、外套の端をチョコつと指で掴む。一瞬ジウヤから視線を向けられたが、フィーナは恥ずかしさのあまりに顔を俯けた。

だが、直ぐに外套から手を離すと、今度は十夜の右腕に抱き付いた。フィーナの急な行動に、十夜の肩がビクツと少し跳ね上がる。

うう……何だか男の人の舐め回すような視線が怖い。あれで気づかれていないとも思っているのかなあ？

女性の私達にとって男性のチラ見は凝視と同じだよ。ジウヤが一緒で良かったよ。

「……どうした？ 急に抱き付いてきて」

恥かしそうに頬を掻きながら、そう問い掛けてくる十夜。今の自分の恰好に羞恥心を抱きながらも口を開いた。

「うん……何だか、男の人の視線が怖くて……」

そう言うと「ああ」と納得したように頷き、頭1つ分下にあるフィーナの頭を撫でる。

「大丈夫。何かあっても護るからさ」

笑顔を浮かべながらそう返事を返した十夜にフィーナの顔は真っ赤

になるのです。

買い物(2)

「はあ……終わったな」

「うん」

色々と商品を選び購入した十夜達はたった今手続きを終えたばかりだった。

何の手続きかと言えば、荷物を寮まで配達してもらう為の手続きだ。まさかベッド等をそのまま持ち帰る訳にはいかない。

勿論配達は無料な為、此方としてはありがたい。このまま手ぶらで帰る事が出来る。

「もうお昼だね。昼食は食べて帰ろっか」

「もうそんな時間か」

言われてみれば、もう昼の12時30分だった。そろそろお腹の虫も不機嫌になる時間帯だ。

十夜とフィーナはエスカレーターを使い、1階へと下りて行く。1階は広い食堂となっているらしく、色々な店が並んでいるのだと言う。

そして、1階に到着すると、十夜はまず人の多さに圧倒された。食堂には数え切れない程の多くの人が犇めいており、中央部には大量のテーブルと椅子が並べられている。

四方八方には所狭しと出店が並び、食欲を掻き立てる良い香りを大気に放出させている。主にラーメン、ピザ、たこ焼き、ホットドック、マックスナルドなど、様々な店があった。

「うわっ 凄い人だな」

「そうだね、土曜日だからかなあ」

見渡す限り人、人、人。昼間つから酒を飲んで騒ぐ者や、買い食いをしてながら仲よく歩く団体、手を繋ぎながら燥いでいる男女、1人の人間がこの賑やかな空間を形作っている。

うるさいとは思うものの、それは不快になるものではなく、寧ろこれが当たり前の光景だろう。人が集まれば騒がしくなるのは当然。逆に静か過ぎる食堂とかはそれはそれで嫌ではあるが。

しかし、どれもいい匂いで、美味しそうだ。まあ、俺としてはラーメンを食べたいんだけど、此処はフィーナにも意見を聞いた方がいいか。

フィーナも何か食べたいものがあるかもしれないしな。

「何か食べたい物はあるか？」

問い掛けると、「うん」と言いながら首を捻り、辺りを見回し出す。チョコチョコと歩いて行くフィーナの少し後ろを歩きながら、十夜は付いて行く。

そして色々な店を見て、最後に辿り着いた場所は――

「おつ ラーメン屋か」

「すみれ屋」と看板で表示されたラーメン屋を見上げながら、そう
呟く十夜。

その店は人気があるらしく、結構な人が列を作っていた。列の最初
に辿り着くのにには意外と時間が掛かりそうだ。

奇遇にも十夜が食べたいと思っていた物がフィーナと一致した。し
かし、そのラーメンを食べるまでの道のりは遠そうだ。

「フィーナは何ラーメンが食べたい？」

「私？ 私は豚骨がいいかな」

豚骨か……なら俺は味噌ラーメンにでもするか。ラーメンと言った
らやっぱり味噌だろう。

「分かった。じゃあフィーナは先に席を確保しといてくれ。俺が買
ってくるからさ」

「うん、じゃあ財布を渡すね」

ハンドバッグから取り出した財布を十夜は受け取り、背を向けて離
れて行くフィーナを見送る。

まだまだ先が長い列を見ながら、静かに溜息を吐出した。

買い物(3)

「ジュウヤまだかなあ……」

グウと不満そうに音を鳴らすお腹を手で擦りながら、頬杖を付くフイーナ。既に時間は1時になりそうだった。

流れていく人の波をポケーとした表情で眺める。そうして通り過ぎる人達を眺めていると、フイーナの視界にとある1組の男女が映った。

その男女は仲良さげに恋人繋ぎをしており、女性の方は幸せに満ち足りた表情をしている。誰がどう見ても幸せそうなカップルだ。

あれ……？ 今更気が付いたけど、ジュウヤと私って今日……デ、デート……だよね？

つい買い物に夢中になっていたから今まで気が付かなかったけど……何だか凄く恥ずかしい。

目の前を通り過ぎるそのカップルを見て、過去にジュウヤの腕に抱き付いた自分と重ねる。

あの時は男性の視線が怖くて、ジュウヤに隠れるようにして密着していたが、今思えば胸をかなり押し付けていただろう。十夜が恥ずかしそうにしていたのも主にそれが原因だ。

唯でさえ薄着なフイーナは十夜の逞しい二の腕の感触は自らの身体で良く感じ取れた。あの時は平気だったが、それを今思い出すと……

…。

「あう〜…すっごい恥ずかしいよ私……」

頬が熱を帯び、真っ赤に紅潮していく。ブンブンと頭を振って過去を振り払い、両頬を両手で挟んだ。これ以上思い出すと頭が沸騰しそうだ。

「ねえ其処の綺麗な君、暇なら俺等と遊ばない？」

「あうあう」とフィーナが唸っていると、不意に、誰かに声を掛けられる。「へっ？」と声を上げながら横を向くと、其処には柄の悪そうな如何にも「不良」って感じの3人組が立って居た。

え……何、この人達……なんか怖い。服装もチャラチャラしてるし、私を見る目が凄く厭らしいし……。

関わり合いになりたくない、関わると面倒な事に絶対になる。だから早く此処から離れよう！ 私はこれからジュウヤとラーメンを食べるんだから！！

直に席を立ち、不良達とは反対の方へ足を踏み出そうとする。しかし、そうは問屋が卸さなかった。

何時の間にか背後に回った不良の1人がフィーナの両肩を掴み、逃げない様に押え付けたのだ。

「いやあ！！ 離して！！」

「まあまあ、そう連れない事を言っなよ。絶対損はさせないからさ」

「そうだぜ？　俺達に任せろって！！」

「一緒に楽しもうぜ！！」

フィーナの意見など最初からどうでもいいのか、不良達はフィーナを引っ張って何処かへと連れて行こうとする。

「嫌っ！」と連呼しながら不良の手から逃れようとするが、男と女は体格からしてそもそも力が全然違う。

フィーナの抵抗を防ぐ事は、彼等にとっては赤子の手を捻るよりも簡単なのだ。激しく抵抗すればする程にフィーナは疲れ、力を失っていく。

嫌、嫌だよ……。こんな人達と一緒になんて行きたくない！！　誰か助けて！！

周りの人達に目で「助けてっ」と訴えるが、他人は所詮他人。フィーナと目が合うと逸らされ、唯の通行人となってそのまま通り過ぎていく。

誰も面倒事には巻き込まれたくないのだ。自分の身に降り掛かる火の粉しか振り払おうとせず、周りの事など無関心。そんな人間がいざ手に負えない厄介毎に見舞われると、他者に情けなく縋り付くのだ。

周りにはこんなに人が居るのに、誰も助けようとはしてくれない。そんな冷たい現実の底に叩き落されるが、フィーナは希望だけは捨てようとしなかった。諦めたら其処で試合終了だ。

最後に声を絞り、名を叫んだ。頼りになる、外套を羽織る人物の名を……。

「助けて、ジユウヤあー!!」

「あいよー!!」

心の底からそう願い、叫んだ時、待ち望んだ人物が不良の1人を殴り飛ばしていた。

「さて、フィーナは何処に居るかなあ？ 結構待たせちまったな」

大き目のトレーに味噌ラーメンと豚骨ラーメンを載せ、フィーナの姿を探す十夜。首を彼方此方に巡らし、金髪頭の少女を探す。

「おっかしいな。何処に居るんだろう……」

幾ら食堂が広いとはいえ、こつも見付からないのはおかしい。十夜がもう一度辺りを見回した時、食堂から出ようとしている4人組に目が付いた。

3人はネットレスや金属品を大量にジャラジャラとさせた軽そうな男。そして、囲う様にして1人の少女を無理やり捕まえていた。

「あれは、フィーナ……!?!」

見覚えのある黒のワンピースにシヨール。そして金色の髪。男の手から逃れようと抵抗しているようだが、力で押え付けられている。

「チィ！！ 1人にさせてたから変な虫が近寄って来たかつ」

くそっ 1人にさせておくべきではなかった！！ 俺の馬鹿野郎！！
舌打ちをし、助け出そうと足を踏み出すが、両手に持ったトレーの存在にその場で踏み止まる。

何処かに置こうにも近くのテーブルは既に埋っており、スペースがない。このままモタモタしていたらフィーナを見失ってしまう。

「すみません！！ これ持ってたもらっていいですか！！」

仕方なく十夜は目の前を通り掛かった女性に押し付ける形でトレーを預け、その場を駆け出す。

背後で「え！？ このトレーどうするの！！」と、困惑した声が聞こえたが、十夜の駆け出した足は止まる事はなかった。

買い物（４）

「助けて、ジユウヤあー!!」

フィーナの悲痛な叫び。その声に応えるべく、十夜は走る。人の壁を驚異的な反射神経と判断力で縫い、駆け抜ける。

その勢いを付けたまま両足をバネの様に跳ねらせ、高く飛躍する。重力加速度が追加装備された状態のまま身体を捻り、握った拳を振った。

「あいよー!!」

助けを求める声に返答をしながらフィーナを押え付けていた奴の顔を思いつきり殴る。不良１の頬を拳が減り込んだ。

「へぶあつー!!!!」

ズコツと鈍い音と共に不良１はそのまま打つ飛び、空中で身体を回転させながら滑空する。臆て重力の力で地面に落ちると、ゴロゴロとボールみたいに転がった。

急に始まった喧嘩に辺りから悲鳴が響き、周りに居た人達は巻き込まれては堪らんと、脱兎の如く逃げ出す。一瞬で周りから人が居なくなつた。

十夜は直にフィーナを自分の後ろに隠すと、不良達からある程度距離を取った。まずはフィーナの安全が第一優先だ。

「大丈夫か？」

「グスッ……う、うん……」

鼻を嚙りながら目の端に溜まった涙を拭い、今出来るだけの精一杯な笑顔を十夜へと向ける。

しかし、十夜から見たその笑顔は直にでも壊れてしまいそうな程に儚く、涙で落ちた化粧が一層に悲愴な面持ちを引き立たせた。

触れたらバラバラに砕け散ってしまいそうと思うほどに、今のフィーナは弱い。彼女をこんな状態にさせてしまった自分に、そして相手に沸々と怒りが込み上げる。

……全く、一体俺は何をやっているんだろうな。主であるフィーナをこんなにも悲しませるなんて……使い魔失格じゃないか。

彼女なら謝れば直にでも許してくれるだろうけど、それじゃ俺の気が晴れない。だから……元凶であるアイツ等を潰して、罪を償おう。力による暴力でしかないけど、アイツ等を許す事が出来ない。存外、思ったよりも俺は……フィーナの事を大事に思っているようだ。

まだ出会って1日目なのに、なんでだろうなあ。まるで一緒に居るのが当たり前だと、思う時があるんだ。それに、自分の力量不足で俺は“また”誰かを失いたくない。

フィーナに手を伸ばし、頭をポムポムと撫でる。気持ちよさそうに目を細める彼女を眺めると、十夜は正面を向いた。

「なっ！？ 手前ッ よくも！！ デバイス、起動！！」

「ルギス！！ ……この野郎、デバイス起動」

不良2、3はルギスと言う名前の奴がやられた事に気が付くと、デバイスを起動させる。小振りな魔法陣を展開させると、其処から武器が現れた。

不良2の手には鞘に納まった剣が握られ、不良3の両手には死神が持つ様な黒い鎌が顕現する。不良2は十夜を睨み付けながら腰を落とすと、口を開いた。

「手前、何者だ！！」

「何者？ そうだなあ……敢えて言うとしたら、掃除屋かな」

そう言葉を言い放ちながら、相手の挙動から目を離さず、様子窺う。案の定、「掃除屋」と言う単語にム力ついたのだろうか、鞘から剣を解き放つ。

その一連の行動や構え、間合いの取り方などを凝視し、力量を分析する。

「（ふむ、抜剣や立ち回り方も妙にギコチナイし、恐らくまだまだひよっこだな。隣の鎌の奴も大して強くもないか）」

十夜は相手の力量をすぐさま見抜き、余裕な笑みを浮かべた。その

笑みを挑発と受け取った不良達は十夜を殺さんとはかりに睨み付け、間合いを詰める。

「てええええええええええええや!!」

そして、不良２が気合の声を上げながら地を蹴り疾走する。抜いた剣を左腰に翳し、獣の如く突っ込んで来る。

距離と斬り込むタイミングを見計り、此処ぞとばかりの場所で足を踏み込み、剣を左斜め下から斬り込んだ。

奔る銀色の軌道を描く切先は立ち尽す十夜を捉える。剣身が柔らかな肢体を斬り裂き、真つ赤な鮮血を撒き散らす——筈だった、が、十夜とフイーナの姿は一瞬でその場から消え失せていた。

始めつから其処には誰も人など存在しなかつたかのように、何も無い。剣だけが虚しく風を裂き、宙を横切る。

完全に殺つたと確信した一撃を躲された不良2は目を丸くしながら
辺りを見渡す。背後の不良3も首を忙しなく動かしているが、何処
にも十夜達の姿は無かった。

買い物(5)

十夜は一瞬でフィーナを左肩に担ぐと、真上へと跳んでいた。常人では決して捉えぬ事が出来ない程の疾さで跳んだ為、不良達からは消えた様に見えたのだ。

外套をヒラヒラと風に靡かせながら、そのまま重力に沿って落下する。不良2、3は消えた十夜達の姿を首を巡らして必死に探しているが、そもそも地上には居ない。

「クソッ 一体何処に——がああああつ!!!!」

不良2が苛々しげに言葉を荒げた刹那。上空から降ってきた十夜の足が振り下ろされ、不良2の脳天に踵が直撃した。不良2は反応する間もなく顔面から地面に叩き付けられ、何度か痙攣すると動かなくなる。

「なっ!?! テメエ!!」

妖しく光る黒い鎌が血を欲さんとはかりに空を駆け抜け、十夜目掛けて刃が突き出される。大振りなその攻撃を避ける事は簡単だが、十夜には躲す必要性が全く感じられない。

振り下ろされた鎌のタイミングに合わせてガシッと柄を掴み、十夜は相手の鎌を静止させたのだ。

「なにっ!?!」

驚愕に目を剥く不良3を余所に、前回り捌きで踏み込んで身体を沈

め、右肘を不良3の脇の下に入れる。

その瞬間、左足で不良3の足を払い、態勢を崩した所を肩越しに思いつき投げ飛ばした。

「うわああああああ！！！」

宙を舞った不良3は真面に受け身も取れずに背中から落ち、そのまま沈黙する。動かない所を見ると、意識を失ったのだろう。

本来ならもつとボコボコにしたい所だが……フィーナの目の前だしな。過ぎた暴力で怖がれたくはない。

取り敢えずは、これだけで十分か。やり過ぎると後々面倒な事になりそうだし。

十夜は「ふう」と一息付くと、担いでいたフィーナを地面に下ろした。

「ありがとう……ジュウヤ」

礼を言うフィーナの言葉に頷きながら、表情を窺う。顔は相変わらず悪く、足元も覚束ない。それに、身体に触れていたこそ分かった事だが、微かに震えているのだ。

原因は矢張り、不良達だろう。これを切っ掛けに男性恐怖症へと発展しない事だけを祈るばかりだ。

「テーブルで早く休もう。疲れただろ？」

フィーナの背に腕を回しながら念の為に横から支え、空いているテーブルまで連れて行くのだった。

「…………ふう」

重い溜息を吐きながら、十夜の肩に身を預けるフィーナ。彼女の横に座っている十夜は心配そうな視線を送りながら、ゆっくりと頭を撫でてやる。

取り敢えずは心に余裕が出来ればいいと思って撫で続けていたのだが、如何せん、髪がサラサラで気持ちがよく、撫でる側が癒されてしまう。

それに、今のフィーナには情動的に余裕がない。まるで恐怖を払拭するかの様に良く甘えてくるのだ。

それが別に悪いと言う訳ではないのだが、人の目ってモノが勿論ある。先程から様々な視線が殺到し、中には「リア充滅びろ」と言う怨念が籠った視線も頂いた。

「あの、すみません」

そんなこんなでマツタリしていると、不意に、声が掛けられる。声のした方に顔を向ければ、ラーメンの載ったトレーを持つ女性が苦笑しながら立って居た。

「あつ！！ そのトレー！！ …………… いきなり預けておいて、取

りにも向かわずに放置しててすみません。色々と事情がありまして」

「あ、はい。実は私はあなた達が喧嘩している所を見ていたんです。だから怒っていませんし、決して迷惑でもありません。その子の為に急いでいたんですよ？」

肩に寄り掛かっているフィーナを一瞥すると、視線を戻す。「そうです」と肯定する十夜にニツコリと笑い掛けた。

「そっか、ならいいわ。あなたの事を許します。それに非常時だったから仕方ないよね」

ウィンクをしながら、そう言い残すとその場を後にする女性。十夜が慌てて声を掛け、「ありがとうございました」と頭を下げると、笑みを浮かべながら手を振られるのだった。

帰宅、そして配達物（1）（前書き）

何度目かの改稿。

1日1話しか公開しないので、新話ではありません。

帰宅、そして配達物（１）

太陽が沈み出す夕焼け空を仰ぐ。背中でグッスリと眠るフィーナの温もりを感じながら、十夜は帰宅路についていた。

あの後、十夜とフィーナは遅めの昼食を取った。ラーメンは時間の経ち過ぎで麺が伸びてしまっていたが、腹ぺこ状態のお腹にはそれもまた美味しく感じた。

午前中は上へ行ったり下へ行ったりとフィーナに引き摺りまわされ、午後は不良共との喧嘩。巻き込まれて精神的に疲れたフィーナは寝てしまい、今に至る。

十夜にとっては散々な１日だったが、何故か凄く充実した日だったと、終わった後に思う。不思議な充実感だ。

今まで俺は……生きるか死ぬかの世界で生きてきた。戦いが俺の全だった。だけど今は、凄く満たされていると感じられる。

時間は関係ない、まだ１日目だけど、そんな事は些細な事だ。現に俺は、彼女が居る温かな場所を護りたいと思っている。

……嘗て俺は、大事な人を護り切る事が出来なかった。今度こそは、失敗してはいけない。必ず護り切るんだ……。

けど、これは贖いではない。これは自分の意志で決めた事だ。それに、そんな事をしてもアイツは……彩香は喜ばない。寧ろ逆に、怒るだろうなあ。

自嘲気味に笑いながら、ズレ落ちそうになるフィーナを背負い直す。2つの柔らかな丘の感触にやや頬を紅くしながら、寮へと歩いて行った。

「ただいま」

『おかえり、十夜』

フィーナが眠っている事に気が付くと、声に出して迎える翠。今日、翠は1日中留守番をしていた。

『それで十夜、チョコレートケーキは買ってきてくれたかしら？』

以前にチョコレートケーキを探して買ってくるという約束（一方的な）をしたのだが、今回は買ってきて来れなかった。

期待に目を輝かせながらそう言う翠に、十夜は頬を掻きながら溜息を吐く。本来なら寮へと帰る途中に寄って行く筈だったのだが、フィーナがこんな状態では買える訳がない。

「……悪いな、今日は色々あつて買えなかった。明日でもいいか？」

居心地悪げに顔を逸らし、先に彼女をベッドへと寝かす為にフィーナの自室へと向かう。背後から恨めし気な視線がかなり突き刺さったが、気にせずスルーし続けた。

十夜がフィーナの自室の前に立つと、彼は何故かそのまま中に入ら

ず、固まってしまった。

「（……女性の部屋に勝手に入っていいのだろうか。まあ、フィーナは寝ているから、問題ないよな……？）」

一瞬男の自分が女性の聖地（部屋）に入っているのかと迷ったが、今は早くベッドに寝かし付ける事が何よりも優先だ

十夜は直に迷いを振り払うと、ドアノブに手を掛ける。そして、フィーナの自室の扉を開けた。

「って事なので、入るぞ〜？」

「くうー……くうー……」

何となく言い訳がましくそう言ってみたものの、勿論返答などは返ってこず、聞こえるのは寝息だけ。中に入った十夜は彼女をベッドに寝かせると、直に部屋を出て扉を閉めた。

「ふう……やっぱり異性の部屋の中に入るのは緊張するな」

眩きながらダイニングキッチンに戻り、テーブルの椅子に座る。テーブルの上に座っていた先客に視線を向けると、何故か柔らかな笑顔を向けられた。

チョコレートケーキの事で文句の1つでも言われるかと思ったが、それは予想とはまるで違い、優しい声音のした言葉だった。

『十夜、何だか少し雰囲気が柔らかくなったわね。今日何かあったのかしら？』

「…………柔らくなつた？」

翠の言っている意味が解らず、思わず復唱しながら首を傾げる十夜。

『ええ、今までの十夜は何かを振り切られずにいた。その何かは分らないけれど、今、凄くスッキリとした顔をしているわよ？』

……自分ではどう変わったのが全然分からないが、流石は翠つて所か。俺の胸奥にずっとこびり付いていた後悔が決意に変わった事に気が付いたか……。

「まあ、多分俺にとってはいい事だったと思う。改めて、自分の想いが知る事が出来たからな」

そう言つて嫣然と微笑む十夜の表情は、老若男女問わずに魅了させられる程のモノだった。

帰宅、そして配達物（2）

ピンポン

ダイニングキッチンを響くチャイムの音。十夜は「来たか」と呟くと椅子から立ち上がり、廊下側に続く壁に設置された白い装置に目を向ける。

その四角くて白い機械の中心部には液晶があり、其処にはエントランスホールを映した映像が流れている。

所謂テレビドアホンと言う奴で、この学生寮の各部屋には必ず設置されており、エントランスホールの映像を共有する事が出来るのだ。

そして、液晶に映るエントランスには4つの段ボール箱が置かれており、帽子を被った業者が6人程居る。

想像していたよりも人数が多かった。普通は2、3人ぐらいで来るものだと思っていたが、ベッドや箆笥等の重い物がある為に、多めに人数を寄越したのだろう。

十夜はテレビドアホンの真下に付いた「通話」と表示されたボタンを押す。

「はい」

『あつ、其方はフィーナ・ウィングベルムさんのお宅でよろしでしょうか？ サカイデパート配達サービスの者です』

「そうです。今下に行きますね」

確認を終えた十夜は通話を切り、外へと急いで出る。エレベーターを使って下に降りると、自動ロック式のドアを開けた。

「それではお荷物をお運びしますね」

業者達は地面に置いた段ボールを協力しながら持ち運び、十夜は先導しながら通路を歩く。此処のエレベーターは普通のよりも大きく作られている為、段ボールを乗せてもまだまだスペースが余った。

そして6階に到着すると、フィーナの家まで案内した。取り敢えずは段ボールはダイニングキッチンへと運んでもらい、仕事を終えた業者達は帰って行った。

「さてと……俺の自室となる部屋にはまだ物が置かれているし、まずはその移動だな」

『私も暇だから付いていくわ』

テーブルの上に座って居た翠がピヨンと飛躍し、十夜の頭の上に乗る。それを一瞥した十夜は、今はまだ物置部屋になっている部屋へと行き、中へと入った。

そして、何処からともなく1枚の御札とペンを取り出すと、ペンで札に文字を書いていく。札に書かれた文字は「空間」の2文字だけだった。

「風間 十夜が命ずる。全ての物を保存せよ」

そう言つて無造作に投げた札は部屋の中心まで飛ぶと、札が突然眩い輝きを放った。

もう慣れたとばかりに堂々と立ち尽くす十夜は白い光を見詰めているが、依然として未だに慣れない翠はあまりの眩しさに髪の毛へと顔を埋める。

光が納まった頃には荷物部屋には何もなく、1枚の札が床に落ちて
いるだけ。十夜はその札を拾い上げると、懐に仕舞った。

『……相変わらず規格外な能力ね。文字に役割を持たせる事が出来る人なんて、世界中探しても十夜1人りだけよ？』

そう、十夜は札に書いた事象を、現実世界に反映させて使えるのだ。例えば、札に「炎」と書いたとしよう。その札を投げれば、その札に書いた文字、つまり炎に反映され、それは火球となって爆散する。

以前に十夜が使っていたH&Amp;K MSG90と言うスナイパーライフルも元は唯の札なのだ。しかし、札から成り変ったモノはこの世に絶対存在してはならないモノ。その行為は禁術だ。

世界は異物を望んで懐に仕舞おうとはしない。寧ろ逆に排除しようするだろう。無から有を作り上げるのは神の諸行、言霊に役割を持たせるのも然り。

しかし、世界は十夜の消滅を望まなかった。消すには惜し過ぎる人材だと思つたのだろうか、其処は誰にも分からない。まさに神のみ

ぞが知る、と言う奴である。

だが、十夜は世界（神王）から枷を付けられる事になったのだ、ほぼ強制的に。まあ、枷と言っても身に害するモノではなく、この言霊に役割を持たせる能力、「多種生成」を1日10回までしか使えなくなる事だけだ。

「（世界が違う今、枷の効力がまだあるのかは分からないが、まっ、俺には在っても無くてもどっちでもいいしなあ）」

つか、1日10回も使えば上等かな。この能力は滅多に使わないし、俺には鋼龍蓮華刀もあるし。

「さて、ベッドとかもかったるいけど組み立てないといけないし、いっちょやりますか」

気合を入れ、自分の過し易い空間を作る為に取り掛かった。

バイト(1)

「はあ……やっと、終わった……」

伸びをしながらゆっくりと首を巡らし、自らが作り上げた空間を見回す。

床に敷かれた青い絨毯、その上に折り畳み式のテーブルと2個のクッションが在る。部屋の隅には箆笥が置かれ、窓には緑色のカーテンが掛かっていた。

箆笥の中には勿論衣類が入っており、ベッドの頭の上には目覚まし時計と歯磨きが鎮座している。

取り敢えずは自分の部屋っぽくなった室内に満足気に頷き、凝り固まった肩を解す。まだまだ物は少ないが、生活していく内に段々と増えていくだろう。

十夜は組み立てたベッドの上にダイブし、身体を弾力のある布団の上に沈める。

静寂が支配する室内をベッドのスプリングだけが響いた。

『スー……スー……』

隣を見やれば、既に翠が爆睡中。低反発の枕に頭を乗せながら、スカピーと夢の中だ。黙々と作業し続ける十夜の姿に飽きたのか、気が付いたらもう寝ていた。

「よいしょ……さて、次はバイト探しでもするか」

ベッドから身を起こし、絨毯の上に転がっているビニール袋を手に取り。その中から一冊の本を取り出した。

「要塞都市ヘルヴェル限定！ 求人情報誌」と記載されたA4サイズの情報誌。クッションの上に座りながら、ペラペラとページを捲る。

肉体労働系は回避した方がいいかな。万が一の時に疲れてたんじゃ、力を出し切れない。

なるべく疲れないで稼げる仕事ってのがベストだけど、そんな美味しい仕事なんか中々ないよなあ。向こうの喫茶店で接客業の経験があるから、そーいうの探してみるか。

十夜は昔に地球の喫茶店で働いていた事がある。その時はウェーターではなく、主に厨房で腕を振るっていた。

その喫茶店は何処にでもありそうな普通の店なのだが、連日客が店に溢れ、長蛇の列が出来る程のモノだったのだ。

行列を作る主な原因は、十夜が存在其の物だった。彼の容姿と、料理の美味さ。人当たりもよく、偶に見せる女神の微笑み。その微笑みだけを見に来る人も大勢居たのだ。

そして影ながら、彼には多くの熱狂的なファンが数多く居た。扱いがアイドルのソレとまさに同じである。

普段は厨房に隠れている為、滅多に表には出ないが、人数の関係上ウェーターになる事も屢あった。

十夜がウエーターになった日は……死屍累々と言える状況化になる。十夜が暢気に「店長のお店は大人気ですね」と、超鈍感ぶりを発揮させると、店長は何も言えずに苦笑する他なかった。

「おっ！ これなんかがいいかな」

店名は「喫茶An angel^{エンジェル}」。正直店名がアレだが、ルーティス魔法学園の近所だった。

御丁寧に細かい地図も載せられており、これを見ながら行けば直に辿り着けるだろう。

「ふむ、場所的にも学園から近いからいいし、この寮からも距離はない。此処が第一候補だな」

「取り敢えず、明日辺りに下見に行ってみよう」

他のページも見やり、気になるページは端を折ってマークをする。暫くはその作業を淡々と繰り返した。

しかし、この時の十夜は気が付いていなかった。喫茶An angel^{エンジェル}のページの一番下に「女の子限定」と書かれている事に……。

バイト(2)

「あふっ……朝か」

翌日、十夜は欠伸を漏らしながら上半身を起こし、時刻を確認する。現在は8時30分と、まだまだゆつくりと寝れる時間帯だった。

ふあゝあ……まだ眠い。もう少し寝ていたいけど、色々やる事があるしなあ。

正直まだ布団が恋しいが、起きるか。幸い、昨日の疲れは全部取れてるみたいだし、今日も一丁頑張るか。

押し寄せる睡魔を撃退しながら、自分が完成させた室内を見回す。まあ、完成させたと言っても、唯物を置いたり付けたりしただけなのだが。

「やっぱり物が少ないよなあ」

見回してみても抱いた感想がソレ。良く言えばホテルの様にさっぱりしてて、悪く言えば殺風景。

物が少ないからどうにも落ち着かないが、それは仕方がない事だろう。寧ろ物でゴチャゴチャしてるよりは断然いい。

これからどう部屋を彩ろうかと考えながら、ベッドから立ち上がる。ベッドの隅の方には翠が気持ちよさそうに眠っており、時折「チヨコレートが一杯だあ♪」と言う願望が寝言として聞こえる。

実に微笑ましい光景だ。見ていだけでも自然と頬が緩み、かなり和む。所謂、癒し効果という奴だろうか？

その姿に笑みを浮かべながら、音を立てない様に部屋を退室した。

十夜がダイニングキッチンに入ると、フィーナが1人で食パンをはむはむと食べていた。

しかし、入って来た十夜にはまるで気付かず、焼いた食パンを次々と無心で口の中に運んでいく。

「（……というか、何枚パン焼いてんだよ……）」

テーブルの上には大量の焼かれたパン。そして、「お供しやすぜっ！」と言うのが如く、ブルーベリージャム、苺ジャム、バター、そして牛乳が入ったコップが隣に置いてある。

昨日はあれから1回も起きず、夕食も食べずにフィーナは熟睡していた。その反動が今のこの絵図というのなら、納得出来なくもないのだが……。

……しかし、凄い食欲だな。朝からパンを6枚以上……そんなに空腹だったのか？ 昨日は起こしてれば良かったかな。

睡眠を優先させた結果がパンの滅亡。全てがフィーナのお腹の中、と……。

ゴミ箱に捨てられた数枚のパン袋を見ながら、十夜はフィーナとは反対側の椅子に座る。

「あつ、おはようジユウヤ」

服は流石に着替えた様で、動き易いジーンズとシャツを着ている。そして、髪の毛からは薄らとシャンプーの香りがした。

朝の内に入浴でも済ませたのだろう。頬も赤く上気していて、妙に色っぽい。

「ああ、おはよう。食事中に悪いんだけど、少し話いいか？」

「あむあむ……うん。いいよ」

口の中に含んでいた食べ物を牛乳で流し込み、ゴクンと喉を鳴らす。食べる手を止めたフィーナに続けて会話をする。

「実はバイトをしようと思ってさ。主であるフィーナに一応許可をね」

「え、バイト！？ 何でジユウヤが?!」

フィーナの疑問も最もだ。バイトをする必要性が全くないし、お金は学園に領収証を提出すれば使った額は戻ってくる。

仕事に時間を割く必要が無いのだ。だが、それでは十夜の良心は納得しなかった。

「ほら、寮も只で住まわせてもらっているからさ、せめて食費だけ

でも自分で働いて稼いだお金で払いたいんだよ」

色々と自分の為に尽してくれたフィーナに、十夜は働く事を決めたのだ。それに、働かざる者食うべからず、である。

バイト(3)

「えつと……こつちか？」

現在十夜は、情報誌に載せられた地図を頼りに、歩道を歩いて居た。一応ルーティス魔法学院の近くらしいのだが、地図が在っても迷い気味だ。

そもそも世界からして違う十夜にとっては、迷わない方が難しい。まあ、逆に迷って道を進んだ方が、案外道を早く覚えられるかもしれない。

ふう……道を全く知らないから面倒だし、時間が掛かるな。早く何処に何があるかを把握しないと。

しかし、取り敢えずフィーナから許可を貰えて良かった。学園に付いて行っても正直、暇なだけだしな。

バイトをする事には特にフィーナから反対はなかったが、金曜日はバイトを休んでほしいと言われた。

何でも、毎週金曜には学園で使い魔を使った授業があるらしい。何をやるのかはまだ話されていないらしいが、十夜としても少し楽しみであった。

「次は、あっちだな」

角を曲がり、歩道を歩いて行く。この世界でも変わらず走る自動車を見ながら、記された地図を一瞥する。

地図と現在位置を照らし合わせても、もう2、3分で着く筈だった。進んでいる道が正しければ、だが。

「地図で見ればこの辺りの筈」

「嫌だあああああああああ！……今日は絶対働きたくないえええええええええええ！」

十夜の独り言は突如、別の声によつて遮られる。大声がした方に視線を向ければ、ウェイターの制服を着た男が十夜の居る方向へと走つて来ていた。

「待ちなさい〜!! 今日は人数不足なんだから、絶対に働いてもらいます!!」

後からその男を走って追いつけるウェイトレス。短めのスカートが風でヒラヒラと舞い、見えそうで見えなかった。何が、とは敢えて言わないが。

「絶対に働かないぞ！！
んだからなあ！！！！！！」

今日は1日中ダラダラすると決めている

更に速度を上げ、ウェイトレスを引き離そうとする男。グングンと2人の距離は離れていく。

「くつ！ 足には自信があるんだけど、この格好では……あつ！
其処の人、その人に何をしてもいいですから止めてくれませんか！
！？？」

前方に居る十夜の存在に気が付いたウェイトレスは、疾走する男を止める様に頼んできた。

え、マジ……？ あの猛スピードで全力疾走中の男を止めると言うのか……？ 手で触れるだけでも弾かれそうな勢いなんだが……。いや、無傷で止める場合は確かに難易度が高いが、何でもしていいのなら……殺れるな。

フードで隠れていた双眸をギリリと光らせ、文字変換を誤った最後の1文字が脳内にインプットされてしまった。

疾走する男の軌道から左へ逸れ、十夜は道を譲ったかのような構図を作る。

そんな十夜に道を譲られたと勘違いした男は「ありがとう！！」と礼を言うが、そもそも道を譲る為に脇に移動した訳ではない。

「5……4……3……」

数を数えながら、男が横を擦れ違うタイミングを測る。腰を深く沈め、右足を後ろに引く。

「2……1……ハアッ！！」

気合の声を上げ、身体を捻る。左足を軸にし、独楽の様に身体を高速回転させる。鋭く研ぎ澄まされた回し蹴りが男に向かって放たれ

た。

ヒュンと矢の如く大気を唸らせ、蹴りが向う脛、所謂弁慶の泣き所に命中した。

「ぐわあ！……！」

走っていた勢いのまま地から足が離れ、スーパーマンの様に上半身が前に飛び出る。そして――

「ぐばああああああああああああああああああ……！」

自動車の様に激しくクラッシュした。

バイト(4)

「さあ、お店に戻りますよ」

「……………(瀕死)」

身体中傷だらけの男の足首を掴み、ズルズルと引き摺って行くウェイトレス。男の身体は既にボロボロだったが、地面に擦られて更にボロボロになっていく。

通行人から気の毒そうな視線が注がれるが、誰も止める勇氣を持つ者などおらず、店の中まで引き摺られて行った。

「中々に容赦がないな。敢えて足首を掴んで更にボロボロにするとは……………」

あのウェイトレスに恐怖、男に同情しながら、十夜はどんな店なのかと何気なく看板を見上げると、其処には「喫茶Angel」と店名が表示されている。

十夜が探していた店はまさに其処だったのだ。つまり、あの2人は其処の従業員と言う事になる。

うげっ……………俺が探していた店ってあの人達が働いている場所なのか……………。何か、第一印象的に嫌だな。

見なかった事にしようかなあ、あんな人が居る店は正直御免だ。何か色々面倒事が立て続けで起きそうだし。

もう寮へと帰ろうかと迷っている時、再び喫茶店から誰かが出てくる。その人物は先程のウェイトレスだった。

キョロキョロト首を巡らすと、視線が立ち竦む十夜を捉える。そして、小走りで此方に駆け寄って来た。

「さっきはありがとうございました。御掛けで助かりました」

優雅な動作で頭を下げ、感謝を述べるウェイトレス。鮮やかな立ち振る舞いに目を奪われながら、頬を掻いて頷く十夜。

「……いえ、まあ。俺も結構思いつきりやっちゃいましたけど、あの人は大丈夫でしたか……？」

打っ飛んだ時は顔面から地面に突っ込み、その後はボールの様にゴロゴロと転がっていた。

少しやり過ぎたと、申し訳なさそうな顔をする十夜。あの時の十夜はマジで殺る勢いだったから尚更心配だ。

ウェイトレスは心配そうにする十夜の肩をポンポンと叩くと、微笑みながら「大丈夫!!」と言う。

「あの人はゴキブリ並みにしぶといですからね」

「ははは……そ、そうですか」

その例えの仕方に乾いた笑い声を上げながら、無難に相槌を打っておいた。

「あれ、そのページって……」

突然、ウェイトレスの顔をグイッと近付き、十夜の手にある情報誌を覗き込む。必然的に距離が縮まり、香水の香りの様ないい匂いが鼻を燻った。

彼女が凝視しているのは喫茶Angelの情報が見せられたページだ。臆て情報誌から視線を放すと、今度は十夜を凝視する。

「あなた、もしかして家に働きたいと思って来たの？」

首を引っ込め、元の位置に戻るとそう問い掛けてくる。この時には既に敬語ではなくなっていた。

「ええ、一応」

「そう。なら、面接をしましょうか」

「えゝ！？」

ちよつと待て、いきなり面接か！？ もつと順序つてモノがあるだろう？！ それに俺、下見だけする予定だったんだけど……。

「家は今ちよつと人手不足だね。新しい子は大歓迎なの。どう、働いてみない？」

しかも、ほぼ採用が100%決まった面接だった。十夜としては直

に働き口が見付かる事は嬉しいのだが、どうにも素直に喜べなかった。

バイト(5)

「俺はコイツが家の店に働くなんて反対だ!! 俺の事をボロボロにしたんだぞ!!」

……第一声がそれか。まあ、俺としても此処に採用されてもされなくてもどっちでもいいんだけどね。

働き口は他にもまだまだあるし、駄目なら駄目で寮に早く帰りたい。

現在、十夜は喫茶Angelの面接室で面接を受けていた。そして、この店の“店長”が十夜の採用を反対していた。

「店長、家は今深刻な人手不足なの。猫の手でも借りたい状況なのよ。このままだと店長の休日がなくなるかもよ?」

二ヘラと、嫌な笑顔を向けながら、「休日でも関係なくコキ使います」と、遠回しに言うウェイトレス。

その発言に店長は「ぐぬぬ」と悔しそうに唸るが、最後には力が抜け、カクンと背凭れに身を預けた。

最早、どちらが店長なのか分からない。そもそも、この男には店長だと言う尊厳がまるでない。

「さて、まずは自己紹介でもしましょうか。私はリーゼ・フェンシア、此処ではキッチンとホールを担当しているの」

「それで、こっちの人がゲイン・ゾール。ぐうたら怠け者の御飾り

店長」

「ちよっ!?!? 俺の説明酷くない?!」

「煩い、事実です」

キツパリと切り捨てられ、項垂れる自称店長。十夜も被っていたフードを脱ぎ、顔を出す。これはまあ、当たり前である。

服装は変わらず外套を羽織っているが、まさか面接をする派目になるとは本人は予想だにしていなかった。

今まで隠していた端麗な容姿を表に出し、キラースマイル笑顔を浮かべながら自己紹介をする。

「自分はジュウヤ・カザマです。よろしくお願いします」

十夜が素顔を晒すと、2人は何故か石の様に固まった。そして、リゼの顔に赤味が帯びていく。

「(う、嘘!?!? すっごく可愛い……これなら家も繁盛して、直に従業員が集まるかもしれない……)」

「採用決定だ!!」

「「切り替え早やつ!?!?」」

最初は反対していたのに、十夜の容姿を見た途端に意見を180度変えるゲイン。

その変わり様に十夜とリーゼの声は思わずハモるのだった。

「それじゃあ、後はリーゼ君に任せるから。よろしくなっ!」

「ちょっと、店長!」

言^{タタス}つや否や、もの凄い勢いで面接室を飛び出し、駆け出して行く店長。リーゼが慌てて呼び止めるが、ゲインは止まる事はなかった。

「ハア……全く、あの人は……」

リーゼが深く溜息を吐き出し、十夜は半開きのままの扉を見やる。あんな人が此処の店長だなんて、御愁傷様としか言いようがない。

しかし、此処で十夜も働くことになったら、他人事だけでは済まされなくなる。

「まあ、いいわ。それで、ジュウヤさんでしたっけ? 昨日と今日、会ったのは二度目ね」

「……え、二度目?」

リーゼの口から出た思わぬ言葉に目を瞠り、頭にハテナマークを浮かべながら復唱する。

あれ、俺この人と会った事があつたっけ……? 記憶にまるでないのだが。

おかしいな、会った人なら大抵忘れずに覚えている筈なんだが……。

「思い出せないみたいね。じゃあ、ヒントとして……「ラーメン」
って言えば分かるかな？」

「ラーメン……あっ!？」

リーゼの顔を良く見れば、十夜が食堂でトレーを預けたあの女性だった。あの時は色々と大変だった為、他人の顔を覚えられる程に余裕がなかったのだ。

バイト(6)

「あの時は助かりました。ホントに急いでいたので」

「ええ、困った時は御互い様。だから、今度は私を助けると思って、此处で働いてくれないかしら？」

……まあ、少し言い方が汚く感じるが、世の中はギブ&テイクで成り立っているしな。

俺としてはあの時、トレーを預かってくれてマジで助かったから、今回はこっちが人肌脱ぐか。

「うんうん」と頷きながら、十夜は改めてリーゼを観察する。

銀色というよりは、やや灰色に近い薄い髪。小柄な顔に、穏やかな色をした栗色の瞳。その睛眸とは対極的に、目元は凜としていて鋭い。

手足が長く、四肢は見た目的に華奢に見えるが、十夜の目からは特に脚が良く鍛えられている事が分かった。恐らく走るのを得意としているのだろう。

服装の構成はブラウス、ベスト、スカート。ブラウスはシャツカラーで黒の半袖で、第一ボタンを外している。

ベストは前身頃がグレーで後身頃が黒のツートン、5つボタンで小さなショールカラー付きだ。

左の胸ポケットには数本のボールペンと、銀色の綺麗な形をした羽根がある。

An angelだから羽根をモチーフにしたシルバーアクセサリを付けているのだらう。羽根1枚1枚が丁寧に作られ、見事な仕上がりになっていた。

スカートは黒の膝丈フレア。ウェイトレスの制服としては珍しく細いアコーディオンプリーツ。足元は黒のハイソックスに黒のサンダルを履いている。

「分かりました。此方の店で働かせてもらいます」

「そう？ 良かった。早速だけどこの書類に必要事項を記入して頂戴」

机の下から出されたのは「アルバイト 労働契約書」。項目には契約期間、就職の場所、従事すべき業務の内容など、細やかに書かれている。

十夜はリーゼに質問しながら、空欄を次々と文字で埋めていった。取り敢えず契約期間は3ヶ月契約にしたが、契約はまた更新出来る為、今はこれでいいだろう。

最後に住所と電話番号を記入し、十夜は漸く書き終えたのだった。

「……あら、ジュウヤさんって今学生なの？ この住所って確かル

「ティス魔法学園の寮よね？」

その言葉に、十夜の肩がビクッと上下する。まさかリーゼが住所だけで学園の寮に住んでいる事が分かるだなんて思いもしなかった。

これは……非常に不味いぞ。出来れば俺が異世界から来た事はあんまり知られたくない。

だが、嘘をつくのも正直嫌だ。俺は嘘をつくのが大っ嫌いなんだよ。嘘をつけばその嘘を隠そうとまた嘘をつく。相手を傷付けない為の優しい嘘ってのもあるが、それも気に食わない。

結局は傷付く相手の姿を見たくないだけだからな。それなら正直に話して、一緒に乗り越えた方が絶対いい。

そんな事を繰り返していればお互いの信頼関係は冷え切り、最終的にバレた時点でもう終わりだ。

……何か脱線したが……一応、正直に話してみるか。ま、多分信じてもらえないと思うけどなあ。

バイト(7)

「——と、言う訳でして、自分はこの世界の人間じゃないんです」

今までの経由を分かり易く説明し、顔を伏せる十夜。信じてもらえないと思っている十夜は怒声の1つでも浴びせられる覚悟をしていた。

自分は「異世界からやって来た人間だ」。こんな事を言い出す人間は、頭の螺子が何本か吹き飛んでいる奴か、電波系をキャッチ出来る人だけだ。

普通はそんな事を言っても「ハア？ お前なに言ってるの」と言われ、それで終わる。ましてや、今のこの状況、面接時で言う言葉ではない。

さて……鬼が出るか、蛇が出るか……。出来れば信じて貰えるといんだけどな……。

でも、やっぱり無理かなあ。俺ももし地球に居て、友人が「実は俺異星人なんだ」って言われても全然信じられる気がしない。

って言うか、普通に「ふうん」的な言葉を返しなからスルーするな、うん。

「そう……大変だったわね」

「……え！？ 信じるんですか?!」

全く予想していなかった返事に、双眸を見開きながら思わずリーゼを凝視する。まさか信じてくれるとは夢にも思わなかった。

少し、人を信用し過ぎるのではないだろうか？ まだ2回会っただけで、十夜とリーゼはほぼ他人同然なのだ。

「リーゼさんは……詐欺とかに良く引つかかりません……？」

「……失礼ね、私は人を見る目はあるわ。それに、“貴女”の真剣な表情で事実だと理解出来たの。我ながら、自分でもまだ驚いているけどね」

苦笑しながら肩を竦めるリーゼに十夜も安堵の溜息を吐く。何時の間にか入っていた肩の力を抜き、椅子の背凭れに身体を預けた。

その様子をリーゼがクスクス笑いながら目を細め、十夜は取り敢えずは信じてもらえた事を嬉しく感じた。

「あつ、そうそう。シフトの事なんだけど、ジュウヤさんは何時から仕事に入れそう？」

「そうですね、明日からなら大丈夫です。後、毎週金曜日に使い魔を使う授業があるみたいなので、その日は休みでお願いします」

姿勢を正しながらそう言い、毎週金曜日に休む事を伝える。予め十夜が使い魔だと知っていれば、此方の都合に合わせてくれるから何かと便利だ。

「分かったわ。週3回休みに、4回出勤でいい？」

「それでお願ひします。それと、この店ってケーキとか売ってます？」

「ええ、売ってるわよ」

その返答に頷き、帰りに買って行く事を決める十夜。この店で売って良かったと、安心の溜息を吐く。

またチョコレートケーキを買い忘れたら、色々と翠に言われそうだからな。

俺も久々にケーキが食べたいし、多目に買っていくか。フィーナはどんなケーキが好きかなあ。

最後に細かい事をリーゼと色々決め、十夜は漸く面接室から解放されるのだった。

「ただいま」

「おかえりー ジュウヤ」

昼食を作っていたのか、エプロン姿のフィーナが出迎えてくれた。何だかこの構図が新婚夫婦のアレに近い。

「それで、どうだったの？」

早速成果を聞いてくるフィーナに、十夜は親指を立てながら笑顔を浮かべる。この笑顔だけでも結果がどうだったか直に分かる程に、十夜の笑みは輝いていた。

「採用された。明日から働く予定だ」

「わぁ！ 良かったね！！ 今夜は御馳走を作らなくっちゃ」

嬉しそうに笑顔を浮かべて、自分の事の様に喜ぶフィーナ。バイト先が決まったぐらいで、少し大袈裟だと思うが、それも悪くない。

何処で働くかなどを話しながら、十夜とフィーナはダイニングキッチンへと入って行った。

朝の風景？（１）（前書き）

時間の都合上かなり短いです。

朝の風景？（１）

「うっん……もう、朝ね」

「ふぁ〜」と眠たげに目を擦り、何時もの様に十夜と同じベッドで寝ていた翠は起きる。そして、視線を隣で寝ている人物に向けた。

「スウー……スウー……」

付喪神とは言え、性別的にも女性である翠を全く気にせず、十夜は爆睡中。翠としては、少しでもいいから意識してほしいぐらいだった。

大小、大きさはかなり異なるが、男と女なのだから。

まっ、コレに期待するだけ無駄ね。恋愛やその手の話についてはトコトン鈍感なんだから。

それに、きっと私の事は最初から家族として見ているわ。まずは其処をどうにかしないと……。

翠は自分をどうやって1人の女として見てくれるかを考える。矢張り、今まで近過ぎたのがいけなかったのだろうか。

幼馴染と同じで、近過ぎる異性は恋愛対象として入らない。中には例外もあるだろうが、ほぼ実る事はない。

十夜と子供の頃から付き合いのある翠も当然、恋愛の枠に入っていないだろう。唯一の救いが、十夜がまだ好きな人が居ない事ぐらい

だ。

「（いえ、“居ない”と言うよりは、“居た”、ね……。あの子が生きていれば、きっと2人は今頃恋人同士だったと思うわ……）」

隣でスースー眠る彼の顔を眺め、小さく嘆息を零す。自分でもらしくないと胸奥で思いながら頭を振り、ベッドから跳び降りる。

過去は過去、今は今。幾ら彼女の事にしがみ付こうが、逝ってしまった者はもう二度と還らない。

「十夜も、割り切れているといいのだけど……」

最後にポツリと呟きを残すと、部屋を出て、ダイニングキッチンへと歩いて行った。

「ケーキでも食べようかしら」

十夜が昨日買って帰ってきたケーキの存在を思い出し、冷蔵庫を見上げる。だが、ミニマムサイズの翠には冷蔵庫を開けるどころか、取っ手にさえも手が届かない。

「久しぶりに元の大きさに戻るしかないわね……」

面倒臭そうに肩を竦め、スッと目を閉じる。シンと静まった室内に静寂がドシンと腰を下ろし、時計の針の音だけがやけに大きく響く。

そして、それから数秒後、変化が起きた。翠の身体から突然白い光が溢れ、その光は彼女の身体全てを包み込んだのだ。

それは円状の丸い球体になり、徐々に大きさが増していく。

5分後、ダイニングキッチンには和服を着た綺麗な少女が佇んでいた。

朝の風景？（２）

『んっ♪ やっぱりチョコレートケーキは最高だわ』

元の掌サイズに戻り、箱の中に入っていたプラスチックのスプーンでケーキを食べている。その表情は幸せで緩み切っていた。

今のサイズだと翠にとってはスプーンもかなりデカイが、両手を上手く使いながら器用に食べている。

やっぱりチョコは最強ね。この力カオの香ばしい香りが何とも……。

チョコを作りあげた人は偉大よね。まだ生きていたら是非ともサインを貰いたい所だわ。

スプーンでケーキの山を削り、ハムハムと夢中で食べていく。だが、この時の翠は夢中故に、背後から接近する気配にまるで気付かなかった。

突如、テーブルの上に影が差す。『んっ？』と振り返った翠の眼前には、間近で凝視していたフィーナの顔が視界を覆う。

『きゃあっ！！』

思わず、可愛らしい悲鳴を上げる翠。スプーンを咄嗟に投げ捨て、食べ掛けのケーキに身を隠す。

もう殆ど食べてしまっていた為、あまり身を隠せていないが、本人はそれ所じゃなかった。

まずいますまずい、見られたわ！！ 一生の不覚。この私がケーキに夢中になり過ぎてフィーナに見付かるだなんて！！

……でも、流石チョコレートケーキだね。この私を此処まで追い詰めるだなんて、やるわね。

……若干思考がズレているが、結局見付かった事には変わりなく、フィーナから「じゅ」っと視線が送られる。

翠はこの後をどうするか迷いながら、ケーキの壁からちょこちょこ顔を出し、フィーナの様子を窺う。

「かつ……可愛い！！」

バツと身を乗り出し、驚くべき早業で翠を捕まえるフィーナ。翠は翠で一体何が起きたのか理解出来ず、ポカンとなる。

『いや、あの……ちょっと』

そして気が付いたら、何時の間にかフィーナの手でギュッと握られていた。

「何コレ、凄く可愛いっ 人形みたい！！」

何かを言おうとするが、乙女のように目を輝かせるフィーナに思わず口を噤む翠だった。

「おはよ……うつ？」

起きてきた十夜は、ダイニングキッチンで繰り広げられる光景に思わず立ち止まり、語尾が疑問形になる。

「うん、このケーキも美味しいね」

『そうね、だけど私的には少し甘さが足りないわ』

「ええ〜？ そうかなあ。十分甘いと思うんだけど」

『超甘党の私の舌を唸らせるにはまだまだ駄目ね』

其処には、本当の姉妹の様に仲良さ気に話す2人の姿があった。

朝の風景？（3）

『あ、おはよう、十夜』

「おはよ〜」

「あ、ああ……おはよう」

仲良く話す翠とフィーナの姿に一瞬戸惑いながら、平静を装ってテーブルに着席する。

彼女達は相変わらずケーキに舌鼓を打ち、アレが美味しいだの、コレが微妙だの、話しに花を咲かせていた。

状況的にも、フィーナに翠の存在がバレてしまった様だが、彼女は翠と旧知の友人の様に隔たりなく接している。

……と言うか、フィーナは翠の存在に何ら疑問は抱かないのか……？ 10？サイズの人間が目の前に居て、もっところ……あるだろ。

まあ、仲良くしているのならそれに越したことはないが、こんな事ならもっと早く紹介しとけば良かったかなあ。

最初から隠す必要はなかったな。フィーナは人間以外でも簡単に友達になれるスキルを保持しているようだし、何より性格が穏やかな彼女を嫌う奴はまず居ない。

未知の生命体（翠）でも直に友達になれるのだから、アイツも呼んで大丈夫かな？ 俺はバイトでフィーナから離れるから、代わりの

者を傍に置いておきたいし。

「スイちゃん、顔にクリームが付いてるよ？」

『え？ 何処何所』

慌てて頬を手で触るが、クリームが付いた額には気が付いていない。フィーナが「其処じゃなくて此处」と、手を伸ばして額のクリームを拭き取る。

その行為に恥ずかしそうにしながら、頬を掻く翠。繰り返すようだが、ホントに仲が良い。

元々相性が合っていたのだろう。翠の姿が人サイズだったのなら、間違いなく姉妹に見えるだろう。どちらが姉かは、言わずもなだが。

「（しかし、朝っぱらからケーキとか……胃が靠れそうだ。結構多目に買った筈何だが、もう数個しかないじゃないか）」

ケーキの周りを包む透明なフィルムが次々と剥がされ、スプーンで削り取られていくケーキ達。

自分の為に買った分は既にどちらかの胃袋の中のように、食べられなかった事に残念に思うが、幸せそうな表情をしているフィーナ達を見ていると、「まあいつか」と納得する十夜だった。

「ふう〜 結構食べちゃったねえ〜」

『そうね。まあ、私にはカロリーと言う文字は意味ないけどね』

「あつ、私はちよつとヤバイかも……」

満腹に膨れ上がったお腹を擦りながら、苦笑いするフィーナ。朝からケーキ6個以上は、色々和不味い。

腹部の肉、と言うよりは皮を摘みながら、「あつ！」と思い出したように、十夜に顔を向ける。

「十夜はまだ朝食食べてないよね。何か作ろうか？」

「いや、俺はいいや。何かフィーナ達の食べてる姿を見ていたら、お腹一杯になった」

物理的には満たされていないが、ケーキを無心で食べていく姿に違った意味でお腹一杯。食欲が削がれたとも言える。

「けど、これから仕事でしょ？ 何かお腹に入れないと駄目だよ」

心配そうな顔をしながらそう言うフィーナに十夜は頭を掻き、「そうだなあ……」と唸る。

「じゃあ御握りを何個か握ってくれるか？ 空いたらそれを食べるからさ」

その提案に、フィーナは「うん！〜」と頷きながら、直に準備に取り掛かるのだった。

朝の風景？（４）

「フィーナ、実はもう１人紹介したい奴が居るんだ」

「もう１人、スイちゃんの他に？」

「ああ」

十夜は頷くと席を立ち、なるべく広い場所に移動する。この時には既に意識のスイッチが切り替わっており、表情は真剣其の物だった。先程までの穏やかな空気は一瞬で消え失せ、重苦しい空気が辺りを包み込む。瞳をゆっくり閉じると、人差し指と中指を立て、親指を薬指の側面に当てる。

……久しぶりに召喚するからな、上手く出来るかどうか……。やる前に一応九字護身法をやっておこう。

まあ大丈夫だと思うが、念の為だ。もし失敗したら疲れ損だからな。やるなら一発で成功させたい。

「九字護身法」と言っても、これで身を護ると言っ訳ではなく、精神集中や自己暗示の為の御呪いの様なモノだ。

重要な任務に就く前や、敵地に侵入する前などに精神を統一し、「こうすれば大丈夫」と強烈な自己暗示を掛ける為に行っていたのだ。つまり九字護身法とは、心の不安や動揺を打ち消す精神安定の方法なのだ。十夜は主に精神統一の為に使う。

「臨、兵、闘、者、皆、陣、烈、在、前」

忍者が印を組んで術を発動させる状態から指を高速に動かし、複雑な印を結んでいく。

既に精神は統一され、周りの事は見えていない。何時もの十夜とは別の、近寄り難い雰囲気纏っていた。

フィーナはテーブルに座りながら息を凝らし、唾をゴクンと飲み込みながら翠と見守った。これから何が起きるのかと、期待に胸を膨らませながら。

そして、十夜はスウツと息を吸込むと、言霊を紡ぐ。

「終末を告げる、災厄の獣。地を砕き、天を紅に染め、万物を喰らう古の妖狐。我が命の元に顕現せよ、九尾！！」

何やら物騒な呪文が詠唱されると、十夜の目の前にボンツと白煙が立ち込める。

閉じていた双眸を開くと、次の刹那には十夜の胸部に衝撃が走った。

「じゅっ！！」

白煙から猛烈な速度で何かが飛び出し、それは十夜の鳩尾にクリテイカルヒットした。

肺に溜まっていた酸素が無理やり吐き出され、そのまま床へと打っ飛び、転がる。そして足を掴まれ、白煙の中に引き摺り込まれる

「ジユウヤー!!」

『大丈夫よ。何時もの事だから』

今にでも駆け出しそうなフィーナを止め、翠は何故だが疲れた様に溜息を吐く。聴て煙が晴れると、其処には1人の美女が十夜に抱き付いていた。

艶やかな銀髪に、三角の獣耳。銀色の瞳孔は細まり、九の尻尾が嬉しそうに揺れている。

頭部の右側には狐の面が付いており、肩が大きく肌蹴たピンクの浴衣を着ていた。

「十夜殿お、十夜殿お!! 会いたかったのじゃー!!」

たわわに実った果実に十夜の顔を無理やり押し付け、凶悪な握力で抱き締める妖艶美女。十夜は天国と地獄の狭間で「むううう~~~~」
「!!!!!!」と苦しそうに呻いていた。

朝の風景？（５）

妾は久方振りに再開した十夜殿に感極まり、思わず抱き締めてしも
うた。^{わらわ}

十夜殿は相変わらず、黒い外套とフードで身を包み、己の姿をあま
り晒そうとはしない。妾と初めて出会った時と同じまんまじゃ。

容姿は男前、と言うよりは女前じゃが、整っているのは事実。何を
隠す必要があるのじゃろう。

もつと堂々としていればモテて……は困るのじゃが、ホントに口惜
しい。せめて家の中だけでも脱いでくれんかのう？

そうすればあの見目麗しい顔がずっと堪能出来るんじゃが……。

ギュツと十夜の頭を抱き締め、フードの上から頭を撫でる。その双
眸は慈愛が籠っており、穏やかな表情だ。

「むうううう！！！！」苦しみもがき、穏やかじゃない人物が１
名居るが、本人は全く気付かない。

「はあ……癒されるのじゃ」

十夜の頭を抱き締めたままうつとりとした表情をし、九の尾も身体
に巻き付ける。

次第に十夜の抵抗がなくなっていき、身体がピクリとも動かなくな
る。流石に不味いと思った翠は慌てて声を上げた。

『ちよ、ちよつと珠季たまき！！　いい加減にしないと十夜が窒息して死ぬわよ！？』

「なぬっ！？」

ハツとなって両手の力を緩めると、フード越しにでも分かる程に顔が青褪め、ぐったりとしている十夜が其処に居た。

「わ、妾は何て事を！？　しっかりするのじゃ十夜殿お！！！！
十夜殿お~~~~！！！！！」

パニックになった珠季は十夜の外套を掴んでグワングワン身体を揺らし、無理矢理にでも意識を覚醒させようとする。

しかし、その行為によって十夜の顔色は更に悪くなる。

『落ち着きなさい珠季！！　貴女は十夜に止めを刺す気！！！？』

「あわわ、ジュウヤ大丈夫！？」

フィーナと翠が駆け寄り、暴走する珠季を止める。十夜にとってはとんだ朝の出来事だった。

「あ、れ……俺は」

深く底に沈んでいた意識が急激な速度で浮上し、意識が戻る。まだ

未覚醒な意識の中で、ボーッと天井を眺めた。

ふと、誰かの柔らかな手が自分の頭を撫でている事に気が付く。優しい手付きが頭部を撫で回し、その櫛ったさに身動きする。

「……………あつ、目が覚めたかのう……………」

心配そうな顔。頭に付いた三角耳がシュンと申し訳なさそうに垂れている。そして今、十夜は珠季に膝枕されていた。

……………この状況は一体どういう事なんだ……………。それに、あの後どうしたんだっけ……………？

珠季を召喚した後の記憶が凄く曖昧だ。天国と地獄の間で苦しんでいた記憶が微かにあるが……………思い出せない……………。

「すまぬ、十夜殿。妾の所為で苦しい思いをさせてしもつた……………」

上から見下ろす珠季の潤んだ目からは今にでも涙が溢れ出そうだった。

朝の風景？（6）

「珠季……？ どうした、そんな顔をして」

珠季は今直ぐにでも泣き出してしまいそうな、そんな表情をしていた。目には涙が溜まり、唇を嚙んでいる。

まるで泣くのを我慢しているように見える。一体何が彼女を其処まで追い詰めているのか、今の十夜には解らなかった。

……俺には、そんな顔を見せてほしくないんだがな。女性っていうのは泣いてるよりも笑っている方がずっといい。

しかし、何でこんな状況になっているのかがイマイチ解らない。何で珠季が謝るんだ……？

記憶が曖昧だし、何かがあった気がするんだが、変なボヤが掛かっているし。

自分の今の状況が全く理解出来ず、首を捻る。あの時の十夜は体内の酸素を失われていた為、脳に意識的な障害が発生していた。

まあ、障害と言ってもこの通り、何かあったのが思い出せなくなっているだけなのだが。

「だって……だって、妾の所為で十夜殿があ……」

遂には堪え切れなくなった涙腺から大粒の涙が溢れ、十夜の顔へと滴る。ポツポツと熱い水滴が十夜の顔に何度も落ちた。

罪悪感。もしあの時、気が付くのが遅かったら十夜は本当に危なかった。もう少して自らの主を殺していた所だったのだ。

十夜を慕い、共に死ぬ覚悟のあるこの九尾狐には己を罵倒する程の失態だった。

「泣くな……お前が泣いていると俺まで泣きたくなってくる」

腕を伸ばし、指先で涙を拭う十夜。その手は次にフサフサな獣の耳が付いた頭を撫で始める。

何があったのかが徐々に思い出していた。いや、思い出したと言うよりは、思い出させられたと言うか……。矢張り女性が泣いている姿は俺的にはトラウマものだな……。

過去の、無力な自分を思い出させられる。あの忌々しい過去が、お前の罪とはがりに突き付けられる。

脳内に過るのは、血塗られた真つ赤な床に、踊り狂う紅蓮の炎。辺り一面が紅に包まれ、其処は地獄だった。

そして、肉塊となつても尚、その炎に焼かれ続ける家族。その傍で、壊れた様に笑いながら、血塗れの刀を持つ1人の女性が立ち竦んで居た。

「泣くな……お前が泣いていると俺まで泣きたくなってくる」

そう言つて顔を歪め、妾の涙を拭う十夜殿。そして、嘗てもそうしてくれただように、妾の頭を優しく撫でてくれる。

やっぱり、十夜殿は今も昔も変わらんのう。人一倍女性に気を使うくせに、鈍感で、だけどそんな主に妾は惹かれてしもつた。

何時になったら妾の想いに気付いてくれるのじゃうろ。それとも、先に既成事実でも作つてしまおうかのう……。

何やら怪しい事を企てながら、気持ち良さそうに目を細める珠季。しかし、珠季は不意に気が付いてしまった。

十夜の目が、まるで死人の様に何も映していない、生気を感じさせない瞳になっている事に――

「っ！？ 十夜殿――」

「あつ やつと起きたのね、この寝坊助」

呆れと溜息が入り混じった声が、珠季の声を遮る。声のした方を見やれば、翠を頭に乗せた制服姿のフィーナが自室から出て来た所だった。

「ああ、翠か。悪いな、今さっき目が覚めた」

十夜が珠季の膝から立ち上がり、笑みを浮かべながら立ち上がる。珠季だけはボツとした顔でまだ座ったままだ。

「……十夜殿、さっきのあの目は、一体どういう事じゃ……。アレ

は……あの目をする者は――」

――この世の絶望を味わった者だけがする目なのじゃ……。

呟いた声は、背を向ける十夜には届く事はなかった。

喫茶Angel(1)

「じゃあ珠季、フィーナの事を宜しく頼むぞ？」

『さつきみたいな失敗はもうしないでよね』

何度も釘を刺され、苦笑しながら頷く珠季。先程から似たような事を何度も言われているから、既に耳が痛い。

しかし、それでもやる気はあった。正直、もつと十夜と傍に居たいのが本音だが、他ならぬ十夜からの頼みだから無化には出来ない。

さつはみたいに詰まらぬ失敗をしないよう、気合を入れ、笑顔で十夜と翠を見送る。

「大丈夫じゃ、任せておけ！！ フィーナ殿の身は妾が命懸けで護つてみせるのじゃ！！」

胸を張りながら腰に手を当て、尖った犬歯をキラリと見せる。殺る気は十分あるようなのだが……。

……その気合が仇とならなければいいけどなあ…… ホントに任せて大丈夫か……？

本来なら翠もセットで置いて行きたい所だが、何か俺と一緒に行きたいと言っし。色々と不安だ。

まあ、取り敢えずは珠季を信じよう。1人でもある程度の事は出来るし、居ても邪魔にはならない筈だ。伊達に長生きはしていない。

フードと髪の毛の間に隠れた翠と、腕を捲り、ガッツポーズを見せる珠季の姿に、どうしても一抹の不安を覚えてしまう十夜。

今日は何故だか、嫌な予感がかなりしていた。十夜の嫌な予感と言うのは、意外と良く当たるのだ。

1日、無事に終わってくれればいいと願いながら、十夜は靴を履く。

「じゃあフィーナ、一足先に行ってくるな。勉強頑張れよ」

「うん、行つてらっしゃい。ジュウヤもお仕事頑張つてね」

フィーナと珠季に見送られながら、外を出る。今日も空は晴れてはいたが、どうにも雲行きが怪しかった。

「おはようございますーす」

「準備中」と、札が掛けられた扉を開け、挨拶をしながら店内に入る。

来店を知らせるベルがカランコロンと鳴り響き、店内でモップ掛けをしていたリーゼが振り返った。

「あつ、おはようございます。結構早めに来たのね？」

「ええ。道も確認したかったので、少し早目に家を出ました。まあ、

早いつて言つなら、御互い様ですよ」

先に仕事着に着替え、床を清掃していたリーゼもかなり早いと言える。その返答にお互い顔を見合わせると、どちらともなく笑みを零した。上司との交流関係は問題なさそうだ。

「制服を今持ってくるから、ちょっと待っててね」

モップ絞り器とモップを持ち、奥へと引っ込んでしまつリーゼ。それを見送り、言われた通り待つ。

それから数分後、透明な袋に包まれた制服を抱えてリーゼが戻ってくる。

「お待たせ。ジュウヤさんって結構細いから、この制服を探すの苦労しちゃったよ。もしかしたら少し大きいかもしれないけどね」

そう言つて、十夜に広げて見せた物は――

「え……？」

――“女性用”の制服だった。

喫茶Angel(2)

「おはようございます」

その声に、リーゼはモップで床を拭く手を止め、背後を振り返った。其処には黒い外套で全身を覆った人物、十夜が立って居た。リーゼは挨拶を返しながら、十夜の姿を改めて観察する。

昨日も思った事だけど、ジュウヤさんって何でフードを被っているのかしら……？

あんなに可愛い顔をしているのだから、隠す必要はないと思うんだけど。それとも、何か理由があるのかしらね？

まあ、人それぞれ色々あるわよねえ。まだ出会って間もないし、無駄に詮索して御互いの関係が悪くなっても嫌だから、聞かないでおきましょうか。

会話をしながら思考は別の事を考え、リーゼは清掃用具を片付け始める。汚くなった水を捨て、道具は掃除用具入れの中に仕舞った。

「制服を今持ってくるから、ちょっと待っててね」

十夜が頷くのを確認して、昨日に幾つか洗濯をしいた制服を取りに行く。

リーゼはそのまま女性用の更衣室に入り、余っている制服一式が入っているロッカーを開けた。

「うーん、ジュウヤさんってかなり細いから、これでは少し大き過ぎるかしら？」

他の制服と比べながら、中でも特にサイズが小さい制服を手にとって見る。だが、これでもまだまだ十夜には大き過ぎる様だった。

……これは、私には絶対着れないよね。どうやったらあそこまで細くなるのかしら……羨ましい。

全体的にスラッとしてて背も高いし、顔も良いつてどういう事よ……。

「……けど、胸は余裕で勝っているわ」

何となくそう呟きながら胸を張ってみたものの、凄まじい敗北感が身を襲う。寧ろ、張り合う事こそが烏滸がましい。

「ハア……あれで胸も大きかったら、きっと私は立ち直れない」

女性が望む理想的なプロポーションの十夜を羨ましながら、喫茶Angelの中でも特にサイズが小さい制服一式を手に取り、更衣室を出た。

「お待たせ。ジュウヤさんって結構細いから、この制服を探すの苦労しちゃったよ。もしかしたら少し大きいかもしれないけどね」

リーゼは透明な袋に包まれた制服を十夜に見せると、十夜何故かその場で固まってしまう。

フード越しにでも分かる程、彼の口はあんどりと開いていた。

そして固まって数秒後、十夜がリーゼに問い掛ける。

「……あの、男の俺にそれを着ると……?」

……へっ? 今、ジユウヤさんはナンテイイマシタ……?

おとこ、男、お、お、お——

「男おおおおおおおおおおおおおおお!!!?」
「?」

突然のリーゼの絶叫に十夜は後退りながら耳を押え、目を見開く。

まあ、いきなり近くで叫ばれば、誰でもそうなるだろう。

え!?! 嘘!!! 本当?! コレが男ってありえないわ!!! 異議を申し立てる!!!

だって昨日ちゃんと顔を見たの!? それで男とも気付かないなんて……ハッ!?!……まさかこれが女顔って奴かしら……?

あつ……でも、もしジユウヤさんが男だったら、非常に不味い状況だわ。家の店長は男を雇わないから……。

「え」と、ジユウヤさん。少し、お話しようか」

顔を引き寄せながら、リーゼは何とかそう言った。

喫茶Angel(3)

「ジユウヤさん、家は男の人は雇っていないのよ。確か求人情報誌の下の方にも女の子限定と書いてあった筈だわ」

「……………どうして男は雇っていないんですか？」

一問置いた後、何故男は雇わないのか聞いてみる。何か男が雇えない理由でもあるのだろうか？

女の人だけで経営するのは色々大変だろう。店長は男だが、あの人は役には立たない。ヤクタタス

テーブルを動かしたり、特に力の要る作業にはどうして男性スタッフが必要だ。

「そうなんだけねえ……………店長が……………」男の働いている姿なんか見たくねえ！！俺は女の子が一生懸命働いている姿が見たいんだ！！」とか豪語して、男の人を募集していないの」

「……………はっ？」

その言葉に思わず固まり、口がへ字に曲がる十夜。リーゼは「ハア……………」と疲れた様に溜息を吐き、小さく肩を竦めた。

……………おい、ちょっと待て！！まさかそれだけの理由で男を雇っていないのか！？ホントにあの人店長なのかよ？！

理由がすげえ不純なんですけど！！つか、働いている女性の姿が

見たいって……何処の変態だよ……。

「……だからね、家は女の子ばかりだし、マナーが悪いお客様も結構居るの。そういう手合いが現れた時に、力があるジユウヤさんが収めてくれれば此方としては凄く助かるのよ」

「もう解っているかもしれないけど、ヤクタス店長は使えないから、だから、お願い！！ 給料も弾むから！！」

つまりは女装をして働けと言う事だ。男が働いている姿が見たくない店長に見られればクビで、しかも十夜にはメリット所か、デメリットしかない。

いや、給料がアップするのなら、一応はデメリットだけではないのだが、それと男のプライドでは全然吊り合わなかった。

頭を下げて懇願するリーゼを視界に収めながら、思考する。

……どーするか。正直俺としては、女装は勘弁してもらいたい所だが……俺の事情を唯一知ってる人だしなあ。

それに困っているのなら、出来るだけ助けになりたいのも本音だ。けど、けどなあ。

女装が必須条件かあ……嫌だけど、リーゼさんの為と思えば、やれなくもない。

いや、待てよ……。もういつその事、店長を殺るか……。？ 月の隠れた夜に背後からサクツと殺った方が、きっと世の為だ。

証拠1つさえ残さずにこの世から消滅させればいい……。俺なら楽勝だ。

小さく口元を歪め、「フッフ……」と笑う十夜。フードを被った人物が怪しげに笑う姿は、頭がイッてるんじゃないと思うぐらい不気味だった。

実際、いきなり笑い出した十夜にリーゼはドン引きし、軽く身を引いている。それに気が付いた彼はハツとなって笑みを消し、至極真面目な顔に戻した。

……まっ、冗談は置いといて、だ。もう契約書もサインしちゃったし、今更後には戻れないよな。

リーゼさんの為だと思って前向きに考えよう。これが切っ掛けで未知の扉を開くとかは……。絶対にはなりたくないがな……。

「……分かりました。これから宜しく願いします」

頭を下げた十夜に、リーゼはホツと胸を撫で下ろしながら、笑みを浮かべた。

「此方こそ、宜しく願いします」

こうして、女装への道を進む事になってしまった十夜でした。

喫茶Angel(4)

「はぁ……」

十夜は重たい溜息を吐き、目の前の鏡に映る自分の姿を見やる。

もう何度も見ているが、鏡に映った己の姿は、「女装がバレバレの男」としか映らなかった。“十夜本人のみ”だが。

普段見慣れている顔で女装しても、本人には違和感もなく、似合っている等とは微塵も思っていない。

あゝあ……この姿で外に出たら、何だか通報されそうだ。やっぱり俺が女装とか無理があるだろ。

今更文句言ってもしょうがないけどさあ、精神的にかなりキツイな。これで接客するんだから、地獄を通り越して拷問だ。

もう一度深く溜息を吐き、項垂れる。溜息を吐く度に幸せが逃げると言いが、今は溜息を吐かないとやってられない状況だった。

『（私からすれば、凄く似合っているけど……そう言っても信じないわよねえ）』

胸ポケットから顔だけしている翠は、鏡に映っている十夜の姿を見て、内心そう呟く。

十夜以外の人間からすれば、今の姿は1人の可憐な美女としか見えないだろう。

束ねられていた長髪はゴムから解放され、身動きする度にサラサラな艶のある髪は背を流れている。

整った腰に、アコーディオンプリーツから真っ直ぐに伸びる細い脚。スラリとモデルのようなスタイルで、立って居るだけでも絵になる。

日本人形の様な、鮮麗された顔の輪郭。肌は白く、職人が生涯を掛けて磨き上げた作品の様に光沢している。

スツとした繊細な鼻梁に、パッチリとした二重瞼。硝子の様に透き通った紅と紫の眸。誰もが息を飲む程の絶世な美少女だ。

上半身に纏ったブラウス、ベストは矢張り十夜には少し大き過ぎる様だが、それでも問題なく着こなしている。

着替えた十夜は「女子更衣室」から外に出る。二度言うが、女子更衣室、からだ。

男子更衣室は店長用のロッカーが1つしかないらしく、必然的に其処で着替えるしかなかった。

だから朝は出来るだけ早く出勤し、外の見張りをリーゼに任せると言う形になってしまったのだ。

まあ、それも仕方ないと言える。十夜が着替えている内に他の人が

来たらかなり不味い状況になるからだ。

性別を偽ると言うのはホント、大変である。

「準備が出来ましたよ」

出て来た十夜の声に振り返ったリーゼは、十夜の今の姿を見て固まる。

上から下まで何度も見ると、感心したように呟いた。

「うわぁ……元が良いだけに、美少女にしか見えないわね」

「……そ、そうですか」

その返答に、十夜は微妙な顔をしながら頷くのだった。

喫茶Angel（5）（前書き）

暑くなったり寒くなったり、嫌ですねえ。皆さんは体調とかは大丈夫ですか？ 私は月曜日辺りから体調を崩しまして……今週はあまり更新出来そうにないです。

それと、今回は少し短めですかね。

喫茶Angel(5)

「それにしても本当に男？ 女性にしか見えないわね……」

ホールに移動しながらもリーゼは十夜を凝視し、コレが本当に男なのかと疑問を抱いている。

今の彼の姿はリーゼから見ても、溜息が出ると程に美人で、男とはとても想像出来ない。外見では絶対見破れないだろう。

動物、人間以外なら匂いなどで見破れるかもしれないが、彼等にバレなくてもどうでもいいだろう。

ハア……しかし、男に産まれてまさかスカートを履く日が来ようとは……。

膝がスースーするし、すげえ落ち着かないな。慣れるしかないんだろうけど、慣れるまでが厳しい。

胸奥で嘆息しながら頬を掻き、苦笑いする。世の中、ままならなものだ。

「そう言えば、ジュウヤさんの胸ポケットに入ってるソレって人形なのかしら？」

胸ポケットから顔だけ出している翠を見て、リーゼは不思議そう問い掛ける。

その言葉に翠の肩がビクウッと微かに揺れ、十夜の表情も固まる。

矢張り胸ポケットに入れていたのが不味かったのだろうか。

第三者的視線ではコレが生きている等とは思えないだろう。せめて精巧に作り上げられた人形程度だ。

空気を読んだは翠は人形の如く固まり、微動だにしない。心成しかその表情は引き攣ってはいるが……。

「え、ええ。これは人形ですよ」

咄嗟に嫌いな嘘をついてしまったが、この場合は仕方ないと言える。これが生きている、と分かれば色々と面倒臭い事になるからだ。

「へえ」見たことがない服を着ているけど、良く出来ているわねえ。ちよつと見してもらっていいかしら？」

小首を傾げ、そう聞いてくるリーゼに頷き、胸ポケットから翠を取り出して、差し出す。

此处で断るのも何所か怪しまれると思ったので、翠と一瞬だけ目配せすると、素直に渡した。

受け取ったリーゼは翠をマジマジと見詰め、「はあ」と感激そうに息を吐く。

「ホントに良く出来ているわね。今にでも動き出しそうだな」

実際動きます、何て言ったらどんな顔をするだろうな……。まあ、吃驚はするか。

付喪神とは言え、一応は神の一種だしなあ。

そんな事を考えていると、カランコロンと突然ベルが鳴り、複数の人間が入って来る。

十夜とリーゼが視線を向ければ、其処には5、6人の女性陣が一斉に入ってきていた。恐らくはバイトの人達だろう。

「あつ　リーゼさんおはようございます!」

「「「「「おはようございます!」「「「「「

1人が挨拶すれば、他のメンバーも声を合わせて挨拶した。

喫茶Angel(6)

「あつ、其方の片が今日から働く方ですか？」

「うつわ〜！ すつごく美人なの〜！」

その中の2人、蒼い髪の“同じ顔”をした少女が声を上げる。

2人の声に反応し、他のメンバーも一斉に十夜へと視線を向けた。
新しく加わる仲間がどんな人物か、矢張り気になる事だろう。

集団から一気に視線を受けた十夜は、一瞬だじろぎながらも、頭を下げて自己紹介をする。

「え、えっと、今日から働く事になりました、ジュウヤ・カザマです。宜しくお願いします」

丁寧に腰を曲げ、この店の先輩方に挨拶をする。何事も第一印象が大事な為、笑顔もしっかりと忘れずにした。

すると、刹那の間の後には、パチパチと拍手が返され、「凄い美女！」「や「脚が細っそっ！！？？」等、男の十夜には十分刃物に成り得る言葉が次々と彼女達の口から飛び出た。

……ふう、どうやら無事受け入れられた様だが……何か納得できねえ！！

女装しても違和感なく紛れ込める自分に納得出来ない！！ 誰か「コレ男じゃね？」って気付く奴居ないのか！？

俺の男としての尊厳が……碎け散る……。

バレなければそれでいいのだが、違和感も感じられずに現在進行形で会話が繰り広げられる今に納得が出来ない十夜。

飽く迄も自分の容姿が“普通”だと思っている彼には、周りがおかしく思えた。この輪の中に1人、異物が混じっていると云うのに。

まあ、複雑な男心（？）と言う奴である。

「あつ、ほら皆も自己紹介しなきゃ。じゃないとジユウヤさんに名前を覚えてもらえないわよ？」

リーゼの発言に、盛り上がっていた会話が鎮静化した。

「じゃあ最初はわたし達からです。まずわたしは二ナ・クリフノースです」

「それで、わたしが二ノ・クリフノースなの！！ もう解っていると思うけど、わたし達は双子なの！！」

二ナと二ノは2人共髪型をツインテールにし、背丈も殆ど一緒の小柄だった。

唯一彼女達を見分ける方法は、リボンの色と、眼の色である。リボンは二ナが赤で、二ノが青。

眼は二ノが赤で、二ナが青なのだ。リボンと眼はそれぞれ逆の色なのである。

2人の紹介も終え、次の女性へとバトンが回る。聴て、全ての人の自己紹介は終了した。

「所でリーゼさん。その手に持っている物は何です？」

二ナが、リーゼの手の中に納まっている翠を見て、小首を傾げる。その声に気付いた二ノも、「なにになに〜!？」と騒ぎ出した。

「これはジュウヤさんから借りてる人形だわ。凄く丁寧に作られた作品だから、間近で見せてもらっていたのよ」

リーゼの声に、女性陣は「見たい見たい!〜」と一斉に集まり、掌の翠に詰め寄った。

「ジュウヤさん、彼女達にも見せていいかしら？」

「え、ええ。いいですよ」

その声に頷いたリーゼは最初に二ナに渡し、其処から次々と彼女達の手によって翠は回されて行く……。

隙間から見えた翠の表情は、無表情だが過労が窺えた。

「（うわぁ〜……こりゃ翠も大変だな……）」

心中で同情しながら、翠が戻って来るのを待つ十夜であった。

喫茶Angel(7)

十夜の掌に乗っている翠はグテ〜と潰れ、精根尽き果てたご様子だった。

と言うのも、あれから女性陣に何度も盪回しにされ、二ノに至っては笑いながら振り回されたのだ。

小さい翠にとつてはそれだけでも恐怖の絶叫マシンだった。しかも、安全装置が無いかなり危険な代物。

ああ〜……叫ばなかった自分を褒めてあげたいわ。無邪気な子供(？)って怖いわね……。

けど、漸く十夜の元へと帰って来れたわ……。やっと安全地帯に帰還出来た……。

愛しそうに十夜の掌を小さな手で撫でながら、大の字になる。疲弊仕切ったその様子に、十夜は苦笑いを浮かべた。

「お疲れ様」

労いの言葉を掛けながら翠の頭を撫でる。十夜の大きな手が優しく頭部を刺激し、心地良い快楽を生む。

それが気持ちいいのか、時折「はあ〜」と気の抜けた声が口から漏れた。

流石十夜ね、ダメージを受け過ぎてヒットポイントが0に近い私を

こつも簡単に回復させるなんて。

……でも、何だか、眠くなってきたわ。少しだけ、眠ろう……かし……ら……。

臆て意識が朦朧としていき、翠の意識は其処で途切れるのであった。

「寝ちゃったか」

起こさない様に慎重に胸ポケットへと戻し、「ふう」と溜息を吐く。

何だか翠に申し訳ない事をしてしまったが、あの場はああ切り抜ける他なかった。最初から選択肢はなかったよなあ。

とは言っても、罪悪感ってモノが生まれるな。まさかあそこまで人気になるとは……。

彼女達、特に二ノは翠をえらく気に入った様子で、中々彼女を放そうとはしなかった。

その過程で、振り回されたり引つ張られたりと、色々な事があったのだ。そりゃ翠じゃなくても疲れる。

帰りにご褒美としてチョコレートケーキでも買って帰ろうかと思いつつ、視線をリーゼに向けた。

「はいはい、話しはもうお終い。そろそろ着替えに行ってきたさい」

「『『『『『はい！！』』』』』」

その一声に女性陣は一斉に頷くと、ホールから離れ、更衣室に向かって行く。勿論、会話はしたままでだ。

何というか、非常に元気があるバイトの先輩達である。元気過ぎて、こっちが疲れる程に……。

「さて、ではジュウヤさん。これから貴方には此処での仕事を覚えてもらうわよ？」

「はい、宜しく願います！」

リーゼのその声で意識を切り替えた十夜は、真面目な顔で頷き、リーゼの指導を受けた。

喫茶Angel（8）

「……ジュウヤさんって何処かの飲食店で働いた経験があるのかしら……？」

マニュアル通り、いやそれ以上に無駄なく完璧な動作で動く十夜に、リーゼは思わずそう問い掛ける。

レジ打ちや掃除の仕方、接客でのマナーなど、どれを取っても「完璧」の二言だった。鮮麗された動きはプロのソレである。

「前に同じ喫茶店で働いた事があるんです。その時は主に厨房に居ましたけどね」

3、4年ぐらいはあそこで働いて居たからなあ、やる事なら大体分かる。飲食店でやり方何てどれもそう変わらないだろうし。

まあ、一応リーゼさんの説明をちゃんと聞いてたけど、殆ど大差なかったし、これなら十分腕を振るえそうだ。

「厨房って……料理も出来たのね。ジュウヤさんって本当、ハイスペックだわ……」

料理、家事全般、容姿もよく、性格も良し。十夜の彼女になれた人物は将来の幸せがほぼ確定している。そして、現在彼女なしの彼は超優良物件だ。

「大抵の物なら何でも作れますよ」

「そう、ならホールに余裕がある時は厨房もお願いするわね。それじゃあ、最後はこれを覚えてもらえる？」

そう言っ取り出したのは、この店で出される料理のメニュー表。これを全て暗記する必要があるのだ。

まさか店員がメニュー表をチラチラと確認しながら接客する訳にもいかないし、飲食店では誰もが通る道である。

「どれどれ」

其処にはスパゲティやハンバーグ、ラーメン等の主食から、ケーキ、ホットケーキ、パフェなどのデザート、喫茶店ならではの料理が絵と一緒に記載されている。

ふむ……俺が働いて居た喫茶店よりはメニューが少ないな。これなら直に覚えられそうだ。

昔に働いてた所は矢鱈とメニューの量が多かったからなあ……。覚えるまでに苦労させられた。

ページを捲りながら、記されたメニュー名を頭の中に叩き込んでいった。

「よし、覚えました」

「……えっ？」

ボタンとメニューを閉じ、そう言い放つ十夜にリーゼはポカーンとした表情になり、口が半開きになる。

まだ5分程しか見ていないのに、そう言い切るジュウヤにリーゼは「冗談でしょ？」っていう顔をした。

しかし、十夜の顔は至極真面目で、嘘の色は全く感じられない。

「え、まさか今のでホントに全部覚えたの……？」

「はい」

頷く十夜にリーゼは絶句し、思わず十夜を凝視する。お前は一体何処までハイスペックなのかと……。

「……じゃあ最初のメニューから最後まで言ってみてくれるかしら？」

「はい。まずはハンバーグ、チーズハンバーグ定食。それからラーメンにミートスパケディ、カルボナーラ——」

「——ホットケーキサンドアイス、チョコレートパフェ、イチゴパフェ。それから……」

次々と口からメニューに記された料理名が飛び出し、全てを言い終える頃にはリーゼの表情が引き攣っていた。

喫茶Angel(9)

「6番テーブルにハンバーグ定食2つ。ストロベリークレープとカスタードクレープにコーラとオレンジジュース！」

「はい！！ 分かりました！！」

メモったメモ帳を確認しながら厨房のカウンターで十夜は読み上げ、厨房担当の人達は太急ぎで言われた料理を作っていく。

料理を作る側も大変だが、注文ミスをしなくて料理名を読み上げるウェイトレスも結構大変である。

特に人が混雑し、忙しい時などは1つのミスでさえもかなりのタイムロスになるのだ。なので何度も確認し、何を作るのかを正確に厨房に伝える必要がある。

……ふう、まだ開店したばかりなのに、人の出入りが激しいな。この店で働いて居るのが女性だけってのも少なからず関係しているのか。

それに心成しか、店内には男性客が多いしなあ。目の保養に来る輩も、この中に多く混じって居るのか。つか、俺もそんな目で見られているかと思うと、鳥肌が……。

だがまあ、繁盛しているのも事実だ。店長はまさかコレを狙って……？ あ、いや、絶対違うな。出会ってまだ1日なのに何故か断言出来るぞ……。

あの人は自分の本能に忠実っぱいしなあ。前にリーゼさんが言っていた通り、働く可愛い女性を見るのが好きなだけか……変態め。

十夜は来店してきた客達に素早く対応し、空いている席へと案内する。そんな彼（今は彼女）には他方からかなりの視線が集中していた。

この世界では少し珍しい黒髪に、吸込まれそうな綺麗な瞳。ヘテロク虹彩異色症ロミアというのも、人の視線を引き付ける1つの要素だろう。

喫茶Angelでの仕事着を見事に着こなした十夜は、無駄のない動きで人の波を縫い、人の視界を横切るような無様さもなかった。

ゆったりとした余裕のある動きなのだが、何故だかその移動速度は意外に速く、背筋もピンと伸びてるので見ていて気持ちがいい。

つまりは、完璧に仕事を熟す綺麗な女性（十夜）に男性陣（一部の女性も）は見惚れていた。本人にとっては全く嬉しくもない事だが……。

「ハア……やっぱ間が結構空いていたら、少し感が鈍っているな。これだけで過労を感じるとは……」

そう十夜は言うが、実際此処の先輩達よりも多くの人を1人で捌いていた。しかし、それでも本人は不満の御様子だ。

だが、これ以上速く正確に客を捌いていたら先輩達の立つ瀬がない。今のままでも十分上出来なのだが……。

「まあその内、感も戻るか。何よりやってて楽しいしなあ」

仕事は楽しみながらやる。これは長く続けていく上で一番大事な事だよな。

いやいややってたんじゃ長く続かないし、何より詰まらない。まあ、仕事に自分が合うかもにもよるが。

「しかし、少しギアを上げ過ぎたか……」

現在は休憩中の為、十夜は休憩室に1人椅子に座っている。背凭れに身体を預け、動き回っていた足を伸ばす。

朝食を取っていなかったのも多少なりとも関係しているだろう。腹が空いていれば本来の力を発揮出来ない。

「御握りを作ってもらって良かった。これを食べよう」

懷から「空間」と書かれた札を取り出し、“札の中に手をつ込む”。其処から、フィーナが作ってくれた御握りを取り出した。

そしてラップを外すと、「はむっ」と食らい付く。

「モグモグ……美味しいな」

絶妙な塩加減な米と、蛋白質、食物繊維、ビタミンなどが豊富に含まれている海苔と一緒に口に含む。

静かな休憩室の中、モグモグと物を食べる音だけが響いた。

喫茶Angel（10）

仕事を開始して2時間後、人の流れも大分落ち着き、少しは余裕が出来てきた。

十夜は新しく来店してきた客に御冷やを出し、「ごゆっくり御寛ぎ下さい」と言いながら礼をして、立ち去る。

相も変わらず居るだけでも視線が集まるが、なるべく気にしないようにしながら銀の丸盆を小脇に抱えた。

……それにしても、矢張り過労が半端じゃないな。肉体的には全然余裕だが、精神的にかなりキツイぞコレ……。

身体に絡み付く様な嫌な視線に、デレた男の顔……。さりげなく自分の携帯番号を渡してくる猛者に、しつこいナンパ野郎。

序でにスカートの中をカメラで盗撮しようとしてきた犯罪者まで居た。勿論、その場で直に取り押さえたが。

数えたら切りがないけど、よくまあ短時間にコレだけの出来事がある……。仕事で早く家に帰りたいと思わされたのは今日が初めてだよ……。

慣れれば幾らか楽になるだろうが、男としての自尊心が「慣れたくない」と言っている。
プライド

まあ、結局は最終的に慣れてしまうのだし……。もう諦めるしかない。幾ら考えても時間の無駄だ。いい加減割り切れ俺の脳味噌！！

厨房のカウンターで小さく息を吐き、気分を切り替えるように深呼吸する。そんな十夜の元に近付く影が1つあった。

「ジュウヤさんお疲れ様です。厨房も余裕が出来てきたので、二ナがホールに入りますです」

一人称は「二ナ」で、語尾に必ず「です」を付ける二ナが疲れ気味の十夜の肩をポンツと叩く。

思わぬ援軍に一瞬目を丸くするが、二ナの背後から心配そうに此方の様子を窺っているリーゼの姿に十夜は直に理解した。

傍目から見ても疲れている十夜を心配して、彼女が二ナを此方に超越したのだろう。人の気遣いが出る、優しい人だ。

カランコロン♪

ベルがコロコロ鳴り、店内にいる従業員に来客を知らせた。十夜が先に行くよりも早く二ナが接客に向かう。

「ん……？」

十夜が来店して来た客を見た時、胸奥を嫌なモノがチリチリと積もり出した。

それは漠然とした、不明瞭な何か。感、と言ってもいい。まあ、俗

に言う「嫌な予感」と言う奴なのだが。

しかし、前にも言った通り、彼の嫌な予感と言うのは意外と良く当たる。それはもう動物が本能で危険を察知するが如くだ。

十夜は仕事を適度に熟しながら、来店してきた“彼等”から視線を少しも離さなかった。それでも見られていると悟られず、静かに相手の様子を窺う。

店に入って来たのは男の3人組。何処かの学園の制服を着崩し、不良と呼ばれる存在になっている。

そんな彼等から十夜が感じたモノは――

――明確な悪意、だった……。

喫茶Angel(11)

二ナが丸盆に御冷や載せ、優雅な動作でそれを運んで行く。十夜はその様子を近くで一瞥し、眼を光らせる。

そして、二ナが御冷やをテーブルに置く為にその3人組の近くに差し掛かった時、それは起きた。

「きゃあっ!？」

二ナが躓いた。否、躓かされた。テーブルの下から伸びた1人の足が二ナの足に引っ掛けられ、彼女の態勢は絶望的に崩れる。

御冷やが載っていた丸盆は宙を舞い、落ちたグラスは水と一緒に碎け散る。そして、飛び散った水は通路側に座っていた3人組の1人に掛かった。

その派手な音に客や他の従業員から視線が集まり、一瞬だけ店内を静寂が包んだ。

「冷って!! おい、テメエ、何しやがる!？」

「こっちにも水が掛かったじゃねえか!!」

「どうしてくれる!？」

「も、申し訳ござ——イタッ……!」

慌てて立ち上がろうとした二ナは急に足を押えて呻き、顔を顰める。

そんな彼女の事など御構いなしに、3人は言いたい放題だった。

ハア……何処の世界にもどうしようもないクズは居るものだな。自分から足を引つ掛けといて、それを他人の所為にするとは……下種の極みだ。

それに足を押えて蹲ってる二ナを放って置いて自分達の事ばかり。心配の一声も掛けようとはしない、か。人間として失格だな。

事の成り行きを終始見ていた十夜は其の場で自らの気配を断ち、存在を消す。そして、ゆっくりと彼等に迫った。静かに、静かに……足音は愚か、気配すら感じられない程静かに。

無色。今の十夜まさにソレだ。何色にも染められず、空気と同化する様に溶け込んでいる。

「おい、いい加減何かを言いやがれ!!」

遂に我慢が出来なくなった通路側の1人、不良Aは二ナへと手を伸ばす。だが、その手は別の方向から伸びた手によって阻まれた。

何時の間にか不良Aの近くに移動していた十夜は二ナへと伸びる腕を掴み取っていた。

「な、何だお前!？」

いきなり音もなく現れた十夜の姿に不良Aは驚き、眼を見開く。そ

の一方で、十夜の掴んだその腕にはギリギリと力が込められていく。軀て骨が軋み、不良Aの顔に苦痛の色が映る。だが、十夜としてはそれでも、まだまだそんなに力を入れたつもりはない。

「イタタタツ!! 早く離せ、俺は客だぞ!? こんな事していいと思っっているのか!!」

「そうだそうだ!!」

「早くその手を離せ!!」

口々に騒ぎ出す彼等に、遂に十夜が口を開く――

「――黙れ」

その声は、低くくぐもっていた。普段の彼からは想像もできないほど、殺気が入り混じった声。

その声に、場の雰囲気は一気に支配されるのであった。

喫茶A n g e l (1 2) (前書き)

ちょっと短いです。

喫茶Angel(12)

暖かさが全く感じられない声音。何時もの様な穏やかな、そして安心出来る声ではなく、その声は研ぎ澄まされた刃物のように冷たい。紅と紫の双眸に宿る光は薄く濁っており、普段の様な優しい瞳ではなく、まるで害虫でも見る目。その細められた眼は男達を射抜いて居た。

心臓を鷲掴みにされている様な、喉元にナイフでも突き付けられている様な、形容し難い恐怖が彼等を襲う。

無意識に小さく「ひっ」と悲鳴を漏らし、身体を後退る。動物的本能が今の十夜を危険と認識した。

だが、十夜は彼等に背を向けると、しゃがみ込む。今は先に優先すべき事があるからだ。

「大丈夫？」

先程とまるで別人の声。心配の念が込められたその言葉に二ナは苦笑い気味に笑うと、小さく頷いた。

「は、い……何とか大丈夫、です。でも、動かすと痛いです」

取り敢えず、二ナが押えている右足に触れ、骨の具合や筋肉の状態などを見ていく。本人の様子からも、そんなに大した事はないだろう。

實際骨が折れたり、何らかの異常があれば泣くほどの激痛が走るのだ。今見たところによると、精々打撲程度だ。

ふむ、特に異常はなさそうだな……良かった。こんな連中に一生使っていく足を駄目にされたら、それこそ最悪だ。

湿布でも貼って、数日安静にしていれば直に治るな。まだまだ若いし、大した事はない。

二ナの足を見ている間、十夜は不良達に背を向けている為、全くの無防備だ。しかし、彼等は動かない。否、“動けない”。

十夜の背中が語っているのだ。『一步でも動けば、殺す』、と……。その背中はその言っていた。

「それじゃ、ちょっと我慢してね」

二ナの背中と膝裏に腕を回し、身体を抱き寄せる。十夜の急な行動に短く「きゃっ」と可愛い悲鳴を上げると、十夜の身体に縋り付く。

まあ、所謂お姫様抱っこと言う奴なのだが、十夜が二ナを抱き上げた瞬間、何故か店内の女性陣から黄色い悲鳴が上がった。

一部男の野太い悲鳴も聞こえたが、ぶつちゃけキモかった。男の黄色い悲鳴とかは聞きたくもない……。

二ナの表情をチラッと窺えば、林檎の様に赤くなっている。自分の

今の状態を確認して、羞恥で赤くなったのだろう。

取り敢えず安静に出来る場所に移動する事を考え、十夜は揺らさないようにゆっくりと移動していく。

客や従業員の視線は終始、十夜達が奥へ消えるまで2人占め(?)していた。

喫茶Angel(13)

休憩室に入った十夜は二ナをパイプ椅子の上に座らせ、もう1つの椅子に右足を乗せさせる。

もう一度足の状態を確認し、痛くないか尋ねた。

「今は大分痛みがなくなってきました。あと、その……ご迷惑をお掛けしてすみませんです……」

シュンとし、頭を垂れて申し訳なさそうにする二ナの頭をポンポンと撫でる十夜。丁度いい高さの所に頭があると、つい撫でてしまう。

翠の時と一緒に、元気がない時などは手が勝手に動いてしまう。まあ、一種の癖のようなモノだが。

「迷惑だなんて思ってないさ。それに、元々あの人達が一方的に悪いのだし、二ナちゃんは悪くないよ」

サラサラな蒼い髪を優しく撫ぜ、落ち込んでいる二ナを励ます。不安そうに瞳を揺らす彼女に、十夜は笑い掛けた。

「……ジュウヤさんは凄く優しいです。それに、二ナが困っている時も直に助けに来てくれましたです」

ん……あの状況なら誰でも助けに行くと思うんだけど、どうなんだろう。

女性じゃやっぱり怖くて近寄れないかな？ 手が早そうな連中だった

たし。

まあ、こー言う困った時の為に俺が居るのだし、特に気にしなくていいと思うけどなあ。

流石に初日から出番が来るとは思わなかったが……。

「お、私は……まあ、当たり前の事をしただけだよ」

危うく「俺」と言いそうになり、慌てて言い直す十夜。先程からずっと二ナの頭を撫でているが、ふわふわな二ナの髪の毛は綿の様に触り心地が良く、手が離せなかった。

「それでも、ありがとうございますです」

照れたように笑い、礼を述べる二ナに「どういたしまして」と返す。そして一瞬の間が生まれると、2人は「ふふっ」と笑みを零すのだった。

……さてと、会話もそろそろ終わりにして、早く湿布を張っちゃおう。問題は、果たしてこの部屋に湿布が在るかどうかだが……。

この部屋に湿布は置いてあるのか？ 無かったら無かったで買いに行くしかないな……。

でも、救急箱が在ればその中に入っていると思うんだけど、何処にあるんだろっ。俺じゃ分からない。

まだ仕事を始めて初日の十夜には何処に何があるのかが分かる筈もなく、首を巡らして室内を見回す。

そうして暫く首を巡らしている時、不意に背後の扉がガチャツと開いた。十夜が振り返れば、其処には救急箱を抱えたリーゼが立って居た。

「御探し物はコレ？」

そう言つて救急箱を持ち上げ、笑みを零すリーゼに十夜は笑みを返しながら頷く。

「ニナさんの手当ては私がやっておくから、ジュウヤさんはもうホールに戻りなさい」

「え、いいんですか？」

「ええ。いい加減固まつた三人をどうにかしてほしいの。あ、くれぐれも、程々にね？」

ペロツと悪戯つ子の様に舌を出し、ウィンクを見せるリーゼに十夜は苦笑いを浮かべながら了承した。

喫茶Angel（14）

十夜がホールに戻るとズシリと其の場の空気が重くなり、会話が溢れていた空間が一瞬でシンと静まる。

二ナに向けていた先程の笑みは既になく、今の彼は無表情だ。何も感情が感じられないその顔は、正直かなり怖い。

不良の3人組は十夜の姿を確認すると青くなり、心成しかガタガタと身体を震わせている。見る限り、あれから全く動いて居ない様だ。

十夜は彼等の前にスツと立つと、双眸を細めながら腕を組む。美人が怒ると怖いと言うが、実際キツと鷹のように鋭くなった十夜の眼は子供が見たら泣けるレベル。

そして更に、3人が戦慄したのは彼が発している怒気。これだけ重苦しい気を発しているのに、彼等の近くに居る客達は特に何も感じられないが如く、平然として居る。

十夜は一方向にだけ怒気を放ち、他方に広がらないように遮断しているのだ。だが、それより何よりも灼熱と極寒の二面性を感じられる「気」は恐るべきものだった。

「此処は皆様が楽しく美味しく食事をする場所であり、例え如何なる理由があろうと、それを破ってはいけない場所です。そんな事すらチツポケな脳味噌では理解出来ませんか？」

「ああ、それと……貴方方は二ナさんの足をワザと引っ掛け、濡れたとかほざいてやがりましたが、その程度なら自然と乾きます。最

近の若者は心が狭いですねえ？」

飽く迄も話し方は丁寧だったが、所々に毒が交ざっており、ニヤリと寒気がする微笑を彼等に向ける。

3人は既に顔が真つ青で、唇も青い。まるで死人のような顔だった。十夜の放つ気に吞まれ、ライフポイントは0所かマイナスをいつている。

周りの客からは同情の視線を向けられるが、彼等は言わば自業自得。誰も止めに入る者は……と言つか、止められる者は居ない。

「……もし二度もこのような事があつた場合は……こうですよ？」

右手の親指を立て、それで首を搔つ切るジェスチャーをする。それだけでも、何が起こるかは簡単に想像出来るだろう。

……ふう、取り敢えずコレだけ言えいいかな。今回は話し合い（という脅迫）だけで解決出来たからいいけど、次はどうなるものか。面倒事はないに限るけど、世の中そうはいかない。まあ、俺が居るから騒ぎは起こせない、的な噂が流れれば俺の出番もその内なくなるかなあ。

「それでは、お解り頂けたようなので、今日はもうお帰り下さい」

手で出口を差し、ガクガクと錆び付いたロボットの様に出入口に向かう不良達。彼等は最後まで一言も発さなかったが、話せる余裕は全然なかったみたいだ。

「お疲れ様でした！（です・なの）」「」

他の人達より先に上がり、十夜は「よいしょ」と二ナを背負う。その隣で、二ノは心配そうな顔で二ナを見ていた。

「二ナ、足は大丈夫なの？……」

「今はもう大丈夫です。私達だけでも帰れるのに、ジュウヤさんもリーゼさんも凄く心配性です」

現在、足を怪我した二ナを家へと送る為に、十夜は彼女を背負って道を歩いて居た。と言うのも、2人だけで返すのは十夜もリーゼも心配だったのだ。

二ナは少し拗ねたかのように言うが、何となくソレは照れ隠しの様に見える。そんな二ナの様子に二ノは笑顔を浮かべながら「素直じゃないなお」言う。

その言葉に、プイツと顔を背けた二ナの頬は紅葉色に染まっていた。

とある少女と狐の1日(1)

「じゃあ私達も行こっか？」

「うむ！」

十夜達を見送ったフィーナと珠季は、学園に行く支度をし、寮を出る。フィーナとしては通い慣れた通学路を、珠季としては見た事がない物が色々と在る道筋。

十夜と従者の契約をしている珠季にも、この世界の知識は共有出来ていた。その御蔭か、あまり物には目移りしない。

まあ……本人はそんなことよりも、もっと別の事を考えていたのだが……。

むふふ、しっかりとフィーナ殿の事を護り、帰って来たら十夜殿に褒めてもらうのじゃ。その為になら、妾はどんな卑怯な手でも使う。

今日の妾は一味も二味も違うぞ！！ 十夜殿の褒美の為なら幾らでも頑張れる！！ 燃えるのじゃ！！

フィーナのボディガードを任された珠季のやる気は何時も以上に昇しており、その顔はニヤついていた。

完全に下心が丸出しの笑みを浮かべ、フィーナの一步後ろを付いて行く。

「あつ、そういえば気になった事があるんだけど、いいかな？」

不意にフィーナが振り返り、珠季はニヤついた笑みを直に消す。護衛対象にだらしなない所は見せられない。

「聞きたい事とは、なにかの？」

「あ、うん。ちょっと気になったんだけど、もしかして他の人からタマキちゃんって見えていないの？」

そのフィーナの返答に、珠季は「ほう」と呟きながら目を細める。珠季としては、こんなにも早くズバリと言い当てられるとは思ってなかった。

……この娘、普段はポケポケしてる癖に、良く人を見ておる。人は、動く対象がある時は目が自然とソレに向いてしまうからのう。

その僅かに動いた目線の先に、妾が捉えられていない事に気が付いたか……いやはや、凄まじい観察力じゃ。流石は十夜殿の主、と言った所か。

「そうじゃ、妾は九尾じゃからの。妾の妖力で人の目を欺く事なんて朝飯前じゃ！」

えへんと胸を張り、獣耳をピコピコと動かす珠季。フィーナは「じい」と頭に付いた獣耳を見ると、「えいつ！」と言いながら驚掴みにした。

「うひゃあっ!!」

フィーナが突然珠季の両耳をガシツと掴み、モミモミと触ってきた。その行動に珠季は少し色っぽい声を出す。

「フィーナ……殿、あう、一体……ひゃ！何を……」

顔をカァーッと赤らめ、何かに耐えるかのように震える珠季。フィーナは「うわゝ！凄いフサフサだあゝ！」っと言いながら、感触を楽しんでいる。

そんな光景が3分程続くと、漸く珠季の耳は解放された。

「ああ、突然ごめんね。尻尾もいいけど、獣耳も触って見たかったの。すっごい柔らかいね!」

グツと親指を立て、満面の笑みを珠季へと向けるフィーナ。笑顔が凄く輝いていた。

「ハアハア……それなら、次からは聞いてから触って……ゼエ……くれぬかのう？耳は尻尾と違って……ふう……敏感なのじゃ」

顔を真っ赤にし、息も絶え絶えの珠季が上目使いにフィーナを見上げた瞬間、その姿にフィーナは“萌えた”。

「ああもっ！タマキちゃんってホント可愛い〜!!」

そう言って珠季に飛び付くフィーナ。可愛い者には目が無い彼女。

「ちょー！！　ファイナ殿落ち着くのじゃー！！　目がなんか性犯罪者のソレ……ぬぎゃああああああああ！！！！！」

何処かの住宅街で、珠季の悲鳴が響き渡った。

とある少女と狐の1日(2)

「ハアハア……穢された……フィーナ殿に穢されたのじゃあ……」

着崩れた和服を直しながらフィーナから距離を取り、安全地帯に移動する珠季。

呼吸は少し乱れ、頬も紅葉色に紅潮していた。自分の身を両手で抱き締めながら、ジト目でフィーナの事を見る。

「穢された」と言う珠季の発言に対し、フィーナは首をブンブン振りながら慌てて否定する。

「人聞きが悪い言い方だけど、唯ギユツと抱き締めただけだよ!? 何にも如何わしい事なんてしてないよ!」

「……その割にしては、身体を触る時の手付きが厭らしかったのじゃ。フィーナ殿はもしかしてソツチの方……?」

「ソツチ」とは、俗に言う「百合」という奴である。フィーナは唯純粹に可愛かった珠季を抱き締めただけなのだが、珠季からはソツチ系の人だと思われてしまった様だ。

もう……私が百合とか、絶対ないよ。ま、まあ、女の子ではそういうのが好きな子は沢山居るけどね……。

で、でも、女の子同士のも、同性の私からしたら、「ありえない」の一言だね。一般の男の人が薔薇(BL)を嫌悪する様に、一般の女の子も百合(GL)を嫌悪するんだよ。

飽く迄も「一般」だけど……私にはその手の話には興味ないし、やっぱり男の人とがいいなあ。特に、ジユウヤさんとか……って、私は何言ってるんだ!?

例えね、例え例え……。でも、実際彼と一緒になれた人は幸せになれそうだよなぁ。人当たりもいいし、家事も出来るし、カッコイイ……と言うよりは、美しい……?

うん、美しい……。だね。本人に言ったら怒られそうだけど、この言葉が適切に思えるよ……。女性よりも美しいって、本人はかなり複雑そうだけど。

まあ、今はそんな事よりも、早くタマキちゃんの誤解を解いちゃおう!! 私には決して百合ではない!!

ただちょっと、可愛いモノに目が無い普通の女の子だよ。

僅かの思考をすると、直に珠季の誤解を解こうとするフィーナ。最初は中々納得してくれなかったが、最終的には何とか誤解を解く事に成功した。

「因みにフィーナ殿」

「うん、何?」

「妾は今、妖術で第三者からは見れぬ事になっておる。だから、他

からは認知されないのじゃ」

今の珠季は透明人間になっていると考えていい。声も、気配も、全てが“フィーナ以外”に遮断されているのだ。

つまり、

「他から見れば、フィーナ殿が1人でぶつぶつと言ってるように見えるのう」

その言葉にハツとしたフィーナは直に周りを見渡すと、複数の人間から奇異の眼差しを向けられている事に気が付いた。

他人からは珠季が見えない、故に1人でブツブツと呟き続ける危ない女子高生に他から映る訳だ。

1人で誰かと話している様に見える女子高生、周りからした実に痛過ぎる。電波でも受信しているんじゃないかと思えるぐらいに……。

それを理解したフィーナは、顔が羞恥で真っ赤に染まり、「嫌ああああああああ！！！！」と叫びながら通学路を全力疾走し出す。

その行動にまたもや奇異の視線が集まるが、本人はそれ所じゃない。

珠季は一瞬ポカンとした後、「ま、待つんじゃないフィーナ殿お！！置いてかれたら道に迷うのじゃああああああ！！！！」と言い、慌てて追い掛けるのだった。

とある少女と狐の1日(3)

「ゼエ……ゼエ……つ、疲れた……」

「……同感なのじゃ」

大きく胸を上下させながらフィーナは自分の机の上に突っ伏し、珠季は両膝に両手を付く。

彼女達が教室にやって来てもクラスメート達はフィーナを一瞥するだけで、「おはよう」の一言も言わない。完全に無視だ。

珠季は元から見えていないからいいが、何故自分が此処まで嫌われているのかまるで解らない。理由を聞いても睨まれるか、鬱陶しそうに見られるのだから、解決のしようがない。

それもこのクラスだけではなく、学園全体の生徒達の反応が全て同じなのだから、フィーナは堪ったものではないだろう。

まるで大規模な集団虐めでも合っている様だ。唯一の救いなのがティファだけが変わらず接してくれている事だけ。

でも……今は無理に友人を作ろうとは思わないかなあ。今の私には、ジユウやヤスイちゃん、タマキちゃんも居るし、昔みたいに寂しくない。

本音をちよつとだけ言えば、やっぱりもっと友達を作りたいけど……どうしようもないのかなあ……。

「ふう」と溜息を吐いていると、不意に、何かがピヨンと膝の上に飛び乗り、温かい感触がスカートの上から伝わった。

驚いて視線を下に向ければ、其処には銀色の毛並をした狐が行儀良く座って居り、眠げに目を擦っていた。九尾の尻尾はお腹に押し付けられ、かなりモフモフとしている。

「……タマキちゃん……？」

「なんじゃ……妾は少し眠くてのお……寝かせてくれぬか……？」

小さな声で名前を呼ぶと、そう返事が返ってくる。フィーナは一瞬だけ瞠目すると、嫣然と笑みながら頷き、珠季の頭を手で撫でる。

今のフィーナは先程までの翳りがあつた表情ではなく、純粹に微笑んでいた。もしかしたら珠季は、フィーナの微妙な心情の変化に目敏く気付いたのかもしれない。

フィーナは暫く、珠季の柔らかな毛並の感触を味わっていた。

「あら、おはようフィーナ。今日は何時よりも早いのね」

「あ、うん。おはようティファ」

珠季の頭を撫でる手を止め、フィーナは顔を上げてティファを見る。相変わらず目付きが少し鋭いが、それよりも彼女が何時も掛けてい

ない筈の眼鏡を何故か今日は掛けているのが気になった。

ティファは寮に居る時ぐらいにしか眼鏡はあまり掛けないのだ。

「ん？ ああ。この眼鏡が気になるかしら？ 普段はコンタクトなんだけど、片方を何処かで無くしたみたいでねえ。だから今日は眼鏡にしたのよ」

フィーナの視線が眼鏡に注がれている事に気が付くと、聞いてもないのに詳しく教えてくれた。

「所で、フィーナの使い魔の……ジュウヤさんだったかしら？ あの子は一緒じゃないの？」

フィーナの近くに居ない十夜の事が気になったティファはフィーナにそう問い掛けると、フィーナは言い辛そうに言葉を濁す。

「えーと……そのお……ジュウヤはあ……」

「ジュウヤさんは？」

「……バイトに行ってるの」

「……はい？」

その予想外な返答に、ティファは思わず間の抜けた声を出すのだった。

とある少女と狐の1日(4)

「……随分と律儀なのね」

フィーナから十夜がバイトを始める経由を聞かされ、飽きた様に嘆息を零すティファ。

そもそも人間が使い魔、と言う前提から普通の使い魔とは何もかもが違うが、ティファには十夜の気持ちが解らなくもなかった。

出会って間もない人間の家に図々しく居座るのは十夜の良心は良しとはしない。其処は彼女も共感出来る。

けれど、実行に移すのが早過ぎるわね……。この学園はフィーナにとっては敵しか居ない、せめて一緒に来てくれれば此方も助かるのだけれど。

でも、もう呼び捨てに出来るぐらいの関係を築いているみたいだし、多分問題ないかしら？ 私にはフィーナの精神面を支える事は出来ないからね……。

新しい「友達」はそれ程フィーナにとっては意味のある事、それは彼女の心の支えになる。……本当はもっと友達を作って、輪の中で笑っている筈なのに……どうしてこうなったのかしら……。

この学園に入る前のフィーナは、友人が何人出来るか楽しみにしていた。人とのコミュニケーションを取る事が何よりフィーナは大好きなのである。

しかし、その願いは叶わず、1年の時が流れた。今こそは十夜達が傍に居るが、ティファは認識魔法でフィーナを陥れた者に怒りを覚えずにはいられない。

例え其処にいかなる理由があろうと、フィーナを悲しませた事実が変わりはしない。もし認識魔法を使った者がティファの目の前にノコノコ現れたら、彼女は一瞬で八つ裂きにしてしまう自信があった。

「それで、そのジユウヤさんは何処で働いて居るのかしら？」

「あつ、そーいえば、働き先を聞いてなかったね……」

今思い出しとばかりに両手をポンと叩き、頬を掻くフィーナにティファは呆れながら言葉を零す。

「自分の使い魔の事ぐらいしっかりと認識しておきなさい」と。

「……眠い」

授業が滞りなく始まり、この授業を終えれば漸く昼休み。「ふあゝ」と口を押えながら欠伸をし、眼から溢れた涙を指先で拭う。

窓の外から室内をポカポカ照らす春の陽気は、どんな強靱な精神力を持つ者でも睡眠欲を掻き立てる恐るべきものだった。

それプラス教師の永続睡眠魔法（教科書を読む声）。二重に奏でられたハーモニーは油断していると意識を奈落の底へと引き摺り込ま

れる。

珠季は相も変わらずフィーナの膝の上で眠っており、あれから全く起きる様子がない。よく寝る小動物だ。

気持ちよさそうに寝る珠季をフィーナは羨ましながら、注意点をノートに書き写していく。

偶にパシパシとお腹を叩いてくる尻尾は、正直少し鬱陶しかった。

とある少女と狐の1日(5)

「ふあゝ……まだ寝たりないのじゃ」

4時間以上の睡眠を貪ってなお、珠季はそう呟き、その隣を呆れ顔のフィーナが歩く。良く寝る小動物だ……。

はあゝ……あれだけ熟睡しといて、まだ寝たりないの？ 私だったら4時間も寝れば十分だけどなあ。

まあ、今日はポカポカ陽気で、凄く気持ちいい日だし、何時もよりも長く寝ちやうのかな？

私もこんな日だったら授業なんかほっぽいて寝たいもん。……実際そんな事はしないけどね。

食堂へと向かっていく団体さんを見送りながら、隣の珠季を一瞥する。和服姿の珠季は実際かなり目立つが、彼女の妖術の御蔭か、全く視線が集まってこない。

普通は学園の廊下に和服コスプレイヤー（尻尾や獣耳などで）が居たら、嫌でも視線が集まる筈だ。

だが、擦れ違う生徒達にとっては珠季の存在などは始めっからなく、唯の何も無い空間と認識される。

故に気を付けながら歩かないと誰かにぶつかるが、珠季は欠伸をしながらも平然と生徒達の波を躲していた。

「それでフィーナ殿。昼食は何処で食べるのじゃ？ 食堂には行かぬようだしな」

「中庭にいい場所があるから其処で食べるの。今日は天気が凄くいいから、お弁当日和だよ」

ニコニコと笑顔を浮かべながら弁当箱が入った袋を持ち上げ、珠季に笑い掛ける。その足取りは、心成しか何時もよりも弾んでいる。

うん、誰かと学園で昼食を取るのは久しぶりかなあ。ティファは生徒会長としての仕事で忙しいし、何時もは1人だったから。

タマキちゃんも一緒に来てくれると分かってから、嬉しくて色々を作り過ぎちゃった。けど、余ったら余ったで家で食べればいいよね。

誰かと昼食を取る、今まで当たり前にしてきた事が、高校に入ってからまるで出来なくなった。

1人で食べるご飯ほど、淋しいモノはない……。それ故に、一緒に昼食を食べてくれる珠季の存在に、フィーナは心の底から喜んだ。

広がる草、揺れる木漏れ日。広い楕円状の中庭は緑に溢れていた。人工的な構造物は殆どなく、まるで森の一部を切り取ったかのような光景だ。

進めば進む程に豊かな自然が溢れ、綺麗な花畑や、透き通った湖がフィーナ達を暖かく迎えてくれる。

耳を澄ませば何処からともなく小鳥の囀りが響き、ちゃぷんと跳ねる水の音が聞こえた。

そして何より圧倒されるのが、超巨大な大樹だ。樹齢何百億年と思われる、天に向かって聳え立つ巨木。

天辺を見上げようとしても、高過ぎて見上げ切れない。此処が本当は学園の敷地内だと忘れ去られるほど、自然が伸び伸びと生きていた。

「これは凄い……。中庭と言うよりは最早、森其の物じゃな……」

「うん、そうですね？ 私も最初に此処に訪れた時は圧倒されたよ」

ご機嫌なフィーナはルンルンとステップしながら巨木の木陰に移動し、呆然と突っ立っている珠季に手招きした。

とある少女と狐の1日(6)

「学園の広さと森の広さが釣り合わんのう。空間を弄っているのか？」

ルーティス魔法学園もそれなりに広いが、この中庭、と言うよりは森も随分と大きい。

校舎は四角形で囲む様に建てられているのだが、その校舎の大きさと森の規模が明らかに違い過ぎる。

それにあの巨木、外からは全く見えていなかったのだ。あんなデカイ木があれば、かなり目立つ筈だ。

つまりは、空間でも捻じ曲げない限り校舎の輪の中には入り切らないという事。珠季はその結論に至った。

「良く解ったねタマキちゃん。どんな魔法を使っているかは知らないけど、空間には何かの魔法が掛かっているらしいの」

「だから校舎の反対側に行く時は迂回しないと余計に時間が掛かるね」

最後にそう付けたすと、ポンポンと隣の席を叩いて座るよう促す。珠季は促されるまま草のクッションの上に腰を下ろし、フィーナは袋から「重箱」を取り出した。

ソレを見た珠季を目を丸くし、二段階の重箱を凝視する。明らかに2人で食べる弁当のサイズではない……。

こ、これは……ちと多過ぎんかのう……？ 妾の胃袋にはこんなに
入らんぞ……。

大は小を兼ねると言うが……大を兼ね過ぎじゃな。こんなに食べた
ら太ってしまうのじゃ。

太った妾の醜い姿など、十夜殿には見せられん。……じゃが、折角
フィーナ殿が作ってくれた弁当を残すのも申し訳が立たない……。

どうする……妾はどうすればいいのじゃ！！？？ 誰かへるぷみゝ
！！

「ではでは、お弁当の中身と御対面」

そんな珠季の心情など露知らず、まずは一段目の蓋をパカッと外し
て中身を曝け出した。

綺麗に並んだ狐色。重箱には所狭しと横に長い丸い物体が敷き詰め
られ、風に乗って漂ってきた酢の匂いが鼻を燻る。

揚げの間からはふつくらとした酢飯が微かに顔を覗かせ、今か今か
と食べられるのを我慢していた。

まあ、平たく言えば唯のお稲荷さんなのだが……。

「お、おおおおおおおー！！！！こ、この形状、そして香ば

しいこの匂いは……!」

妾の超超大好きなお稲荷さんのじゃあああああ!!!!!!
さっすがフィーナ殿、解っておるのじゃ!!!!!!

目を星のようにキラキラと輝かせ、口から溢れ出しそうな涎。九尾をブンブンと振りながら、お稲荷さんの団体様を凝視する。

「あはは……タマキちゃんってお稲荷さんが好きなんだね」

乾いた笑みを浮かべながら、その様子をフィーナが見ていた。

とある少女と狐の1日(7)

「モグモグ……美味しいのじゃ……美味なのじゃ」

片方はお稻荷様の団体様、そしてもう1つは唐揚げや卵焼き、鯛と牛蒡の煮付けやサラダ等、おかず様御一行が待機している。

珠季は右手にお稻荷さんを持ち、左手で唐揚げを摘みながら至極満足そうな顔で何度も頷く。

フィーナ殿は料理が上手いのう。どれも美味し過ぎて手が止まらぬ。

お稻荷さんの味付けも妾好みじゃし、言う事なしじゃ!! 100点満点中胸を張って100点と言える。

唯……こんなに美味しいと、食べ過ぎた後が怖いのう……主に体重方面で……。

……ふむ、じゃが、しっかりと運動をすれば多分大丈夫じゃろ!!
妾のプロポーションはこれくらいじゃ崩れぬわ!!

胸奥で自分に言い聞かせる様にしながら料理を物凄い勢いで平らげていき、そんな珠季の姿にフィーナは「美味しい?」と問い掛ける。
笑顔で料理を頬張る珠季の姿にその質問は愚問だが、自分が作った料理は誰だって言葉にして褒めてもらいたいものだ。

「うむ……モグモグ……フィーナ殿の作る料理はどれも……アグアグ……絶品なの——んごおっ!?!?」

食べながら感想を述べていた珠季は案の定、食べ物に詰り、「ゲッホゲッホ」と咽る。

そんな彼女にフィーナは慌てて水筒を出し、麦茶が入った容器を差し出した。

「ゴクゴク……ああ、すまぬ。ちと口に物を入れ過ぎたのじゃ」

「もう……吃驚したあ。料理は逃げないから、もつと落ち着いてゆっくり食べよう?」

「そうじゃの」と、苦笑いしながら頷く珠季に、フィーナも微笑み返し、料理を堪能していく。

臆て、最初は多いと思われた料理達は全てフィーナ達のお腹の中に納まるのだった。

「あふう……何だか眠くなってきたかも……」

口を手で覆いながら欠伸をし、両腕を空へと伸ばして伸びをする。

青い空には白い雲がふわふわと漂い、肌に心地の良い風は食後には特に眠気を誘う。

風が吹く度に木々がサァーと波打ち、何処からともなく漂ってきた花の香りを口一杯に吸った。

巨木の近くに移動したフィーナは木に背中を預け、瞼を閉じる。果てしない時を生きてきた大樹は彼女の身体を支え、見守る。

穏やかな、ゆっくりとした時間が流れていた。少なくとも、フィーナにとっては淒く平和な時間である。

「ふむ……眠ったか……」

数分で寝息を立て始めたフィーナの姿を一瞥すると、隣で座っていた珠季が急に立ち上がる。

そして、視線を遠くに向け、とある位置を睨み付けた。

「さてと……いい加減、姿を表したらどうじゃ？ 貴様等の気配など、最初から気付いておる」

普段の穏やかな声音ではなく、殺気が籠った悍ましく低い声。その声はゆっくりと空間に浸透した。

とある少女と狐の1日(8)

先程まで涼やかだった風の音が、急に不気味な、嫌な音へと成り変わる。

沸々と湧き上がる邪悪な気配にその場の穏やかな空気が侵食され、空を黒い雲が突如覆った。

太陽の光が遮断され、先程まで幻想的に美しかった景色は闇へと閉ざされ、一際世界が黒くなる。

そして森が、まるで警告をするかのように激しく荒れ、突風が木々を揺らし続けた。

来る――

そう珠季が悟った時、不意に、数メートル先の地面の影が、不自然に歪んだ。葉や枝の影を映した地面がグニヤリと蠢き、離れた影を吸い取るかのように一箇所に集まって行く。

同じような現象が眼前で何度も発生し、1つ、2つ、3つと、影の集合体が数を増やしていく。

珠季は何時でも攻撃態勢に移行出来る様に腰を落とし、九尾をピンと立てる。後ろで寝息を立てるフィーナを一瞥すると、珠季の尖った爪が更に伸びた。

鋭利な形状から、まるで刃物みたいだ。爪なのに、研ぎ澄まされた刀のように光沢している。

懸て影は、実体化するかのよう^に地面から突き出し、グニャグニャと蠢きながら少しずつ形を成していく。

そして影は、「人」となつて珠季とフィーナを囲んだ。

ソレは以前に、十夜がこの世界に来る前に倒した影と酷似している。唯一違つとすれば、それはアレ等の色だ。

十夜が倒したのは唯の黒、しかし、今眼前に立つアレ等は“紅”なのだ。地面と完全に分離した瞬間に身体の色素が一瞬で変わった。

鼻や眼などの顔を造形するパーツは変わらず無く、のっぺらぼう。だが、アレ等が完全に顕現した時、珠季の瞳孔は鋭く細められた。

此奴等の気配……微かだが、^{おちがみ}墮神と似ておる……。もしや、アレの眷属が何かか……？

だとしたら、少しばかり面倒じゃな……。この一件、妾だけの力で解決出来ぬかもしれん。この仕事は本来、十夜殿の仕事じゃからな。

此奴等を倒したとしても、本体を倒さなければ意味が無い。恐らくアレ等は本体の分身か何かじゃから、倒してもまた懲りずにやつて来るじやろつ……

何故フィーナ殿が墮神に付け狙われるかは解らぬが、帰つたら十夜

殿に相談せねばならんな。危険な芽は早めに摘むんで置いた方がいいじゃろつし。

さてと……それじゃ、今は目の前の降り掛かろつしている火の粉だけは払っておこうかのう。

とある少女と狐の1日(9)

「今更じゃが……引く気はないかの？」

眼に注げるたげの殺気を込め、影達を睨み付ける。彼女の周りを包む空気が急激に冷たくなり、空間が殺伐と化した。

大抵の人間なら直視したたげでも腰を抜かす程の殺気だ。だが、影達は揺ら揺らと身体を揺らすだけで、反応がまるでない。

自己が欠如した操り人形としての反応なのか、それとも珠季の殺気など屁でもないのか……まあ、恐らく前者なのだろうが。

反応が全く見られない影に小さく溜息を零すと、面倒臭そうに肩を竦める珠季。憂いた表情はそれはそれで美しく、儚く見える。

……ふむ、話し掛けるだけ時間の無駄じゃな。妾の殺気で恐れ戦いて逃げ出さぬし、殺るしかないかのう。

唯、堕神は自己再生能力に長けているからの。此奴等も分身体じゃから、核を潰さぬ限り永遠と再生し続けるじゃろう。

多少は面倒じゃが、妾の敵ではない。悪いが直ぐに終わらせてもらうぞ……!!

銀色の瞳が妖しく輝いた瞬間、その場を轟音が轟く。衝撃で土や葉が舞い、珠季は既にその場から掻き消えていた。

一瞬の事に反応出来ず、呆然と立ち尽している影達に珠季が物凄い

速さで肉薄し、彼女の両腕が伸びる。

その刹那、珠季の手がブレ、肉眼では決して追えない程の疾さで初撃、次撃が放たれた。

先手必勝とばかりに空を手刀が斬り、爪が奔る。常人では絶対に捉え切れない一撃は一体目の胴を真つ二つに裂き、次撃で吹き飛んだ上半身を一刀両断にした。

更に左手を手前に引くと、その掌の上に突然ボツと炎の塊が出現し、轟々と燃え上がりながら巨大化する。

「燃え爆ぜろ！！」

被った左手から火球が投擲され、酸素を吸収しながら3つ分にバラされた影に迫る。そして、着弾した瞬間に大爆発した。

聴て煙が晴れたその場所には、燃えた地面と無傷な珠季だけが立って居た。

最初から爪で斬る必要がないと思われるが、実はそうでもない。分断しない状態で火球をぶつけたとしても、回復能力が炎を相殺し、全くダメージを与えられないのだ。

故に始めは再生が追い付けない程度にバラバラにし、身体の再生に手間取ってる間に一気に燃やし尽くす。これが一番倒すには楽な方法だ。

しかし、火球を投げる時は何時も、どうしても大きな隙を作ってしまう。つまり、それは彼等に攻撃権を与えてしまうのと同義。

その隙を影達が見逃す筈もなく、両腕を刃物のような鋭い形状に変形させ、一気に珠季に殺到する。

珠季は逃げる訳でもなく、怪しげな黒光りを放つ刃物から視線を逸らさない。その眼は絶望に染まっておらず、あるのは自信1つだけ。

そして、数々の刃物が珠季を貫こうとしたその刹那――

白と青が入り混じった閃光が珠季と影の間を弾け、耳鳴りになりそうな程の爆音が突如劈く。その青白の閃光に影達は弾き飛ばされ、珠季だけはニヤリと笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2269v/>

異世界に召喚されて

2011年12月5日22時42分発行